
ウエストルム・キングダム

楠木あいら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウエストルム・キングダム

【Nコード】

N5710U

【作者名】

楠木あいら

【あらすじ】

ロボットの従業員しかいない遊園地ウエストルム・キングダム園長と関係を持つ主人公、順谷は足を踏み入れ後継者争いに巻き込まれていく。

ロボットの遊園地

現代世界において、ロボットしかない王国が存在した。

僕の住んでいる遊園地『ウエストルム・キングダム』

お客様と、この施設を取り締まるただ一人の人間を除いて、そこで働くすべての者は人間に作られし機械たちだけ。もちろん、僕も申し遅れました、僕はソシエゴ。衛生業務を管理しています。それと…

「すび〜」

隣で寝ている（正しくは充電）ロボットとは思えないセキュリティを担当するアネシスの弟でもあります。

「ピピッ。ピピッ」

充電終了を合図する電子音を止めて、ソシエゴはいつもの通り、姉ロボットを起こす作業にとりかかる。

いつものようにソシエゴは、2つのベッドしかない殺風景な部屋を見渡した。

何も置かれていない部屋には、無数のケーブルが二つのベッドに向けて円を作るように配置されている。

ベッドは膝ほど高く、それを支える柱には蔓のように絡みつくケーブルがベッドの中にまで繋がっていた。

ベッドとはいったが、ロボットが使用するベッドは四方八方をガラスの板で覆った棺桶のようなものであった。

24時間、充電中であれ部下ロボットの指揮がとれるように姉さん」

ガラスで作られた棺桶のようなベッドの蓋を開けて、幸せそうに眠るソシエゴの姉、アネシスを見つめ、ふうとため息をついた。

「充電、終わりましたよ。朝です」

「ZZZZZ」

二人は、職種を左右するプログラムと、姉弟を判断できるおおまかな外部と制服以外、すべて同じ部品、プログラムで出来ているのだが…

ソシエゴは、本当に姉がロボットなのか疑ってしまふ。ロボットならば、電子音、ましてや弟の面倒をかけなくても自動で目覚めるはずなのに…。

清潔感のある白いシャツとズボンの上に水色のフード付きマントを羽織り、長く黒い髪を一つの三つ編みにした衛生担当のソシエゴに対し、セキュリティー担当はまったくの正反對な姿をしていた。

アネシスの制服は、店やビルで良く見かける警備員の制服と同じだが、その色は赤く。髪も金色で二つに分けて頭上高く結び三つ編みにしていた。

「起きてください、また、遅れますよっ」

語尾を強めて、揺り起こすものの、まったく反応する気配すら…

「いけない、今日は待ちに待った日だったんだっけ」

何かを思い出したアネシスは元気に飛び起きて、充電装置から飛び降りた。

「そっしい。早く、早く」

弟の存在を忘れたわけではないが、その苦勞を知らず、アネシスは自動扉を開けながら弟をせかした。

起こす苦勞がなかった事に喜びつつも、ため息が出てしまうソシエゴは、いつものように走り始めた。

二人は、充電部屋の上階まで定期時間まで集合しなければならいのだが、アネシス達はいつもギリギリで全速力で走らなければならなかった。ロボットなので息切れすることはないが…

「いつも思っただけれども、そっしい。どうして、早く起こしてくれないの？」

「十分前に起こしています。そもそも、どうしてロボットが他ロボットに頼らなければならぬんですか？」

息切れしない機械たちは走りながら姉弟口論を始めた。

「アネシスが起きれないのは、アネシスのせいじゃ…わっ」

目の前の通路から人影が現れ、危うくぶつかるところであったが、そこはロボット。アネシスは後方に下がり、仲間との接触をさけることができた。

「エムカあ」

アネシスが歓声をあげて仲間を見上げた。

エムカ・サービス担当。

外見年齢が高校生設定になっている姉弟と違い、エムカは少し年上の二十代。アネシスと正反対な落ち着きがあるが、ソシエゴよりも機敏な顔をしていた。

「エムカさん、おはようございます」

「二人とも、おはよう。…って、2人に会ってことは、相当ヤバイってことね」

エムカは黒色のスーツにスカートではなくズボンをはいていた。

同色のローヒールがあわただしく床を蹴って走り始めた。

「ちよつとお、エムカ。それじゃ、アネシス達がいつつも遅刻しているみたいじゃないのよお」

「いつもじゃない」

反論はできなかった。

全速力で走る3人だが、体力優先に作られたアネシスが、自動扉下に敷かれたマットを踏んだ。

「おー。アネシス姉弟はともかく、エムカが遅れるなんてめずらしいな」

自動扉が開いた瞬間に部屋にいた仲間が声をかけた。

施設担当・バッテリー

遊園施設を始め敷地内にある建物の設置、改造、機械以外の補修作業を担当するロボットらしく恰幅のよい大男であった。

外見年齢はエムカより少し上で、灰色の短い髪が一撮みだけ長く、頭上から結わえていた。

深緑色のズボンに黒のランニングシャツという頼もしい格好だが、作業時以外の制服として、その上からソシエゴと同じデザインをした紺色のマントを羽織っている。

「僕は、姉さんのとばっちりを受けているだけですよ」

「私の場合は、ボスの命令で資料を作ってたから」

後から部屋に入ってきた2人は、早々に汚名を消した。

「ちよつと、アネシスだけ悪者じゃないのよお」

「事実じゃないですか…」

「はいはい。アネシス。ソシエゴを睨みつけしないで、さつさと『朝の切り替え』をしてちょうだい」

ロボット達が集まる部屋奥から、仲間ロボットの声が登場した。

スージー。ウエストルム・キングダムに存在するすべてのデータを取り締まる、唯一部下ロボットのいないロボット。

モニター前の寝椅子に裾の長い動きにくいマントを身にまとった女性の体を横たわらせ、しやかな髪はプラチナブロンドをしていた。

「開園3分前よ」

スージーの前には大きなモニターと、その下に無数のモニターが何べらられていた。

アネシスは小さなモニターに交じって、埋め込まれている黒いモニターの前まで進んだ。

「アネシスが命令する」

正式名称を口すると、アネシスの声に反応した事を表わすかのように、黒色のモニターに『go program』という緑色の文字が現れた。

まるで会話するように命令しているが、アネシスの声はプログラムとして同時に出力している。

「アネシスが命令する。」

夜間巡回してる、全てのセキュリティロボットは、業務を終了し、各自の充電場所へ移動』

黒いモニターから『go program』の文字が消え、かわりにウエストルム・キングダムに設置された25の充電施設の名称と『OK』の文字が現れた。

アネシスはそれを確認してから、次のプログラムを始める。

『アネシス-1が命令する。開園時に活動するセキュリティロボットは、すみやかに各配置場へ移動』

モニターの『OK』を確認してから、アネシスはソシエゴと場所を替えた。

ソシエゴが終われば、次はエムカが同じ言葉を自分の部下ロボットに命令する。

これが開園前、朝の一時であった。

ロボットはエネルギーと命令さえあれば時間など関係なく動けるが、そのロボットたちは人間のために朝という時間を作り、それに従う。

「なぐんか、1日の始まりって感じでいいよね」

人間に近い性能を持つロボットの一体、アネシスは弟に言った。

「僕たちは開園に会わせてプログラムされているんですから、当然といえば当然の行動。『朝』という認識はありますが、姉さんが言う気分には思えませんね」

機械的に動くソシエゴは姉とは違う考えをもっていた。

「そもそも。僕たちは声を出さずにメールのようにプログラムを送信できるのに……」

ロボット達は、その体の中にパソコンや携帯電話を埋め込んだのと同じ状態であった。

なのに、毎日声を放ってプログラムを唱えるのも、ソシエゴが反対できないのも

「仕方ないでしょ。ボスが決定したことなんだから」

ロボット達を支配する王の存在にあった。

ロボット達が『ボス』と呼ぶ、1人の人間は姿を現わさないが、存在は触れそうなほど近くにいるのと変らなかつた。

「それに、私はプログラム送信機能はないからね」

命令を終えたエム力が姉弟の会話に加わった。

「エム力は、より人間に近い状態に作られたからね。その次がアナシスだけでも」

「オールクリア。ボスにを伝えます」

モニター前の寝椅子からスージーの声が聞こえ、開園前の引き締まった空気変っていった。

ロボット達のいる建物の下、敷地内にいるロボットたちは、人間のように同様に挨拶をかわすことも、各配置ごとに朝会をすることもなく、ただ淡々と始まりに向かって準備を進めていた。

静寂に包まれた中で、ただ物音のぶつかる音だけが響く遊園地内の光景は、何か無気味なものがあつたが、それを目にして感想を述べる人間はいなかった。

「開園、1分前。ボスからの開園許可がありました。

アナシス」

スージーに呼ばれたアナシスは、再び黒いモニターの前に進み、アナシスもまた淡々とプログラムを唱えた。

『アナシスが命令する。』

ウエストルム・キングダム の正門を管理するセキュリティロボットに告げる。

すみやかに門を開けよ』

モニターに『OK』の文字が出たとき、開園のメロディーが鳴った。

こうしてウエストルム・キングダムの朝が始まった。

入園

『ご利用ありがとうございます。バスは間もなく、到着いたします。お降りの際は、お忘れ物のないよう、お気をつけ下さいませ』
アナウンスが消えるのと同時に、バスは巨大駐車場に入って行った。

大型の送迎（無料）バスは、わずかなスペースを捜し回る必要も、遠く離れてしまい園内に向かって歩く必要もなく、入場門近くで止まった。

「ここが、ウエストルム・キングダム…」

その者は、いそいそと進む中学生たちの後ろから、ゆっくり進んだ。

おおるいじまや
大累順谷19才。

夏休みを利用して訪れた順谷に、彼女やむさくるしい男友達という連れはなく、ただ一人だけで、この遊園地に足を踏みしめた。

「…あのう」

バスを降りる直前、順谷はおそろおそろ運転手を見つめた。

「ここは、ロボットだけの施設と聞きましたが、あなたも…」

「ロボットじゃないよ。道路交通法でロボットの運転は許可されていないからなあ。私は下請け会社の者で運転しているだけだよ」

ちよつとホツとした。こんな人のよさそうなおじさんがロボットだなんて考えたくない。

「にしても、めずらしいね。一人で」

「ええ」

とりあえず答えた。

俺の場合、遊びではなくある人を探ねるため。

この遊園地に住む、ただ1人の人間に。

バスを降りた順谷は一路、正門に向かった。

「ようこそ、ウエストルム・キングダムへ」

メタル色の柱に電光掲示板が取り付けられ、言葉と声で歓迎した。
ウエストルム

手紙では『あなた（がた）の』をラテン語にしたらしい。
人に仕えるロボット。

『自己の欲望を持っていない機械にとって、他人のための王国になるから』とおじさんは語っていた。

しかし、なぜyou rではないのか、なぜ、ウエストルムはラテン語なのに王国は英語なのかは書いてくれなかった。まあ、無茶苦茶なミーミングセンスを持っているからだろうけど…

「いらっしやいませ。入場券は、こちらで、お買い求めくださいませ」

門をくぐると今度は人と間違うほどそっくりなりロボットが近づいてきた。

順谷は視線を一通りめぐらせてから、首もとのプレートを見つめた。

プレートには『EMカ・0028137』と刻まれている。順谷にはわからないがサービス担当をする案内ロボットであった。

「チケットは、もらって来たんだ」

順谷が手紙と同封されていたチケットを見せると、ロボットはにっこりと笑みを向けて一礼してから離れていった。

「入場チケットを拝見します」

前進した先には、人1人が入れる狭いトンネルと。今の人より年上の女性のロボットが立って手を差し出しているだけで、駅の自動改札口を思わせる機械というものはなかった。

順谷がチケットを渡すと『ピッ』とかすかな音を共に…消えた。

「…」

「チケットを拝見させていただきました。お客様、どうぞ中へ」

目をぱちくりしながら十数歩で終わるトンネルを抜けると、まったく同じロボットが、にっこりと微笑んでいた。

「チケット及び、危険物等のチェックをさせていただきました」
何の変哲もないトンネルとばかり思っていた順谷は、驚き後方を見つめてしまった。

「お客様、これが園内すべてのアトラクションに使用できるパスポートでございます。紛失、損傷にお気をつけ下さい」

紐の付いた、金色のプラスチックカードを再び首にかけた。

「楽しい、一時を」

一礼するロボットを通り過ぎて、順谷は園内を見渡した。

トンネルを出た先は広場になっていて、目の前らは色とりどりの花が指していた。

「ようこそ〜ウエストルム・キングダムへ〜」

その花壇の中央にたつ新たなロボットは歓迎の声を上げ、人間を見上げさせた。

今度のロボットは典型的なタイプだった。

立方体の頭に長方形のボディ。手足は円柱になっていて、膝や肘は球体になっていた。

顔はげじげじ眉毛に半球の中にある点目で、半円の口で笑みを作っていた。

色はオレンジっぽい木目で、一応植物っぽいイメージを持ったロボットらしい。

ゆっくりとした機械的な動きは、人間に近いロボットで驚きすぎている順谷にとってほっとさせた。

「あなたと私が出会った記念に、幸運のクローバーをプレゼント」

優しい声のロボットは、左手に持っている鉢から一本しか生えていたメタル色のクローバーを順谷に渡した。

「一本しかないのに…もらっていいの？」

「大丈夫です。『魔法の鉢』ですから、すぐに生えてきます」

人の言葉を聞き取り即座に答えるよりも、早く、オレンジ色のクローバーが鉢植えに姿を現わしていた。

「へえ」

機械的な生命力に納得した順谷は、改めてメタル色のクローバーを見つめた。

『さて、これ、どうしよう?』

「何にでも使えますよ。紐を付ければストラップにもキーホルダーにもなるし。本をはさむしおりにもなるし」

順谷の行動から考える事を的確に判断し、答えたのはサービス業務担当のエムカであった。

「……………」

近づいてきたのは、シナモン色の長い髪をさらりと揺らして、黒のスーツを来た女性。俺と同じぐらいか?でも、彼女もロボットなんだから年齢なんてあるのだろうか…

「ようこそ。大累順谷さん」

他のロボットと明らかに違うとはいえ、俺のフルネームを呼んだロボットに戸惑を感じた。

「……………」

「ボスから、順谷さんの事は聞いてます。私は、ウエストルム・キングダム、サービス担当およびボスの雑用係をしているエムカと申します」

「え。ああ、どうも」

差し出された手を握ると…

「あれ?温かいし、固くない」

「ロボットとはいえ、私の場合、より人間に近く作られていますので」

俺が持っているロボットの常識は、はるかに進化しているようだ…。

「おじさんは、元気にてしますか?」

俺の問いにエムカと名乗るロボットは苦笑した。

「?」

「本当ならば順谷さんとすぐに会いたかったのですが…とてもスケジュールがとれなくて」

まあ、そうだろうな。

俺の『おじさん』という人は。24時間、365日。遊園地がオープンしてからずーっと外に出てこない。『変った人』だから。

…手紙をもらって、ここに来たとは言え、正直いって、あまり会いたくない人でもあったから、少し、少しだけほっとした。

「スケジュールの方は、何とか調節しますので、その間、順谷さんは『遊園地内を堪能しておいてくれ』とボスからの伝言です」

「ボス…」

「ええ。ウエストルム・キングダム王となる、あの方が『ボス』と呼ぶようにと言われます」

「……………」

あの人らしいかもしれない。

心の中でうなづいてから、俺はエムカさんの首もとにもあるプレートを見つめた。

エムカ - 1

「エムカさんは、番号が一桁なんですね」

年上なので『エムカさん』と言ったら『エムカ』で良いですよと言われた。

おじさんの側にいるロボットだから、当然なんだろうけれども。

「コマンダーロボット達は、皆一桁ですよ」

「コマンダー？」

「はい。この王国の王、ボスの下にいる六体のロボットの事です。

データー処理担当のスイージィ

セキュリティ担当のアネシス

衛生担当のソシエゴ

施設担当のバツトレイン

それとサービスを担当する私。

スイージィ以外の者には、部下となるロボットがいます。私たちはボスから命令を受け、手足となる部下ロボットに命令をくだします」

「じゃあ、駐車場や入場門：それと」

四葉のクローバーをくれたロボットに視線を向けた。

「はい。彼らのプレートに刻まれた名前の者が指揮しています。ちなみに、この子は『エムカー00001』私が担当するロボットです」

「コマンダーエムカのロボットです」

オレンジ色の典型的なロボットは、軽く会釈をしてくれた。

「それと、あの壁のようなのも、実はロボットなんですよ」

エムカはくるりと振り返り、前方にそびえ立つ大きな壁を指さした。

「嘘……」

四葉のクローバロボットと、エムカさんの出現で言うのを忘れていたけれども、広場先にある敷地内を囲んでいる…と思う大きな壁があった。

壁：六階建てぐらいある壁なんだけれども、それは四葉ロボと同じ形をしていて、それが一体だけじゃない。

ここからは3、4体しか見えないけれどもロボットと呼ばれた壁どうし、手となる部分をつないでいた。

「この子たちはセキュリティロボットの『アネシスー0001』0020』です。敷地内を輪になって囲み、外からの違法侵入者はいかセンサーを放っています」

ロボットとロボットの感覚はかなり空いているので不法侵入できそうなの…大丈夫なのかな…

ここから見える限り、どの壁ロボットも淡いオレンジや茶色など、土や木に近い色で人の威圧感を与えないようにしているのかなと、考えてしまう。

「まずは、ウエストルム・キングダム全体を見てもらいましょう。順谷さん、こちらです」

俺の手を取るとエムカさんは、そのまま前方に進んだ。

ロボットとロボットの間を通り抜けていけば、そのまま敷地内に

入れ、俺の目にもそこから遊園施設を目にすることが出来た。

両方の足をくつつけた所には、人が入れる自動扉があつて、広い空間が俺達を向かい入れてくれた。

「いらつしゃいませ」

声をかけてくれたのは3体のロボットと、同じ数のエレベーターで、セキュリティ能力のある壁ロボットは、展望台施設でもあるらしい。

どこのタワーや展望台にいるエレベーターガールたちも作られたロボット。でも、どのロボットも着ている制服と日本人カラー（髪や目の色）以外は人間のように区別できるようになっていた。体格も髪型も顔の形も。

ロボットと知らないで入ってきてても、何の違和感もなくエレベーターに乗れたんじゃないかと思うほど。

ロボットと知っている俺でも、首をかしげてしまうのだから。

閉じた扉が再び開いた時。『いらつしゃいませ』の聲が届いた。駐車場にいたのから全部そうなんだけれども、ロボットの声は人間のの発音と何一つ変わらない。

上階に待機しているエレベーターガールに会釈して、奥に広がる光景を一望した。

「うわぁ……」

セキュリティロボットでもある建物の中から見た光景は、おもちゃ箱を広げたように思えた。

彼女のいない寂しい大学生は、遊園地なんて行かないから。子供の頃に楽しんだ思い出と共に歓声が口から出てきた。

大小さまざまなアトラクション。メリーゴーランドや絶叫マシンや観覧舎……

「ロボットが管理するといっても、アトラクションとかは普通の遊園地と大差ありませんよ。でも人気アトラクションはどこにも負けません」

遊園地に興味がなくてもここの王国にの事はテレビとか良くやつ

ていて、俺も知っていた。

数ある絶叫マシーンに、それから未知なる恐怖感、お化け屋敷というものだけねども。

「絶望空間は、この間、テレビでやってましたね……」

「うふふふ。そうなんです。あれは、おもしろいですよ。でも、あまりにも恐すぎて、年齢制限と本当に体調の良い人じゃないと入れないようになってしまいました……」

制限することにより、さらなる人気がたつて、言ってたな……禁止されるとやりたくないのが人の心理なのか？

「……エムカ。それは、体験してきたのですか？それとも作ったんですか？」

「両方。私はサービス業務ですので。もちろん、実際（建物を）作ったのはバツトレインたちですけどね」

新しく開発できるっという事なのか？ロボットが？

「……」

「ん？どうしました？やっぱ、恐いですか？」

俺の沈黙にエムカは、にやっと笑みを向けてきたので、苦笑することにした。そういうのも、あんまり好きじゃないから……。

「これぐらいで恐がっていたらだめですよ。絶望空間の恐怖はメインにありますからね。」

メインはブラックホール空間と呼ばれ。一組、人団体ずつ入れるんです。薄明りしかない空間の中でランダムに決定される出口を自力で捜さなければなりません。

もちろん『脅かし』もランダムに発生しますから

「……それってアトラクションを越えてませんか？」

「……うん。ギリギリってところですね。もちろん、パニック状態になりそうだったら暗視カメラ付き誘導ロボットが出口に連れててくれます」

「……」

絶望空間の説明に寒気がしたものの、俺は改めてエムカ達を見ず

にはいらなかった。

後方にいるエレベーターガールや下で風船を配ったりごみを回収したり、アトラクションの運転し、客の出し入れをする従業員。

それらすべてがロボットなのだから。

ロボットって、こんなにすくなくなっているのか？

その疑問に答えるかのように、エムカさんは説明してくれた。

「ここが普通の遊園地と変わらないのは、そこに働くロボットがいかに人に近いか見せるためなんですよ。

いかに、人間背かいに違和感なく存在管理しているのか」

ロボットの基盤を作ったのが一人の人間。この国の王。

それも、俺には信じられなかった…。

「……………」

「ところで順谷君。お昼すぎているけれども、お腹すいてませんか？この上に飲食店がありませんけれども」

エムカは手首を見つめながら言ったけれども、そこに腕時計というものはなかった。

「あ、はい」

「それから、その荷物。邪魔になりませんか？ここは全部首にさげているパスカードで一枚あればアトラクションに乗れますし、買い物もできます。

ボスからしばらく滞在すると聞きましたので、手配したホテルに置かせますね」

てきぱきというエムカに『はい、お願いします』としか言えなかった。

エムカさんは左手を前に出し、右手でその光に触れた、途端…

ひ、皮膚がずれた…ロボットだから、驚く必要ないかもしれないけれども。

皮膚が外れた手の甲は携帯電話のように12個のボタンが現れた。画面下にある12個のボタンをものすごい速さで打ち、手の甲を口に当てた。

エムカの電話は二つあった。

一つは英語のような、意味不明なもの。プログラムと呼ばれる言葉なんだろうけれども。

もう一つは、俺でも理解できた。

「私。『フォレス』の飲食店にいるわ」

上階にあがるためのエスカレーターに移った時、さっそく手の甲について聞いてみた。

「そう、携帯がはめ込まれているのと、かわらないわよ」

やっぱりロボットだから、何でも組み込めるらしい。でも、エムカは少々不満気味だった。

「でも、面倒なんですよ。他の子は、わざわざ声をださなくても、頭の中でプログラムを送信できるっていうのに。より人間に近いサイビスのコマンダーにはそれができないんです」

「それって、テレパシーになるんじゃないですか」

よくよく考えてみれば、最近の機械って超能力に近い力があるよ。うな。切断することなく輪切り状態の脳が見えるMRIやX線。これって透視になるし。飛行機とかは…浮遊能力…って言えるし。

今いった携帯だって意志伝達や声がすぐにきける。でも、それを組み込んだロボットは…本当の超能力とかわからないんじゃないのか…

ロボットはますます進化していた。

もし彼女（彼）たちに欲が芽生えたら。それを作った人間たちはなす術もなく滅ぼされてしまうのかもしれない。

でも、ここはウエストルム・キングダム

おじさんの手紙にも、こう書かれていた。

私のロボットたちは、皆、すばらしい子たちだよ。もちろん、力に溺れ人間に刃向かうことはない。彼らに『野心』という言葉はプログラムされていない。ロボットたちは、誰かのために働く事を望んでいる。

彼らは主人に使えられず鉄屑になることを恐れている。と、

「……………」

ロボットと人の違いに悲しいものを感じつつ、俺は運ぶために存在する機械、エスカレーターを下りた。

ロボットばかりに目を向けていたものの、ウエストルム・キングダム以外でも人間のために働く機械の存在を知らされた。この自動扉だって、野心は持っていないのだから。

人間に使えることがなくなれば、廃棄処分とされ艶やかなガラスは無情にに割れていく。

「いらつしゃいませ」

首を振って、ため息をついてから。その考えをとりあえず消すことにした。

飲食店は広すぎず、狭すぎすの空間で2〜8人が向かい合わせに座れるよう机が配置されていた。

平日の昼過ぎ。閑古鳥は鳴いていないけれども客は多いとはいえない。中、エムカは6人ぐらい座れる席を選んだ。

ロボットの飲食店と聞いて、メニューをタッチパネル式のボードで注文するのかと思っていた。

「そういう飲食店も園内ありますよ。でも、ここは人間社会の変わりませんよ」

「いらつしゃいませ」

俺らより同じぐらいのウエイトレスが水を運んできた。

「ご注文の方は、お決まりでしょうか」

昨日の言ったファミリレストランと変わらない、口調や物腰。

「じゃあ…Aセットで」

「Aセットですね。こちらはドリンクサービスとなっております。お飲物は何になさいますか？」

「じゃあコーヒー」

「いつ頃、お出ししまよう？」

マニュアル通りの問いはファミレスと変わらないけれども、愛想の方は昨日のバイトの子と比べれば、ロボットの方が良いな。

「一緒にいいです」

「私は、Dラインのドリンクを」

「はい。コマンダーエムカ」

「え。エムカも物食べられるんですか？」

「専用の飲物となりますが。サービス業務となる以上、自分だけ飲み食いしないのは失礼にあたると、ボスの命令です。ロボットは充電一つでエネルギー補充ができるんですけどね」

「お待たせ。コマンダー」

ウエイトレスが離れて数秒とたたないうちに声がした。

もう料理ができたのかと驚いたら、違った。

さつきエムカが電話した相手らしく、高校生くらい外見をしたロボットは動きやすい格好にランドセルみたいなカバンを背負っていた。

ロボットはヘルメットに肘と膝宛。つけて、足先はローラーブレード(?)を履いている…運び屋らしい。

「じゃあ、頼んだわよ」

「了解」

ランドセルみたいなカバンに、俺のリュックを入れるとロボットは元気に入り出した。

…しかし、あの足でよくエスカレーターに乗ったり下りたりできるな。

良い子の皆は真似しないでね。

携帯をかけた二つ目の相手は、食事中に現れた。

ガラス扉が開いた瞬間、エムカは無色透明なドリンクのストローを口から離し、手を振った。

「お食事中、失礼します」

現れた影は二人いた…いや2体かな。

さっきの運び屋と変わらない外見年齢になるんだけれども、今度の二人は明かに違う空気を持っていた。

「ふんふん。あなたが順谷？」

2人とも体格や大まかな顔形は変わらないのに、赤い警備員の制服を着た子は人懐っこそうな顔を間近に近づけて、好奇心の目を向けた。

「姉さん…失礼のないようにと、あれほど言ったじゃないですか」
水色のマントを羽織った大人しそうな子は、慌てて姉ロボットを後ろにさげせたものの、好奇心の目は向けたままだった。

「でも、ボスは好きなように順谷と接しなさいって言ってたじゃないの」

「限度があります。」

「すみません…うちの姉が無礼な行為を働いて」

「いや、別に」

「気にしてないっているじゃない。それに、そっしいの敬語使いまくりの方が順谷との距離を離しているわよ」

姉さんロボットの発言は以外と的を射つてたりする。

「でも、無理です。これが僕にプログラムされた、人との接し方なのですから」

長い三つ編みをした大人しそうな子けれども、男らしい。

「2人とも、言い争いは順谷さんに自己紹介終えてからにしてちょうだい」

エム力の的確な言葉に、二人のロボットは改めて一礼した。

「初めまして、順谷。私はセキュリティのコマンダーロボットアネシスで、こっちが弟のそっしい」

「…ソシエゴと申します。衛生のコマンダーロボットです」

「衛生というと、飲食店とかの取り締まりとか、やっているのかい？」

「はい。衛生、健康に関する事、すべてを担当しております。飲食店の検査やお客様及びロボットの看護、修復作業。園内の清掃など」

「今日は、2人が案内します」

「え。エムカは？それにロボットを指揮するロボットなのに、仕事の方は大丈夫なのかい？」

「エムカは、ボスに頼まれた仕事は山のようにあるの」

「アネシスは大きいため息をつき、弟は次の質問に答えてくれた。

「コマンダーと呼ばれるロボットは、ただ指揮するだけの存在。通常業務は二桁ナンバーのロボットが動いていますので」

「朝の命令以外、暇なのよね」まあ、アネシスは、遊べるからいいけれども」

「そうなんだ」

返答したところで、エムカが謝罪しながら立ち上がった。

「お食事中所、席をたつてすみませんが、どうしても行かなければならないので」

そういうと、エムカさんはそそくさと店を後にした。

「エムカは、ボスのお気に入りだからね、大変なの」

エムカの座っていた席にどっかりと座ったアネシスは、簡単に説明してくれた。

「まあ、エムカのおかげで、僕たちも助かっていますけれど」

「助かっているって？」

「順谷には、こっそり言っちゃうけれども。最近のボス、気むずかしくなってるね。ボスの下で働くロボットとはいえ、ちよっつと、ね」

ロボットも色々大変らしい…。

いつかは、あいさつしに行かなければならない者にとって、不安が増してきた。

エスカレーターの扉が開くと、いつものコマンダーたちの集い場兼朝の切り替えプログラム実効場所にエム力は到着した。

「楽しそうなことしているわね」

奥の寝椅子から一步も離れないスイージイは、起き上がることも振り向くこともなく同僚に聞いた。

スイージイ

寝椅子に預けるその体には。他のロボットと比べものにならない精密なデータ処理装置が備えられていた。

あまりにも精密で、ほつそりした体から思えないほどの重量により、自由に動くこともできなかった。

しかし、彼女も人に作られたロボットであり、動けない事に苦痛は感じることはなく、彼女に送られてくる大量のデータを処理していた。

ロボットにとって苦痛は自分の力が発揮できないことであり、発揮できず、鉄屑になること。スイージイも同じ概念を持っていた。

「眠り姫が、こんな時間に起きているなんて珍しいわね」

プログラムを処理、実行する時、その目は閉じられており、仲間の中からそう呼ばれるようになった。

「まあね。ところで、眠り姫。順谷さんたちはどこにいるの?」

しかし、本体が眠りに着いていても、中身は眠ることなく。王国内の情報収集するスイージイほど物知りなロボットはいなかった。

「絶叫ものの『断末BOX』よ。」

それはそうと、エム力。ボスから、例の企画、早く実行しさないってメールが届いたわよ」

「JBVSね」

「JBVS?」

「順谷さんを（J）びつくりさせて（B）ウエストルム（Vラテン語でVESTRUMになるから）仕組みを（S）わかってもらおう企画」

「…。わかりやすいわね」

スージーは一度、口を閉ざした。

「という事は。ボスは順谷さんを後継者に決めている事なのかしら」
「ボスからは何も聞いていないけれども。候補にあがっている、と推測できるわね。」

「ロボットは、ボスが決めたことに従うだけの存在。変わったら、それに応じるだけのもの」

「そうね」

会話終了と判断したスージーは目を閉じた。

仲間が目を閉じたと判断したエムカは、視線を部屋奥から離れた。
「…。後継者が決まる。これで、よんどんでいた空間に風が流れるのね」

エムカは、聞いていないかも知れない仲間に言葉を残し、先に進んだ。

一方

「大丈夫ですか？」

衛生管理のロボット、ソシエゴは順谷を不安げに見下ろし尋ねたものの、ベンチに横たえる俺は手を横に手って答えた。

「ほらあ。やっぱり、姉さんのお任せコースに問題があったんですよ」

アネシスの『お任せコース』とは

カメレオンの舌

断末BOX

と、後ろにそびえ立つ、バンジーコースター

名前の通り、どれも高速で動く絶叫ものしかなかった。

高校生になってから行くこともなかった者にとって、いきなりそれらを体験したら、どうなるか：おわかりでしょう。

「……………」

「順谷さん。お顔の色が悪いですよ。一度、ホテルで休まれた方が」
「いや。休んでいれば大丈夫だよ。それよりも、気になっているこ

とがあつてね」

俺は改めて2人を交互に見つめた。

見れば見るほど疑問がでてくる、この2人。

「順谷、もしかしてアネシスとそっしいの秘密じゃない？」

「秘密つて、やっぱり何かあるんだ」

「秘密？何のことです？」

何のことが分からないソシエゴはきよんととしていたけれども、

アネシスは俺の疑問に気づいてくれていた。

「順谷は、どうして、明るく元気なアネシスが警備で。地味なソシ

エゴが衛生担当のコマンダーロボットなのか。つて事でしょ」

「ああ。男女の差がなくなつたとはいえ。警備が女性で衛生が男つ

ていうのは…疑問になつていたよ」

俺は改めてアネシスの派手な警備服を見つめた。

「順谷の言う通りだよ。本当はアネシスちゃんが衛生でそっしいが

警備になるはずだったんだ」

「直前まで、そうだったんですが…僕たちの顔を見たボスの一言で

変わつてし待つんです」

「え…おじさんの一言で」

「はい。ボスの命令は絶対ですから」

「……………」

絶対厳守するロボットとはいえ、そんなわがままが通用する叔父

さんに感嘆してしまふ。

まあ虫も殺さないような優しい顔をしたソシエゴと元気いっぱい

…元気過ぎるアネシスでは、変更したくなねのは無理もないけれど。

「でも、赤い制服はアネシスだけだよ」

俺の視線に気づいていたアネシスは、念のためにと教えてくれた。

元気いっぱいのアネシスが急変したのは、その直後だった。

それはソシエゴも同じ…いや、少々戸惑った顔をしていた。

「…2人ともどう…」

問いかける前に前方から黒い風が現れたと思いきや、自分の体が

ふわりと浮き上がった。

「え、なっ、おい……」

突然現れたロボットに持ち上げられたと気づいたときにはもう、2体の姉弟ロボットは下の方に小さくなっていた。

その光景を目の当りにした2人は驚いた表情わていたものの、動く気配はなく館がるの様に飛び上がっていく1人と1体を眺めているだけであった。

「おたつやで〜」

「こら、そっしい。手なんか振ったら順谷にバレルでしょ」

呑気に手を振る弟の手をさげてから、アネシスは口を一度閉ざしてから大きく開いた。

『アネシス-1が命令する。』

活動しているすべてのセキュリティロボットは、エムカー00372を見つけ出し、報告と追跡を開始するように『

プログラミング言語に訳した言葉は、アネシスの体内に組み込まれている携帯のメール機能で送信した。

アネシスの命令は、ウエストルム・キングダム敷地内にある収容局に一旦送られ、そこから複数にコピーされてアネシスが管轄するロボットたちだけに送信されていく。

「送信完了」

ロボットだから出来ること。

「さて、さっそくエムカが指定したA地点へれっごーよ、そっしい」
体内に組み込まれている携帯電話機能は、もちろん電話として役割も備えている。

「あ、エムカ。今、無事に連れ去れたところだよ」

頭の中でエムカの声が届いたアネシスは声を出して、相手に返答した。

「姉さん……。見えない相手に声を出して返答すると、変に見られま
すよ」

回りの目を気にするソシエゴに注意され、アネシスは口を閉ざし、

頭野中で声を放った。

『で、今からA地点に向かうからね』

『え？どういふ事？』

「え？」

閉ざしていたはずの口から疑問の声が出た。

『今からJBVS企画をはじめるところよ。アネシス達が、どこらへんにいるのか聞こうと思って電話したんだけど』

「…え。ちょっと待ってよ。じゃあ、今、順谷をつれていったロボットは？」

… … …

答えは簡単。

本当に連れ去られた…。

誘拐

「そっしいの大間抜け。本物の誘拐犯に手を振ってどするのよ」

「そういう姉さんこそ、どうして気づかなかったんですか。あんなに凹凸のはげしいロボットをボスが工場に許可して作らせるわけないじゃでですか」

二人は言い争いながら、とにかく連れ去れた方向を走った。

『アネシス-1が命令する。』

活動している全てのセキュリティロボットは、未確認ロボットを捜しだし、報告及び追跡するように』

『ソシエゴ-1が命令する。』

活動できる全ての衛生ロボットは、未確認ロボットを見附だし次第、報告するように』

それぞれのプログラムを放ってから、2人は仲間に通信を始めた。
『ねえ、スイージイ。本当に未確認ロボット見当たらないの？』

『全然』

『…それって変ですよ。スイージイさんが管理するカメラと。僕達コンダクターロボットが命令わだせば関係しているすべてのロボットの目が監視カメラとなるのに…』

『でも、ソシエゴ。順谷様を連れ去ったロボットが未確認ロボットじゃなければ、どうかしら』

スイージイの言葉に2人の足はぴたりととまっ。

『どういう事、スイージイ。まさか、誰かが裏切って、ボスに抵抗するロボットがいるって事？』

『馬鹿な事を言わないで下さい、姉さん。僕たちウエストルム・キングダムに認定されたロボットがボスに半期を翻せると思っているんですか？』

『プログラムを無視できるロボットなんて存在しないわ。考えるとすれば、それ以外の可能性ね』

『どんな事?』

『コンダクター以外のロボットは来ている制服はほぼ同じ。エムカの区別できるように作られたサービス業務以外のロボットは顔、体格も変わらない。』

桁が多くなれば増えていくロボット一体、一体を見分ける方法はただ一つ』

『首の下につけているプレートですね』

『コンダクターはともかく、桁数の多いロボットとなると。プレートに刻まれている数字、バーコードを読み取るしか、区別はできない。』

そのプレートさえ、あれば外見がどんな形でさえ、プレート通りのロボットと認識できるのよ』

『じゃあ、今のロボットは、誰かのプレートを奪ったってことですか』

『スージー。昨日、いやそれ以前にプレートの再発行、もしくは廃棄処分したロボットは?』

アネシスの問いにプログラム実効場所にいるスージーは一度、目を閉じた。

再び、その目が開く数秒の間で、自分の管理するネットワークに繋ぎ、情報を引き出した。

『ここ、一か月、廃棄処分のロボットはゼロ。プレートの再発行したロボットは…エムカ - 03421』

俺を軽がると持ち上げるロボットは首から紐をつけたプレートをさげていた。

「MKAえつと…」

左右、上下に動きながら小さな文字を読み取るのは困難に近かった。

読み取りにくい原因は、さらに一つ。

…柔らかい。

エムカさんと違い、鉄のように冷たいけれども人間と同じ柔らかさがあった。

小脇に抱えられて、上を見れば大きな胸が、下をむけば露出努の高い脚が：

…俺にどうしろというんだ。

回答は、それから数分とたたなかつた。

敷地内だと思っただけでも、アトラクションからだいぶ離れた、薄暗い場所まで跳び終わると、そのロボットは腕を離し俺を物のように落としたのだから。

「つて。つて、何するんだよ」

「お前が大累順谷だな」

「名前を確かめず連れてきたのか」

連れ去られたのに、アネシスとソシエゴの二人が追ってくる気配がないの。ソシエゴが呑気に手を振っていたことに気になるもの、連れ去ってきた以上、自分の身に不安がつのり、口調も喧嘩腰になってしまった。

「お前が大累順谷だと証明するプレートがない。コマンダーロボットにいた者をターゲットと確認するしかなかった」

…ならば、ここで『人違いです』と言えば、開放してくれるのかな。

「名前を聞いた時点で否定しなかつた事により、肯定したと判断する」

言おうとした寸前、釘を打たれてしまった。

それにしても連れてこられた、この場所は。かなり人目に付かない奥なんだろうな。

俺たちの周りには、何かのアトラクションで使われたと思う鉄の柱や、錆ついた乗り物、そのものが無造作に置かれていた。

一時的な物置きか廃棄場所になるんだろう。

「ここは、ロボット以外の機械の一時置き場だ」

辺りをきよろきよろしていたせい、俺の考えている事に気づい

たらしい。

「役目を終え、鉄の柱だろつと乗物だろつと粉々に壊され、新しい鉄となつて再利用される。鉄のリサイクルというものだ」

俺を見下ろすロボットはニヤリと笑つた。悪寒が走つた。

「それで、俺を何のために連れ去つてきたんだ？この王様の甥だけれども、身代金目当て？」

「私はシुकクシャ。我が主人に命じられるままに動いただけのこと」「主人つて？」

「マスターはマスターだ。それ以外、誰でもない」

本気で言っているのか、名前を言えないのかわからないが、それ以上のことは聞き出せないようだった。

「お前に危害を加えるつもりはない。私の問いに答えれば」

それつて答えなければ危害を加えるつて事か？

「言つておくが、学校で学んだこと以外、何も答えられないからな」

「そんな知識などいらぬ。私が聞きたいのは『王冠』の場所だ」

「王冠？」

「この国の王となる者が手に入れる者」

「ならば、おじさんの頭上にあるんじゃないのか」

「……………」

俺の答えにシुकクシャというロボットは鋭い目で見下した。

「知らないようだな。ならいい」

「じゃあ、戻つていいんだな」

「そうはいかない。お前が知らなければ、次の実行に移す。お前をマスターの所まで連れていく」

…やつぱり、そうきたか。

シुकクシャを腕を伸ばし、俺を再び小脇に抱えようとした。

冷たいけれども、目のやり場に困る格好に大きな…。

一瞬、そのまま連れ去られてもいいかなと考えてしまった、男の情けない性分に嫌気がさした。

もちろん、抵抗の一つとして伸ばした手を左に避けて背後にあつ

た鉄の欠片を投げつけた。

それから逃げ出したものの、黒い一風が俺に吹きつけて、なす術もなく持ち上げられてしまう。

「無駄なことを」

確かに人間離れした（ロボットなのだから当然んだけど）相手と正面からやりあうなど無駄でしかなかった。

限度の越えた挑戦とはいえ、抵抗すらできない自分が情けない。

再び高く飛び上がると思っていたシユクシャは、右に大きく跳んだ。

左側で大きな物音がしたのは、その後だった。

「無駄とは、お前の行動を指すのだ」

その声は物音がした方向から聞こえた。

とはいえ、いくら首をその方向に向けても俺の視界からでは、姿を確かめることはできなかった。

「ふん。汚れた王に使える番犬か」

「ボスを愚弄するとは、いい度胸だな蛮族の分際で」

怒気のある低い声は、ソシエゴでもアネシスでもエムカさんのものでもなかった。

シユクシャは大きく跳んだ。…もちろん、俺も道連れに跳ばされている。

跳んで、間近に迫った新たなロボットに蹴りをいれる…俺を抱える左の脚で

蹴りは空を切り、いや、相手に足首を掴まれた。

しかし、巻き込まれている状態にとっては、ヤバイ以外の言葉ない。シユクシャの体はぐらりと揺れるし、もし相手がそのまま投げ飛ばしたとしたら、俺も道連れに…

しかし、ロボット同士だからだろうな。シユクシャの格好に目を向けることもなく、平気で足首を捕まえて、戦いのことにしか反応しないのは…

相手のロボットは俺より体格のよい男ロボ。

男の性分に脳天気と考えてしまった事に気づいた時には、すでに状況は変わっていた。

足首を掴んでいた手を大きく振り上げたのだから。

「うわあぁっ」

恐き抱えられた人間ともども宙吊り状態となつて…

大男の太い腕が俺を捕えた。捕えたというよりシुकシヤが手を離して、俺が落ちる前に抱き止めてくれた。

大男が俺に気を止めている間、シुकシヤは身をひねって回転し地面に不時着することを避けた。

人質が手に渡った以上、シुकシヤに気兼ねする必要はなくなり、思いつきり攻撃可能となった。

その瞬間をシुकシヤも気づかないわけではなく、シुकシヤは身を守る術の一つとして物を投げつけた。

投げつけて敵の気をひこうとしたのは俺の場合と変わらない。変わらないが、軽々と投げつけた鉄屑は乗物。廃処分となったコーヒーカップ一台だった。

「ひえええ」

シुकシヤと違い胸に抱き止められた状態でコーヒーカップが飛んでくる。ビビる以外に何ができようか。

しかし大男ロボットに焦りはなかった。

彼は物が飛んでくる短い時間内で俺を小脇に抱え、余った腕でボールを受けとめるように、それを手にしたのでから。

さすがに大男だけある。

しかも、それをまた、投げ飛ばした…もう人間からは、ついていけない…。

投げ飛ばした瞬間に逃げ出したシुकシヤに向けられたものの、コーヒーカップはどすんと大きな音をして地面に落ちていった。重すぎて飛距離が伸びなかつたらしい。

「まあ、俺はあくまでも順谷君の保護にまわるだけだから、これ以上は無理だな」

「これ以上はつて、これ以上の事が出来る人、いやロボットなんているんですか？」

ぼそつと独り言のようにいったロボットに思わず聞いてしまった。

「そりゃ、もちろん、アネシスだよ」

え…。

アネシスつて。見た目によらずすごいロボットらしい。

「さてと」

安全を判断した大男ロボットは、俺を降ろしてくれた。

「ありがとうございます。おかげで連れ去られずにすみました」

「いやいや。人間を守るのが俺の役目の一つでもあるからな。

改めてだけれども。初めまして大累順谷君。俺は建物の管理担当のバツトレインだ」

バツトレインは大きな手で、後から差し出した俺の手を握った。

エムカさんと違い冷たく、少しごつごつしているけれども人の感触だった。

「君が無事で良かったよ」

バツトレインは体格の良い体をソシエゴと同じデザインだけれども紺色のマントを羽織っていた。頭上から結わえる一筋の髪が何とも印象的だった。

「さて、戻るとしよう…が、何かひっかかっているようだな」

俺の顔や行動はわかりやすいみたいで、バツトレインも見逃すことはなかった。

「シुकクシャというロボットが聞いてきたんです。王冠はどこだと」

「ほう。王冠か」

バツトレインの顔が陰しく変わった。

「何なんですか、王冠つて」

「その名前の通りだよ。王の象徴となる冠だ。王冠を頭上に乗せた者が、この国の王となる。その王冠を狙ってくるだ…」

「シुकクシャの主人が王座を狙っていることですか？」

「そうとしか、言えないな。とにかく、俺達は戻ろう。今頃、アネ

シスがシユクシャとやらを捕えているだろう。それで何らかの情報
が得られるはずだ」

バツトレインの予測は外れてしまった。

アネシス達はシユクシャを見つけたことが出来なかったのだから。
その理由は、夜になってわかった。

開園時に活動するソシエゴの部下ロボットが見つからず、捜した
結果茂みの中から動かなくなった状態で発見された。

プレートがない状態で。

遊園地の夜

「アネシイちゃんの、面目まるつぶれよお」

その事件も一通り処理できた夜。アネシスは向かい合わせに座り、とりあえず話してくれた。

ここは遊園地内にある宿泊施設。おじさんか、エム力さんかはわからないけれど手配してくれた部屋は、落ち着いた色合いの家具がおかれた、高級感のある部屋だった。スイートルームと最安値の真ん中になると思う。それなりの気配りをしてくれて嬉しかった。

「部下ロボットに何かあった時、かならず信号を発信して異常を知らせられるのに、それすらなく。今頃になって、それも捜した末に見つかったのよお」

アネシスが成人女性ならば、その手にアルコールが握られていた事だろう…。

「それに気づかないで呑気にエム力 - 03421のプレートをしたシुकシヤを捜してたなんて、情けないにもほどがあるっていうもんよお」

「アネシス、本当に飲んでないだろうな？」

「しかも、一体のロボットを守れなかったし。セキュリティロボットの指揮者として…あーもう、ボスになんて報告すればいいのよお」

「アネシス。君の気持ちは良くわかった。わかったから、俺から離れてくれ」

アネシスは、俺に抱きついた状態で話してくれた。

「だって、順谷ってエム力みたいに温かくて、落ち着くんだもん」
「俺は落ち着けないんだ」

アネシスも冷たい体をしているが柔らかさは人間と変わらず…とにかく離れてもらったが、元来、人懐っこい性分であるため、そんなに離れてくれなかつたけれども。

アネシスの失敗により、おじさんの機嫌は悪い方向に進み、エム

カさんからもストップがかかった。会えない事にほっとしてしまう。

「でも、大丈夫だからね、順谷」

「何がだい？」

「今日はアネシスが自ら順谷の見張りになるから。2度とシユクシヤに連れ去られることはないから」

「見張りつてアネシス。夜は充電時間になるって言ってたじゃないか」

「大丈夫、エネルギーパックがあるから」

「そういつてもなあ。アネシスが見張りしている所で呑気に寝られないよ」

ロボットとはいえ人と変わらない娘が頑張っているのに、気にせず寝られる無情な人間ではない。

「大丈夫だよ。順谷がぐつすり眠られるように、アネシスは静かにしているから。もし順谷の寝相が悪くて蒲団がずれたらアネシスがちゃんと戻してあげる」

「ちょっと待て。部屋の中で見張りをするつもりなのか」

部屋の外で見張りさせる気はないが、部屋の中はもつとない。俺には『男の性分』が抜け切らない以上は、危険すぎる。

「アーネーシス。どこに消えたかと思ったら」

ノックする音と共に現れたのはエム力だった。

つかつかと歩み寄ってきたエム力はアネシスを猫の子のように首の後ろから掴んだ。

「やーん。エム力離してよ。アネシスは順谷の警備に当たるって、ボスに伝えて」

「そういうわけにはいかないのよ。ボスは『エネルギーパックに頼ることなく十分な休息をとれ』って命令がきているんだからね。もちろん、今回の報告も忘れずに」

「それが嫌なお」

「聞き分けのない子供じゃないんだから。私からもフォローするか」

「……………」

アネシスは、大人しくなった。

とりあえず、助かった。

「じゃあ、順谷さん。お騒がせしました」

「おやすみ、順谷」

アネシスは、そう言ったものの、その目は明かに『できれば、止めてほしいなあ』と訴えていた。後ろめたいがわからない振りをした。すまん、アネシス。

「ピピピッ」

それから数分して、エム力が渡してくれた敷地内で使える携帯がメールの受信を告げた。

宛名はエムカさんのものだった。

とりあえず、アネシスの報告が無事に終わったことと。

ロボットの事について。

ロボットとはいえ、コマンダーレベルとなれば、心、精神的に左右される事が多くなります。人のようにに考え、行動していきます。特にアネシスは、人の痛みを知らなければならぬ（直前まで）看護ロボットとして作られていったもの。

人、ボスのために働く事に喜びを持ち、自分の存在を知り。

逆に、見放されることにより、不安、恐れを感じ取れます。

ロボットは人を守るためならば自分を滅ぼしても苦と思いませんが、自分が役にたたず捨てられることをもつとも恐れています。同じ廃棄処分でありながらも、悲しい存在ですね。

ロボットは、ロボットなのです。

同じ型として出来上がったソシエゴよりも感受性が強いでしょう。だからこそ、順谷さんの所に逃げるといふ手立てを思いついたのです。

アネシスの行動についてだった。

確かに、アネシスはロボットなのにもかかわらず、人に抱きついて愚痴を言うのはロボットにはない行動でしかなかった。

「人に近い存在か…」

とはいえ、アネシスはロボットだった。

人に仕えることに喜びを持ち、役に立たないことを恐れる。

「ロボットはロボット…」

エムカさんが書いた、その言葉が頭に引っかかって離れなかった。人以上に力を持つものにもかかわらず、人に左右される存在なんて

…。

「俺は…どうなんだろう」

思わず口にしてしまったことに、ぞっとしてしまった…。

順谷へ

選択は、お前にある。

もし、この門をくぐる気があるならば、お前を王子として認めよう。

おじさんからもらって手紙の一文に、そう書いてあった。

でも、おじさん。俺に選択の余地なんてあるのでしょうか？

王の口と手

「今日は、アネシスとエムカが案内してあげる」

翌朝。ホテルのロビーに言ってみると元気いっぱいのアネシスとエムカが俺を待っていた。

真っ赤な元気娘、アネシスの名前を聞いて、嫌な予感がしたけれども、エムカがいる以上心配はなかった。

「ボスの命令で、順谷さんには工場と『王の口と手』に会ってもらいます」

「王の口と手？」

「工場の偉い人だよ。アネシス達コンダクターロボットみただけれども、ちよつと違うんだ」

アネシスは飛び跳ねるように歩きながら、説明してくれた。

人懐っこい子犬を散歩させたような感じだろうな。主人にまとわりつくような感じで途中愛らしい目で見上げ『遊んでくれる？』と訴えているのと変わらない。

…しかし、それでいて良くぶつからないのが不思議でならないんだよなあ。子犬にしろ、アネシスにしろ…。

「王の口と手は、スージーのように工場内のデータを管理しています。ボス経由の発注を受け取りしだい、新しいロボットを作りますよ」

一方、エムカさんは右斜め前方をゆつくりと、それでいて俺の速度からずれることなく進んでいた。

「最近では遊園地内だけではなく、外からの発注もあります」

これだけ、高性能ならばどこでもほしくなるのは当然だろうな。

「……………」

ウエストルム・キングダムがますます繁盛している事を知り、一抹の不安が生まれてくる。

俺が、俺なんかができるのか？

「……………」
不安を過らせた俺の目がアネシスの目と合った。
アネシスは何も問うことなく、にこっと笑い、俺も考えることをやめた。

まあ、まだ先のことだからな。

これからおじさんに学んでいくしかないんだから。

例え、顔を合わせなければならぬ事に戸惑いを感じるにしろ。いつかは、合わなくてはならない。合って、これからを学んでいかなければならない。

ウエストルム・キングダムは、広大な敷地内にすべての事業所を設置していた。

まず正門から入ったところにある遊園施設。それを取り囲むようにある宿泊施設。

その宿泊施設後ろの中央部分に、おじさんやコンダクターロボットのいるビル。

そのビルの後ろに、昨日連れ去れた廃棄物置き置場と、工場があった。

工場と叫びたものの、ロボットを造り出す施設は俺が想像していたのよりも小さな所だった。

想像といっても工業団地にある大手メーカーのしか見たことがないけれども。

建物は3階建てほどの、巨大な円柱型のつくりをしている。鏡のようなガラス張りの壁はいかにも近代的な色を現わしていた。

「ここでアネシス達が生まれたんだよ」

「ふうん。…ところで、エムカさん。入り口はどこですか？」

前方のにいるエムカさんが立ち止まったから、近くにあるはずなのに…どこも壁以外みあたらなかった。

「開けてちょうだい。ボスの命令で見学に来たの」

エムカは建物に向かってそう言った。声を張り上げることなく俺

達に聞こえる音量で。

『エムカ-1。ボスからの許可がおりています。どうぞ』
まるで近くにいるように、その声が聞こえた。

そして壁の一部分が左右に別れ、両開きの自動ドアのように入り口が出来上がっていった。

「王の口と手は、ボスの許可がおりなければ、アネシスたちでも開けてくれないんだよ」

『セキュリティコマンダーアネシスの場合は声一つで開けられますよ』

入り口から中に入っていく間、アネシスは俺に説明するように言い、建物の中から『王の口と手』と呼ばれる女性の声が言葉を帰した。

中は受付やロビーといった空間はなく、入ってすぐに長い通路が続いていた。

「アネシスの場合は『緊急宣言』を出した時だけだもん」

『当然です。アネシス-1の場合、遊び場にしかねないとボスからの要請があったから、急きよ『緊急宣言』システムが出来上がったのです』

王の口と手の返答が終わったとき、俺達は通路を終えて、薄暗いけど明らかに広くて高い空間に出た。

ここが薄暗いのは前方の物体を俺に見せるためのシチュエーションなのはわかっていった。

『初めまして、大累順谷様』

目の前にある機械は大人二人分の円柱型ガラスに透明な液体を入れたものだった。

ガラス柱の上下にはメタル色の支えがあって、上部分となると蔓のような曲がりくねった大きささまざまなケーブルが高い天井からつながっていた。

唯一光っているのはガラス柱の中で下の方から照明を当てているらしい。

『私がこの管理および『王の口と手』と呼ばれる者です』

「わっ」

突然の出現に思わず声を上げてしまった。

王の口と手という者は何も無い透明液体の中に現れていたのだから。

「順谷、これは映像だよ。王の口と手の本体は、この後ろにあるからね」

『驚かせてすみません』

王の口と手

王の口と手は、ソシエゴを成人女性化したような姿をしていた。プラチナブロンドに、色の目：それだったら、アネシスを説明に使った方がいいのだが、彼女の場合修正が多くなるから。

それから、その名前のせいだろうか、雪のように白い手は二回りほど大きなものだった。

『順谷様。ここには50と一つの製造機があります』

俗悪というものをプログラムされていない『王の口と手』さんは、さらりとこの説明を始めてくれた。

声が消えると同時に周りの電気が付き、広く高い空間の壁側に新たな物体が並べられていることを知った。

「これは…」

すべてメタル色に覆われた円柱型の物体が、それが出入り口を除く壁という壁に並べられていた。

それが3段になっていて、その存在を知った者にとって驚きと何か見下ろされている圧迫を感じた。

「順谷さん。これがロボットを作る機械ですよ」

「これが？…俺は、てっきりベルトコンベヤにのって一つずつ、プラモデル用に出来上がっていくのかと思ってたよ」

『一つ、お作りしましょう』

前方にいたガラスから、王の口と手の姿が消え、目の前で実際に造り出す機械に変わった。

透明なガラス内に起きた最初の変化は、2本の枝のように細いアームが下りてきた事だった。

2つのアームには、それぞれ耳ぐらいのメタル色の固まりが握られていて、それらが床に着くと、新たなアームが2つ、今度は細長い棒のような物が下りてくる。

「部品はすべて、隣の部屋、この部屋の外に納められています。工場の中に入ったとき、長い通路があったのは部品の製造、保管するスペースがそこにあるからなんです」

「それを見ることはできないんですか？」

「残念ながら『企業秘密』名目と製造ロボットしか入るスペースがないので」
なるほど。

エムカと会話している間、アームはさらに下りていった。

一番最初に下りてきた物が、人間でいう踵。2番目のが頸骨と呼ばれる骨だとわかった時には、人間のと変わらない鉄色をした足の骨が、アームから運ばれ繋がられていった。

「人と変わらないんですね…」

「人間に近いロボットは、ほとんど同じですよ。ただ、もちろん、筋肉ではやくケーブルや基盤がはめ込まれていきますから。似ているのは骨格だけです」

エムカの言う通り、アーム達が運んできたのは色とりどりのコードだった。

赤、青、緑という原色に塗られたコードを見て、どこかでほっとすることができた。

ここは機械工場で、作られていくのは精密機器であるという事に、そう考えている間も、次々とアームが下りていった。

固定することができたアームは天井に上がっていき、その横で別のアームが一部を運んで下りていく。

「でも、水の中で作るなんて…」

「水じゃないよお。」

水みたいにさらさらしてなくて、どろどろしてて、ゼリーの中に入った感触だったよ。出来上がる直前の事は覚えているからね」

さすがはロボット…。

特殊な液体の中で、アームたちの動きはしなやかなものだった。

その動きは機械離れしていて、もはや生き物のようとか言いようがなかった。

生き物みたいに作られていく機械は、少しずつ人間のように変化していた。

とはいえ、まだ機械に皮膚はなく、まぶたのない目は眼球が剥き出しになっていた。

これを見て、学校の理科室を思い出す人間は俺だけじゃないと思う。

「人工皮膚を覆う前に、一度、検査があります」

説明の聞こえる間、運び、取り付けていたアームたちが一本も残らず天井に戻っていく。

それから、機械としか言えない物体が、動いた。

頭、顔を天井に向けて両腕を伸ばす。

その動きが止まったとき、機械の足もとからフラフープのような輪がロボットの周りを通り抜けていく。

『移動機能：OK。バランス操作：OK。起動エネルギー作動：O

K。神経作動：OK。感情作動：OK』

今、上間で上がっていった輪の中で、色々な検査をしていたらしい。

『ソシエゴ - 10341』

金属色の、唇すらない部分から声が流れた。

『視聴機能：OK。オール：OK』

最後の耳と声の機能もクリアすると、ソシエゴの部下となるロボットは、顔を基野市に戻して、両腕を頭上高く伸ばした。

それと同時に天井から二つのアームが、ロボットに手袋のような

ものを手渡した。

肌色の厚ぼつたい手袋…

「機械からロボットに変わる瞬間ってやつね」

アネシスの言葉からして、今のが人工皮膚で、それをつけることにより機械の固まりが手に変わる事を知った。

もちろん手だけではなく腕や足…太股…さすがに視線を天井に向けてしまった。

男なら別にかまわないけれども、ソシエゴの部下ロボットは看護系となるし。

「人工皮膚は服を切るような感覚と同じですね。手足から始まり腕や脚。頭髮等のついた頭はヘルメットをかぶるのと同じ動作ですよ。胴体は最後となります」

俺の視線を知ってか、エムカさんは説明してくれた。

『ソシエゴ - 10341。製造終了』

作られたロボットの声を聞いて、視線を少しだけ下げてみた。

やっぱり、どうみても男じゃないな。ソシエゴ風の大人しくて優しそうな少女だった。

黒い髪は、まだ束ねることもなくどろどろとした液体の中でゆっくりと揺れ動いていた。

人間とロボットを区別するためなのか、その目は日本人色ではなく、柔らかな若草色をしていた。

それ以上の事は、視線がそれ以上は下げられないのでコメントのしようがない…。

製造終了とはいえ、液体の中では服の着用は困難なのだから。

再び下の方から何かがせりあがってきた。

それは円柱を覆う黒い壁。

柱の装置びつたり覆われたそれは、ガラス部分まで上がり、さ待った。

止まったのは、数秒で。黒い壁はすぐに下がっていった。

下がっていくのと同時に、中のロボットが…消えた。

「エレベーター装置になっているんですよ。

できあがったロボは、下にある保管部屋に置いておくの」

まるで手品のように、あっという間で。黒い覆いがなくなると元通りに透明な液体だけがその中に存在していた。

「なんか…すごいですね」

機械離れた、芸術としかいいようがない製造を終えて、口から出てきた感想は、月並みなものになってしまった。

自分ながら恥ずかしい…。

「じゃあ、次に行きましょうか、順谷さん」

俺の言葉に失望することなくエムカさんは、さらりと先に進んでくれた。

『ボスからの許可がおりてします。順谷様、前方に進んでください』
前方つて…行き止まりなの？

答えはすぐにわかった。

部屋の奥にある、ロボット製造機の一つが突然、片引き戸の自動扉のように開いたのだから。

「カモフラージュってやつよ。まあ、隠したとしても王の口と手が動かなければ開かないんだけど」

カモフラージュされた中はエレベーターになっていて、さっきのロボット同様地下に向かった。

エムカの説明によるとロボットの保管部屋とは違う階、最下層に向かうらしい。

扉が開かれたとき、目の前に現れたのは

緑色の淡い光を放つ大木だった。

「これが王の口と手よ」

王の口と手

大木といったけれども、良く見ると木ではなく無数の蔓が集まったもの。

蔓のようなケーブルが、他のとくつつき、絡み合って一つになったもの。

地上より高い天井に触れ合うのをやめて一つになったケーブルが空間いっぱい伸び上がっていた。どれも空間、天井まで進み壁の中へ入っている。

『ようこそ、順谷様。我がメインルームへ』
大木のような機械の前に再びマントをはおった王の口と手の映像が現れた。

姿が現れたものの、王の口と手はそのまま後ろに飛び上がり、木の中へ吸い込まれていく。

『残念ながら、私には人と同じボディはございません。これはあくまでもボスがイメージした映像です』

「そうなんですか」

色々な意味でおじさんらしい考え、思想なのかもしれない。

「順谷様。ボスからご伝言を承っております。」

我が王国、ウエストルム・キングダムに来て王の口と手と合った事により、お前は己の存在を受けとめたと信じて。お前を後継者と認めよう。

だが、お前は若く、この王国に君臨するにはあまりにも力がない。よって、順谷、お前の力をためさせてもらう。

一つは、私に会う事。決心がついたならば、いつでも来なさい。

もう一つは、この王国内にある『王冠』を手に入れること』

「王冠……」

『王になる資格がある者を見つけ、かぶることができる。』

一つ、言い換えるのならば、この王国は王冠をかぶった者の物となる』

「ちょっと待ってよ、王の口と手。それって……」

『だまりなさい、アネシス-1。ボスの命令実行中、中断することは許されていない』

「……………」

アネシスの言いたい事はわかっていた。

昨日のシユクシャとかいう者の主人でも、王になる資格があると

いう事。

…おじさんは、シユクシャの主人を知っているという事か？

『その2つが、私の出す条件だ

健闘を祈る

養父、またの名はボスより。

以上です』

「……………」

順谷の顔が気になる…。

順谷は複雑な環境の中にいるらしい…。順谷はボスの事を『おじさん』っていつているけれども、今、ボスが読み上げたのは『養父』だった。でも、ボスはウエストルム・キングダムができてから、ずっと外に出たことがないし。ましてや順谷と会って名前の通り育てていた事も見たことがないし。

「むぐう」

ボスの意見には、アネシスの脳天気な頭で理解できない。

どーして、ボスと会うのに決心がいるの？

まあ、最近のボスは気むずかしくて、アネシスでも会いたくないけれども。会おうと思えば、エムカに会いに行くようなもの

『……………』

でも『ボスに会いに行く』と言った時、順谷の顔は明らかに険しくなっていた。

ボスとは、アネシス達以上に難しい仲なのかな？

「……………」

気になるけれども、聞けない。ボスから聞くなんてなおさら…

『順谷様。早急では、ありますが、ボスへのご返答をお願いいたします』

「……………」

おじさん…あなたに養ってもらった以上、俺に選択というものは
ありません。

あなたは、それをわかっているながら手紙で書くなんて。

「俺の意志は、あなたにもわかっているはずです。」

と、伝えてください」

『かしこまりました』

秘密

工場のメインルームは、無音と化したものの、再びロボットの声が響き渡った。

『送信終了しました。』

順谷様。あなた様を正式に後継者と認証した所で、私の名前の理由をご説明いたします。』

「名前の理由：ですか？」

工場の管理機械でアネシスやエムカさんみたいに動けるボディがないから、『王の口と手』なんて言葉が名前なんて変わっているなと思っていいたら、理由があるらしい。

『手』はロボットを製造するからわかるけれども。

『はい。』

後継者が変わる時、ウエストルム・キングダムに存在するすべてのロボットに書き替え作業を行わなければなりません。』

「アネシスちゃんたちコンダクターもそうだけれども、どのロボットも、お客様を別にしてボスの命令によって動いているの。」

「そのボスが変わるとなれば、新しいデータを上書きしなければなりません。」

あまりにも書き替えなければならないロボットが多く、『王の口』という存在が必要になるのです。」

それが『口』の理由。

『この建物の屋上に、切り替えを行なうだけの装置があります。』

「次は、そっちに行くんだね。」

「ええ。」

その予定は地上階についた時点で変わった。

「スージー？」

ぴたりと足を止めたアネシスは天井を見上げ、見えない相手と会話を始めた。

『アネシス。建設現場からプレートを失った新たなロボットの残骸が発見されたわ』

「シユクシヤが動いたって事？」

アネシスが声を出して返答してくれた事により、俺らは危険を感じ取ることが出来た。

『失ったプレートナンバーはバッテリー - 0028』

検索の結果、そのプレートが建設現場から勇敢施設を横断し、廃棄場経由で移動中。

もし、昨日の未確認ロボットならば」

「こつちに、向かっていることね。わかった。すぐにアネシスのロボットで、問題プレートをつけたロボットを追跡、捕獲、回収させるね」

『くれぐれも遊園施設で事を起こさないように』

「わかってるって」

天井から視線を落としたアネシスは口を閉ざし、声に出すことなく命令プログラムを放った。

「OK、じゃあ、次に…」

とりあえず処理をしたものの、すぐに問題が起きたらしい。

再び足を止めたアネシスは天井を向いて会話を始めたのだから。

「そっしい。回収ロボットをお願い。大丈夫、遊園施設から出た所だから。アネシスが行くまで数は増えるわね」

「アネシスも行くの」

「シユクシヤの奴。昨日より強くなっているみたいなの。というわけでエムカ、アネシス出かけるから順谷を見ててね」

見ててねって、子供じゃないんだから。

と、訴えたかったけど事が緊迫しているだけに言えなかった。

「アネシス。気をつけるよ」

「大丈夫よ、順谷。そいじゃ、王の口と手も出入り口、ぴったりと

閉めておいてね」

『了解』

アネシスはいいと笑うと元気に駆け出していった。まるで遊びに行く子供のように、アネシス自身に緊迫した気配は見当たらなかった。

王の口と手が長い通路の先の扉を閉めると、無音の空間となってしまうた。

「……………」

ここには音どころか、窓もないから外の様子を伺うこともできず。ただアネシスか王の口と手が、他の誰かが『終了』と宣言するまで待つ以外、何もできない。

「アネシスならば心配ありませんよ。彼女はウエストルム・キングダムでは最強の機能ですから」

「はあ」

別にアネシスの事が気にならないわけじゃないんだけども、何とも間の抜けた返事になってしまった。

というより、アネシスが的に負けたり重傷を負うなんて想像できないだけかもしれない。

それと…元気がいっぱい人で甘えるタイプのアネシスが『最強』で、真面目な顔をして戦う姿が想像できなかった。

それから数分の時がながれた。

何もしないで待っている分、それ以上に長く感じた。

もし、ここにいるのがエム力ではなくアネシスだったら時の長さを感じなかったろう。疲れるのは確かだけれども…。

エム力さんが黙っていたのにも理由があった。

「こういう時に、こんな事を聞いてもいいのか…」

「おじさんの事ですか、別に構いませんよ」

ロボットとはいえ、エム力も気になっていたらしい。

「ボスは以前、順谷さんのお父様の弟にあたると聞きましたか」

「それは周りを納得させるだけの、言葉にすぎません。正式には『おじさん』と呼べる間柄ではないんですよ」

苦笑する順谷さんを見ればアネシスでもわかったことでしょう。その苦笑がただの苦笑には見えないことも…。

「あの人は、俺をここまで育てるために援助してくれた方です。でも、記憶に残るほど会った事はありません」

「……。そうだったんですか」

無言の間にエムカは、声に出さずこう聞いていたと思う。

『それなのに、後継者の道を選んだんですね』と、

いや、本当に思ったのかはわからない。でも、俺にはそう聞いているように思えてならなかった。

「おじさんの恩を返したいし。でも、一番の理由はここに興味があるからです。ロボットしかいない遊園地なんて、ここだけですし」

だけれども、心の奥底には別の言葉もあった。

『今の俺に、選択の余地はない』と、

「…そうですか。私たちにとっては、嬉しいことです」

にこっと笑ってくれているのに、奥底の言葉のせいで素直に喜ぶことができなかった。

風が俺の横を通り過ぎて、俺達の会話はここで終わった。

「え…」

それから何か、黒いものが一瞬だけ見えた。

虫？いや違う。

「王の口と手。侵入者よ」

同時に気づいたらしく、エムカさんは言葉を放った。

『場内特別セキュリティロボット作動』

エムカさんの声に反応した王の口と手は高すぎる天井に閉まってある扉を開いて、何かを放つたらしい。

落下してきた黒い物体は人間の膝ぐらいの大きさしかなかった。

男女の区別がつかないボデイラインに、ぴったりとした黒い服を身に付けたロボットたちは皆、同色の短髪をしていた。

セキュリティ・コマンダー、アネシスと似た顔を持っていたけれども表情の変化はなく、どれも個性というものがなかった。

落下してきたはずのセキュリティロボットたちだったけれども、床にたどり着いたのは一体だけで、他のは身をくねらせて一体は、壁にはりつき。別の一体は、メタル色に覆われた円柱型の物体、ロボット製造機にたどりついた。

個性のないロボットだけれども、同じ行動をとる者はいなかった。
『ピピッ』
『ピピッ』

十数体はいるロボットたちは、製造番号の違う仲間たちに電子音を鳴らして、合図を放っていた。

ピピッと音がするたびに、一体が突然角度を変えて跳んだりして
るから、そうだと思う。

侵入者を捕獲するために計画をたてているのだろうか。

ロボットたちは、その動きを止めることなく、バツタのような跳躍を繰り返し不法侵入者に向かっていった。

パシッパシッと天井や壁、床を蹴る音がリズムのように聞こえ、
鳴り止むことなかった。

「本来、ウエストルム・キングダムのロボットは、コマンダーの指揮に従いますが、この子は別なるんです」

跳びはねるロボットたちを見守るながら、エムカさんは説明してくれた。

「ここに待機するロボットは王の口と手の指示を優先に従います。

王の口と手は王の代理人という権限をもっていますので」

「権限、ですか」

「はい。この国の王が替わる時、戴冠式の事ですが。その時、この国にいる全てのロボットに新王のデータを書き替えなければなりません」

「その書き替えをするのが王の口と手なんです」

「はい。重要な役割とロボット製造の管理をする以上、他のコマン

ダー・ロボットの指示を頼りに動かすことはできません」

「そうですね」

エムカさんが説明してくれている間も、小さなセキュリティロボット達は、ポップコーンやスーパーボールのように脚についた壁や床を蹴り、黒い物体に向かう。

ロボットの跳びはねが、ほとんど頭上高い所で行なわれている事からして、黒い物体は天井近くを飛び回っているらしい。

『順谷様およびエムカ-1。侵入者は3センチの黒色をした球体です。』

今のところ武器の使用。爆発物等の使用、または使用する気配はありません』

『レーザーだけが武器だけではないぞ』

王の口と手の言葉を待っていたかのように、頭上から笑うような声が聞こえた。

『我は2BD。シユクシャと共に女王に使える一体』

2BDと名乗る球体は、挑発するかのように進路を変えて、落下を始めた。

浮力をなくしたかと思うほどの速度で床に向かい、触れる寸前でU字を各課のように上昇し、小さなロボットたちもバツタのように床を跳びはねていった。

「シユクシャ側のロボットですって？正式プレートが失ったのは一体だけ。それに、ここはボスないし王の口と手から許可のないロボットは入れるはずがない」

『でかいボディをしたロボットならばそうだろうけど。3センチしかないロボットになると話は違ってくるぞ。機能停止し、確認させた正式ロボットないし人間にくつつければ、その者の一部または装飾品とみなされる。』

現にそうして入ってきたのだからな』

「……………」

セキュリティ機能の視界をついた行動にしばし言葉が出なかった。

その沈黙を破ったのは小さなロボット達だった。
ピピッと音をたてて一体が2BDを目の細かい網に包んだのだから。

「盲点をついたとはいえ、抵抗力がなくては意味がないわね」

呆れた声を放ったエムカさんに対し、2BDは軽く、短く笑った。
「捕えられるために、侵入する愚かな機械だと思っているのか。」

さっきも言ったように武器は爆弾だけではない。私の武器は言葉だ」

「言葉…ですって」

「そう。情報だ。我が主人が知っている。人間やロボット達が封印している、知られたくないデータがある」

「…。それを脅しの材料にして王座に就こうと目論んでいるわけ？」

「我が主人は、そこまで落ちぶれていない。我が主人が狙う野はデーター公開による『混乱』だ」

「…。王の口と手。2BDの処理命令を」

混乱の2文字を聞いたエムカは、鋭く言い放った。

「……………」

その横で俺は…うつむいて、必死に表情を消そうともがくことしか出来なかった。

「そう。我が主人は、全てお見通しだ、人間よ」

「……………」

ロボットたちの視線が向いた気がした。

人の目を持つロボットだけではなく、エムカまで。

しかし、エムカはロボットだった。

向けていたと思う視線があったものの

「ウエストルム・キングダムの大危険物と見なし、破壊命令を出します」

と宣言した直後にプログラムをセキュリティロボットたちに放ちグジャという、2BDの表面に使用していたと思うプラスチックと金属が潰れる雑音が響いた。

「……………」

2BDが碎かれ、俺はわずかな息をついた。

僅か…そう僅かな量だけ。2BDは言わなかったものの、疑惑だけは…

『ふははははっ』

冷水をかけられた気がした。

そんな馬鹿な。目の前にいる物体は二度と音声を出せない状態だ…。

『その顔からして知っているようだな』

「…どこにだっ。まだ、いるのか」

不法侵入したロボットが一体だけとは限らない。目の前にいるセキュリティロボットと同じように。

『恐いか？自分の出生を暴露される事が。お前は、』

「黙れっ」

『王のクローンだと知られるのが』

「黙れー」

力いっばいにさけん俺は風を切る音を耳にした。

物事に動じる機能のないセキュリティロボットが手にしていた武器を放ち、新たな2BDに当てた。

命中した機械は者と化し、前方に落下した。

床に叩き付けられる音と共に、俺は座り込むことしかできなかつた。

「ははっ…は…」

乾いた笑いが途絶えると、空間は無音と化しロボットたちは誰一人、口を利くことはなかった。

というよりも、今のロボット達は離す必要がないからだ。

誰かに問われているわけでもなく。プログラム命令する必要もない。

「順谷さん…」

いや、ただ1人。感情という機能を持つエム力は、手を俺の肩に

乗せて、しゃがんだ。

「大丈夫ですよ、順谷さん。ここにいる子たちは偏見というものを持ちませんし。ボスに頼めば、ここであった事、全て削除することができます」

「……………」

『機械』という言葉が浮かぶしかなかった。

肩にあるエムカさんの温もりだけが、傷心した俺を優しく包んでくれた。

「…。エムカ」

でも俺は…その温もりを離して立ち上がった。

「おじさん…あの人に会いたいです。スケジュールの調整をお願いします」

手紙

あの人、自分の素と会ったのは、ただ一度だけ。
幼すぎた俺は、どこかのおじさんが笑いかけてくれた事しか覚えていなかった。

あの手紙がくるまで、俺は捨てられた孤児として施設で育てられたし、自分でもそう思い込んでいた。

だから、あの人が里親として俺の前に現れたとき、純粹に喜ぶことが出来た。資金援助だけの親であっても、二度と会うようなことがなくても『ありがたい』以外に思うことはなかった。

義務教育を終えるまで施設で暮らし、その後はアパートで一人暮らし。

それまでの間、あの人が会いに来てくれた事は一度もなかった。時が流れるうちに、『ありがたい』存在であるのに、どんどん薄れかかっていた。

あの人よりも見えない将来を考えるようになった時、一通の手紙が届いた。

「……………」

忘れもしない、高校3年の夏休み。

忘れかけていた存在に、俺は扇風機もかけずにそれを読んだ。

「…何だよ、これ」

日増しに強くなってくる太陽は手紙に書かれた文章のように、容赦なく俺に嘲笑していた。

流れ出る汗と共にくる不快が、夢でない事を証明していた。

「そんな…俺は、俺じゃないのか」

口から出たその言葉を後に、しばらくの間、自分が何を言っただどこに行き、何をやらかしたのか覚えていない。

よく捕まらなかったと思うよ。

正気に戻った時、俺はどこかの川原にいた。

そして狂ったように笑っていた。

その笑い声が止んだ時、辺りが静かになったら。右手が痛み、血が流れていた。

どこかで怪我をしたのか、それとも自分で傷つけたのかすらわからない。

「…血が、流れている」

手が痛い事を知って、自分が生きている事を知った。

ここで死んだら、全てが終わってしまう。

今まで生きていた事が全て台無しになってしまう。

「そんなの冗談じゃねえ…」

俺は立ち上がり、帰路を捜すことにした。

自分の正体を知って、ここに来るまで1年の時を必要とした。

順谷へ

選択は、お前にある。

もし、この門をくぐる気があるならば、お前を王子として認めよう。

もらった手紙の一部にそう書いてあった。

でも。姿を見せない、あの人は俺を後継者として考えているのかわからない。

『王になる資格のある者のみ、それを見つけ、かぶることができる。この国の王は、王冠をかぶった者の物となる』

あの人は、色々な手を出している。

あの人からの伝言は、シユクシャの主人でも王になれる事を指していた。

シユクシャや2BDの主人…。俺には知らない存在だけれども、あの人は知っている。

あの人は一体、何を考えているのだろうか…。

俺にはこの国を守るため、誰を王にするのか試そうとしているように思える。

どちらが、この国の王としてふさわしいか…。

あの人は、王座に座らせるためだけに、俺を作った。

クローンとして生まれた俺にとって、王座に就く以外に選択の余地はない。

なぜ、反発しないだと？

なぜ、新しい人生を切り開かないかだと？

どうやって？

今の俺にそんなエネルギーなどなかった。

自分の身の上を知って、それを受け入れるだけで精一杯だった。

今の俺は、こここの王座につくいがいい、何も考えられないんだ…。

王冠を手に入れることだけ、今は考えるしか…。

俺は空を見上げた。

月は、闇の中で光を見せつけていて、周りの星々を圧倒させている。

あの人のように…

ボス

「ふう……」

ホテルに戻った時、エムカからの電話が入った。

あの人は明日の午後1時に待っていると。

「……………」

頭から過去から現実に戻ったとき、今の状況を思い出した。

ベッドの上で天井を見続ける自分と、部屋の角に座り込んだまま。

動くこともしゃべることもしないアネシスの存在を。

「アネシス。ボスに怒られたのかい」

「……だつてシユクシャ、逃がしちゃったんだもん」

感情というものを持つ口ポットは、ちゃんと落ち込むらしい。

「バツトレインでさえ、勝ち目があるのに、だよ。」

でも、アネシスも最初は勝っていたの。でもね……でも」

「シユクシャがとんでもない武器を使ってきたのかい？」

「武器？……武器だね、あれは。アネシスの動きを簡単に止められる

んだから」

「そうか。でもアネシスは、その武器の事もボスに報告したんだろ

う？それでも怒ったのかい？」

「報告はしたよ……でも、ボス、何も言ってくれなかったの。その無

言が恐いの」

………

受け答えしない、無視する事。

心に負担を与えるなによりの怒りなのだろうか……。

思っている事を口ださない事は、その人が何を考えているのかわ

からない。

許してくれているのか、それとも許してくれないのか。許してくれないのならば、どういった罰、処理を考えているのか、相手はわ

からないのだから。

「……………」

俺は明日以降の事を考えた。

あの人は、俺にも怒ったりしてくれるのかと。

俺を一人の後継者として見てくれるのかと。

「……………」

沸き上がってきた不安を消してから、返答とともに寄ってきたアネシスの頭をなでた。

「順谷っていい人だね」

撫でることがロボットの心にも安心を与えるらしく、しばらくの時をへてからアネシスはにっこりと笑みを浮かべられるようになった。

でも、俺は苦笑するしかなかった…。

約束の20分前に、エムカがホテルのロビーまで迎えに来てくれた。

シुकシヤの存在があるからだと思うが、緊張を和らげるためだと思う。

夏用のパンツスーツ姿のエムカさんは服と同じ日傘をさし、中に入れてくれた。

容赦なく照りつける太陽を妨げてくれる日陰は、噴き出させる汗を押さえてくれた。

とはいえ不安までぬぐいとれないけれど。

「今日は、アネシス忙しいんですか？」

人懐っこい子犬の存在がない事に気づいたものの、エムカは苦笑するだけだった。

ウエストルム・キングダムの本丸にあたる、ビルはホテルから5分ほど歩いた所にあつた。

20階ほどの高さしかなく、俺が想像していたより低く、ガラス張りのどこでもあるようなものだった。

「この建物にボスがいるんですね」

その言葉はエムカさんよりも自分に言い聞かせるものだった。

「この建物から上半分はボスとコマンダー・ロボットの居住エリアになっていきます」

「下は？」

「スージーのデータ処理施設です」

エムカの説明が終わつたところで目の前の自動ドアが開いた。今まで開かなかつたという事は、セキュリティシステムが嚴重に管理しているらしい。

建物の中に入った俺は、ひんやりと涼しい空間とともにゆつたりとしたソファアーチ式がおかれていた。

その奥に円柱型のエレベーターが、俺の存在を感知するやいなや口を開いた。

「ようこそ、本社ビルへ」

エレベーターの前にたつ一人の受付ロボットが開いた扉と同時に一礼し、俺達の邪魔にならないように後退した。

アネシス - 002

受付嬢の資格好をしているものの、ボスの住む建物だけあつてセキュリティロボットが管理しているらしい。

エレベーターの中に入り外側にいる受付嬢が一礼すると同時にドアはゆっくりとしまつていき、微かなモーター音だけの世界に変わった。

短いようで長い時間。

でも時間は正確に時を刻み、あの人との距離を縮めていく…。

背にした扉が閉まり、エムカを乗せてエレベーターは下階へ進ん

でいった。

「……………」

あの人に会う。

その一言だけで、極度の不安と緊張に陥り、頭は、もう何も考えられなくなつた。

自分の素になる人。手紙がくるまで養父だった人。

どくんどくと心臓の音が早くなり、周りに響くのではと思うほど良く聞こえる。

「…お、おじさん」

他に、あの人の呼び名がなかったので、とりあえずその単語を使うしかなかった。

目に入り込んだ空間は上役らしい仕事部屋だった。

天井と壁は白く、床はワインレッドのじゅうたんが敷かれている。壁側に左右二つづつの棚があり、色の背表紙をした本が隙間を作ることなく並べられている。題名もなくすべて同じ本ということは、ここの施設にかかわりのある資料をまとめたものだろうと推測しかつかない。

そして何よりも、目に付くのは前方にある巨大な水槽…を思わせるスクリーンの映像だった。

足もとから天井まであるスクリーンには、澄み切った水と白い砂が敷きしめられていて、こぼこぼと音が聞こえた。空気を送り出す装置があるから、そこからの音らしい。

でも、肝心の魚がいなかった。水草も。

この遊園地のように、ここにも生物が存在していない。

「おじさん、順谷です」

その水槽スクリーンの前に鉛色をした木製のデスクがあり、黒く革張りの椅子が背を向けておかれていた。

あの人は、俺の声を耳にしても振り返ることなく、巨大スクリーンに向いていた。

こぼこぼと音が響くだけの空間に、ためらい『出直してきます』

と背を向けて逃げ出したかった。

でも、これを逃したら二度とここに来る度胸を失ってしまう事もわかっていた。

「おじさん」

俺は一步前に進んだ。それから止まることなく前進した。

「……」

違和感を覚えたのは数歩進んでからだった。

足がじゆうたんを踏みしめれば踏みしめるほど、それは確信に変わっていった。

「……」

デスクをまわり、革張りの椅子の前にたどついた時、それは完全に確認することができた。

あの人はいなかった……。

その代わり、一枚の紙が置かれていた。

『前に進め』と、

「……前につて」

言われるままに進んだとき、突然目の前の映像が消えた。

消えて一色の壁になったとき、俺は細く黒い一線が縦にあることを気づいた。

その線が太くなって、その先に空間がある事を知った。

薄闇の空間にぱつと明かりがついて、エレベーターだと認識できた時、その空間から声が聞こえた。

「ボス入室の許可がおりています。どうぞ、こちらへ」

言われるままに入り、そして時を待った。

一度緊張したせいか、今度は短く感じた。

「ボスがお待ちしています」

扉が開き、そう急かされなければ、俺は一步踏み出すのに時間がかかったと思う。

現れた空間に明かりがついていなかったのだから。

無情に背の扉が閉まり、俺は闇中に閉じ込められてしまった。

「…おじさん」

情けない声になってしまったが、その声に反応してくれた。
まず、闇が薄れていった。

天井の照明が少しづつ強くなるに連れて、床にしきつめられたじ
ゆうたんの模様、だだっ広い空間が見えてくる。

そして、その中央に“あの人”が立っていた。

「おじさん…」

唇が開くものの、声がかすれて出てこなかった。

その人を見て、自分が100%同じ細胞でできたクローンである
事を改めて知らされた。

なんて…なんて俺にそっくりな人なんだろうか…

年は4、50はいつているはずなのに。老いた顔には、俺にはな
い責任者としての風格を備えているのに…。

それなのに、この人は気味が悪いほど同じなのだ。

闇中から現れたその人は笑っていた。

目の前にいるクローンを迎え入れるための笑みなんだろうけれど
も、苦笑に近いかもしれない。

「手紙は…読んだか？」

「は、はい」

低いけれども、やはりその声に違和感を感じてしまう。

「…………。機械しかない国の王になりたければ、王冠を見つけれ
ない。それを手にした者が王になれる」

工場で『王の口と手』が伝言してくれた言葉を同じ事を言った。

「王冠って、おじさん。あの人も狙っています。あの、シユクシャ
というロボットの主人は一体、誰なんですか？」

俺の問いに、あの人は答えなかった。

あの人は、手を伸ばしてこういった。

「順谷よ。お前は自由なのだ」

「…」

疑問に狩られながらも、俺は前に進み、差し出した手を握った。

伸ばした右手は、空をつかんだ。

「え……」

自分の素を見上げた俺は、その人が薄いことに気づいた。実体はなく、後ろの壁が透き通ってみえることに……。

「……………」

映像であることに気づいた時、俺は映像の後ろに目を向けることが出来た。

部屋奥にある机のようなもの。

いや、違う。腰ぐらいある4本の足は一つのもを持ち上げていた。

「……………」

机だと思い込んだのは、目にしたとき、それを拒否したかったからに違いない。

ガラス張りの長方形の箱。

そこにいる映像と同じ物体。

あの人は眠っていた。

「……………」

体から力が抜けた。

座り込んだとき、背後にある映像が今頃になって口を開いた。

「すまない」と、

プログラム

あの人に会えば、何かわかる。全てが変わると思いついていたのに。

あの人は無情だった。

目の前の現実を理解するまで長い時間を必要とした。それを飲み込んだ時、俺は一つの疑問に気づいた。

ロボット達の存在を。

「そっだよ…どうして？」

ロボットたちは、あの人を情報を口にできなかった。

誰も、俺に教えてくれなかった。

だから俺もあの人への存在は疑わなかった。

「どういう事だよ、これはっ」

エレベーターロボットにコマンダー達の部屋聞き、たどり着いた俺はそう口を開いた。

あの人への仕事部屋に会った水槽スクリーンと同じ一にモニターがあつて、一つの寝椅子に一体、その周りに他のロボットたちが立っていたけれども、皆、きよとんと俺の顔をみつめていた。

「真似つて…順谷君。俺達には何がなんだか、さっぱりわからない」「ふざけるなっ」

バッテリーのとぼけた声によりさらに怒りの火がつき、近くの壁を思いっきり叩き付けた。

「お前らは、あの人を死んでいると知っておきながら、くだらねえ演技をして、俺をだましたんじゃないか」

「…。順谷様。私達には、何のことだか、さっぱりわかりません」寝椅子の向きを変えて、始めてみるロボットは、さらりと静かに言った。

「変ですよ、順谷さん。だって今、ボスに会ってきたじゃありませんか」

「ああ、会ってきたよ。映像とな」

「映像？ボスはボスだよ」

ソシエゴも無邪気に返答するアネシスにも、目を反らすことなく、まっすぐに見つめ返した。

「な、何を言っているんだよ、あの人は」

「順谷さん。最近、ボスは眠りっぱなしなんですよ」

苦笑してエムカが言った。

「……………」

俺がロボットたちの『奇妙』に気になった時…

「あはははははははっ」

静まり返ろうとした空間に水をさしたのは、その笑い声と侵入者だった。

「まだ、わからないのかい、坊や。ここにいる高性能なロボットたちは『死』を理解することができないんだよ」

「ちよつと、どこから入ってきたわけ？」

「教えるわけないわよ。そこを塞がれたら、また入り口さがさなければならぬんだから」

ふんと鼻を鳴らしてから、シユクシヤは俺に向いた。

「大累順谷。ここにいるロボットたちには『野心』の他に『王の死』もしくは『王の死後』がプログラムされていないのよ。

最高責任者がいなくなった時の行動を入力されていない。ゆえに、あれを見ても眠っていると判断する」

「不法侵入者。ただちに退室しろ」

「このロボットは、あれが死んでいると認めたくないのよ」

「やめる。やめるおお」

バッテリーの叫び声が、部屋いっぱい響き渡った。

まるで彼の声に力があるかのように。

窓ガラスが割れてしまうのではないかと思うほど、彼の声凄まじ

いものだった。

獣の咆哮のようで…それが悲鳴だとわかった時

「……………」
すべて遅かった。

… … … … …
声が消えた時、辺りは無音に包まれていた。

誰一人、声を出すものはおらず。

誰一人、動き出す者もいなかった。

「…みんな？」

ロボットたちは石のようになってしまった。

まるで、彼らだけ時間が止まってしまったかのように。

いや、違う。彼らは

「あつはっはっは。皆、あなたのせいで機能停止しちゃったのよ」

結いー、動きだしたのは、シユクシヤであった。

「あなたとあたしが禁句という魔法を唱えたから。皆、石になっちゃったのよ」

「禁句だと…」

そう。ロボットは与えられたプログラムにだけに従う。そのプログラムがなければ動けない、ただの鉄屑なのさ。

ウエストルム・キングダムのロボットが持つプログラムの中で一番重要なプログラムは『ボスの指示だけに従うこと』まあ客を大切にするっていうのもあるけれども、ボスが一番重要。

で、その大切なプログラムが成り立たなくなったらどうなると思う？エラーを起こしてフリーズしてしまうのさ。

ボスが死んだと認識するのは、そのプログラムが削除されたのと同じ事になるんだよ」

「……………」
あざけ笑いながら説明するシユクシヤの言葉に、俺は置かしてしまつた罪の深さを知つた。

彼女らが、あの人の死を隠していたと知つた時、裏切られたとし

か思えなかった。

慕っていながら、ないがしろにされた気がして。ただ怒りだけがこみあげていた。

だけど、それは裏切りではなく、自分たちが存在する理由を守るための事。

問い質しても否定するのは、最後の抵抗を試みる彼女達の悲鳴でしかなかったのだ。

「……………」

ボスの存在に左右されているのは俺だけではなかった。

彼女たちはボスの存在なしには生きていけない。

万能の力を持ちながらも、精神はガラス一枚でできているというのに。

俺は、それを割ってしまった。

「……………」

俺は動けなくなってしまった一体、ソシエゴの髪を撫で、その姿を情けない顔で見つめた。

人と同じ漢書をしていて、熱を帯びないソシエゴは人形のように表情を消し、ただまっすぐ見続けていた。

彼の目に俺が映っていてもそめを知ることはない。

「はははは………」

むなしい笑い声が響いて消えた時、シुकシャの声が再び響いた。

「で、気づかない?」

「何が………」

「このボスは死んだっていうのに、ねどうして、ボスの命令がくるんだい?」

「……………」

「ロボットたちの動きの事で気づけなかったけれども……そうだ。

「このロボットたちは自分のプログラム維持のためボスが生きていると思っ込んでいたけれども、あれが新しい命令なんて言えるわけがない」

「じゃあ…誰かが命令をているって事が…でも誰が」

「あはは、はははっ」

無音に閉ざされた空間いっぱいにくくしゃの笑い声が響いた。

「まだ、わからないのかい？ロボットに命令を出せるのは人間だ。

坊や以外に存在する人間は客と我が主人のみ」

「何だと…」

勝ち誇った顔をするくくしゃの顔を呆然と見つめることしかできなかつた。

「くくしゃの主人が…」

「そうさ。マスターがボスの命令を出しているのさ。ここのロボットは音声だけではなくキーボードで入力した言葉を受け入れることができる。女であろうと命令なんて簡単にできる」

「……………」

「さあと、助けしてくれるロボット達がフリーズしたところで、来てもらおうか。我が主人のところへ」

呆然と立ち尽くす俺に選択の余地はなかつた。

連行

シユクシヤに利き手首を掴まれ、エレベーターを下りた。

ロボットたちが動かなくなった中、エレベーターは普通に動いていた。電気だけで動くからだろうか…

建物を出ると、容赦ない日差しが俺に振り注ぐ。

シユクシヤが進む道に木や建物の陰はなく、俺を捕虜だと無言で言っているように思えてならない。

体が熱気に包まれる中、シユクシヤに掴まれた手首だけは別世界だった。

冷たい手は、変わってしまった、あまりにも早い出来事についていけずぼんやりと夢心地に感じてしまう俺を現実に戻させた。

もう、あの人は生きていなくて、ロボットたちは動けなくなってしまった。

そして、抵抗する術のない俺は、敵に連れられて行く。

シユクシヤの足はビルを出て、宿泊施設を通りすぎて、にぎやかな遊園施設に出た。

そう、にぎやかだった。

絶叫マシーンから楽しい悲鳴が響き。子供たちが走り回る。

様々なアトラクションは、そんなお客様のためにフル稼働し、その横でお掃除ロボットがてきぱきと…

「動いている…」

掃除だけじゃない。アトラクションを稼働させるロボットに、今おれたちの横を通り過ぎた巡回警備ロボット…。

何事もないように、営業は続いていた。

「フリーズしたコマンダーロボットと直結していないからさ」

僅かにこぼした言葉から推測したらしく、シユクシヤはさらりと答えた。

「でも、何事もないのは今のうちさ。」

製造番号の桁が大きくなるにつれて、ロボットの行動能力は単純なものになっていく。自分の役割範囲を超えた事態になった時、桁の少ないロボット、100桁ならば10桁のロボットに回答を求め、事が複雑になればなるほど桁は少ないロボットに回答を求め、最後にコマンダーだ。

物事が平和なうち、それと……」

シुकシヤは言葉を切り、にやっと笑った。

「まだ、何かあるのか」

「閉園時間だよ。この王国の門をしめるのも、営業活動と夜間活動するロボットの入れ替え。それら全ての指示、宣言しなければならぬ。コマンダーロボットたちがね。」

閉園時間を過ぎてもコマンダーロボットから指示がなければどうなる？当然、回答を求めてくるだろうよ。だけれどもコマンダーは動けない。となると」

その状況を目にしたかのようにシुकシヤが笑った。

「マスターはここで待っている」

そう言って足を止めたのは、1つのアトラクションだった。

「……………」

点検中と看板がかけられて俺以外の人間はいなかった。

しかし、

「ここですか？」

と問い返したくなる所だった。

小さなスーパードームにはある半円ドーム型の室内アトラクションで黒色に塗りつぶされ宇宙の星々を現わす点や惑星のような鮮明なイラストがあつて一見、プラネタリウムにみえるけども、イラストはどれも赤色をしていた。

それから、入り口の上にかかれた文字はおどろおどろしく

『絶望空間』と書かれていた。

「……………」
『絶望空間』

俺はエムカとの会話を思い出した。

あまりにも恐すぎて、年齢制限と本当に体調の良い人じゃないと入れないようになってしまったアトラクション。

『絶望空間の恐怖はメインにありますからね。メインはブラックホール空間と呼ばれ。一組、人団体ずつ入れるんです。薄明りしかない空間の中でランダムに決定される出口を自力で捜さなければなりません。もちろん『脅かし』もランダムに発生しますから』

「……………」

そんな所でシुकクシャの主人が待っている…。

「怖いのかい、坊や？」

にやつと笑うシुकクシャにムツとしたものの何も言えず、前方にいるシुकクシャに連れられるがまま、歩き出すしかなかった。

『ボスから受け給っております』

出入り口に看板を持っているロボットが、俺達を通してくれた。

看板を持っているロボットは『ボス』と言ったが、間違いなくシुकクシャの主人がボスとして命令したものだろう。

「はい」

ロボットが持つ看板には『注意』という文字と共に、その下にスクロール文字が流れていた。

『この先のアトラクションは、脅かすためにつくれられたものであり、プラネタリウムではありません。』

また、次の方は決して入らないでください。

18歳未満の方。

心臓や胃に負担のある方、もしくは、負担をかけたくない方。

妊娠されている方。

その他、こういうものに弱い方。

ロボットが入り口でチェックし、該当されそうな方に声をかけています。

お客様の配慮を考えたうえのことなので、なにとぞご協力をお願いします』

「……………」
注意を呼びかけるための重要な事なんだろうけれども、俺には怖さをあおりたてているようにしか思えなかった。

第一歩めから、暗室に包まれていた。

直射日光に干された体にとって、ひんやりとした空気は心地よかった。

これで乗り物に運ばれてくれるのならば嬉しいのだけれども…世の中そんなに甘くはなかった。

「十分、怖がることね」

シुकシャの場合『怖い』という感情をプログラムされていないが『他人が怖がっているのを知る』プログラムはあるらしい。

とはいえ、捕われの身なのでシुकシャの手が離れることはなく、先を誘導してくれるようだ。

土のような柔らかめの床を踏み締めて、闇の中では役にたたない目で辺りを見回した。

もちろん、何も見えない。

膝の高さに設置された進む方向を示す程度の明かりが一定感覚にあるのと。

前方にぼうつと光、通路の出口らしき弱々しい明かりだけだった。

2、3人が並んで入れる通路は長く、あの先まで何か起きると言い表してもいた…。

「……………」

『何か出る』とわかっているながら歩くものほど嫌なものはない…。

「……………」

…後ろから。

ひたひたひたひたと微かに聞こえてきたんですけれど…

これが、そうなのか…

「……………」

嫌だけれども、振り向かなければ…

肩に手をやって、にやりと笑ったり、はたまた寸前まで近づいて突然笑い声をわあげたりするかもしれない…

という結論に達した俺は、背後の光景わ目の当りにした。

「……………」

誰もいない…

「何だ…」

安心して降り戻ったその時

「ひ…」

く、く首に、うなじに生暖かい風がふわぁ〜と。

「ははははっ。さっそく、ひっかかたわね」

シुकシヤは陽気に笑ってくれたよ…。

「上から送風機が下りてきていると言うのに、気づかないで、わざわざ驚くとはね」

「……………」

シुकシヤの目には暗視カメラがついているようだ。

「あれだけで、あんなに驚くなんて相当の怖がるなんだね、君は」

小馬鹿にするシुकシヤに反論したかった…けれども。もう、新たな脅かしロボットが起動していた。

遠くで、何かがぼうつと光って、消えた。

『この先にもまだ、あるのか…』と置いていたら、黄色い光りは、また光って消えた。

今度はだいぶ近くで、下から上に。

「……………」

さらに近づいた光りは上から右下へ。

右から左へ消えていった物体は細長くて、口をぱっくり開けた巨

大な口だった。

上半身ぐらい大きな口だけの物体は暗闇でも見えるように、光って

それが向きを正面に変えたから。

つまり：俺達のほうへ襲いかかってきた。

「わっわっわっわっ」

予想もなかった突然のことに、座り込み。

それから、ふわりと浮き上がった。

「まったく」

シुकクシヤは片手で楽々と俺を持ち上げ、自分は巨大口の餌食：ではなく、彼女のボディに光る巨大口が通り過ぎていった。

「立体映像……」

「まったく、右から左に通り過ぎるだけの映像だというのにさ。人間はそこまで驚けるものなのか？」

「人間は、驚いたり、怖がったりして楽しむものなんだよ……」

反論したものの、その言葉にむなしさを感じずにはいられなかった。

シुकクシヤにげらげら笑われる中での情けない自分の行動。自尊心がボロボロだよ。

「……」

シुकクシヤは鼻で笑うかと思いきや、表情を消し、動きを止めた。「怖がることも楽しむ……」

楽しめる

楽しむのは、人間の特権というものだな。ロボットは自分のために楽しむことという言葉はない。主人を『楽しませて』それを見て、自分の存在、幸福というものを感じ取る。

私には、わからない。

人間はどうして、こんな『負』の感情を増発させるものをつくるのか」

見上げているシुकクシヤの表情は困惑しているように見えた。

まあ、確かに。ロボットはプラスマイナス感情がはっきりと分けられていて負を作らないようなプログラム構造になっているのだから。

まあ、俺も、ここは理解できないけれども。

ここのアトラクションがテレビに出ていたのを見たことがある。その時の記憶は、かなり薄れて大まかなことしか覚えていないけれども、この脅かしアトラクションは、新しいお化け屋敷になっているらしい。

まずは、すべてコンピュータで作動されていること。

あと、お化けが死者系ではなく、宇宙からやってきた生物。異星人であること。

…確かに。さっき目の前を通り過ぎた巨大口も、牙がギザギザしていたような気がする。

驚くことに専念していたから、正確に覚えていないけれども…

「……………」

そして今、一人がようやく進める狭い通路も。

イソギンチャクの先っぽみたいなピンク色をした無数の物体が指や腕、全身に触れる旅にわさわさと自ら動きだし、無数のむしや生物がうごめいているようで気味の悪い感触を味わっていた…

これも、未知なる星の未知なる洞窟を通っているような感じがする。

「はあ〜」

ふよふよするピンク色の視界から再び薄闇に戻った時、安堵のため息をついたものの『人間の特権感情』を持たないシユクシャはスタスタと歩き続ける。

手首を掴まれたままの俺も、後方を振り替える暇もなく、歩くしかなかった。

「……………」

歩き出したはずなのに…おかしい。

ピンク色の通路からも完全に抜け出たはずなのに、シुकクシヤに捕まれていない方の腕は、さっきの感触から抜けきれていない。

「……………」
振りかえって見るんじゃなかった。

ピンク色の細長い物体が、蔓のように巻きついているのだから…。

「……………」
とにかく、外さなければ…しかし、蔓のような舌は、がっしりと力が入っていて。

しかも…無数にある、そのとつきぶつはざわざわと、一本一本生きていく虫のように腕の上で動いているのだ。

その感触以上に気味の悪い不快感が腕から力をそぎ取る。

「……………」
さらに。

その伸ばした舌の根元、本体が（淡く発光してくれているので見える）変な生物が付いていた。

黄緑肌をした。縦長の直方体に目を一つに手と足がある。

それを見て恐怖におびえることはないけれども、こんなのが後ろをついているのは、不気味でしかない…。

さらにさらに悪夢は続く。

「見るんじゃなかった…」

振りかえった事を後悔するほど、背後の光景は悪くなっていた。その生物が近づいてきているんですけれども…

歩幅が大きすぎて、俺が2歩進むと生物は3歩分進んでいる。

「……………」
一歩、一歩、確実に進んで…は、背後に…

俺は『怖い』感情のないシुकクシヤに助けを求めようかと考えたが…男のプライドをなんとか保った。

「……………」
それが『正解』だったと知ったのは、それから数秒後だった。
「れ？」

間近にいた生物は、俺の前に出たから。

前に出て、どんと俺との間を広げて行った。

…
襲いかかったりするのではなく、俺の前に進むだけだったらしい。
…しかし

生物が前に進む以上、腕を捕まれている俺も早く進むしかなかった。

「シユクシャ、これは一体なんなんだ」

俺は助けを求めず、質問した。

「知らない。だが、この生物が連れて行く先はメインルームとなる
そう言くと、シユクシャはつかんでいた手首を離した。」

「私はメインルーム前で待機命令が出ているから、ここまでだ」

え、ここから先は、これが誘導？

「メインルームでは、我が主人がお待ちになられている。いいか、
くれぐれも失礼のないように」

「失礼つて、シユクシャらがやった事はどうなんだよ」

反論したものの、謎の宇宙生物に連れられて行く俺では格好がつかず、言われた方も優越感があるせいか、冷笑するだけであった。

仮の王

引つ張られるがままに進んでいくと、青く、淡い照明に照らされた広い空間に出た。

円形の部屋の奥にある鉄製の扉が客を待っていてくれた。

片開き式の扉は膝上ぐらいの高さに設置してあり、ごく丁寧に台が置かれていた。

それだつたら低い所に設置すれば良いのにと、つい愚痴をこぼしたくなつた。

先を進む生物が近づくと扉は自ら開いた。

かまどをイメージしているのか、赤い光りがその先の空間を染めている。

宇宙生物は『扉の中に入れ』と黄緑色の手で空間を指差した。

赤く暗い空間は、熱くはなさそうだけれども、一人一人座るしかない狭いもので、空間を目にした俺は電子レンジを思い浮かべてしまった。

一歩中へ

腕を不快にさせていた舌が緩み引いていくと、扉はゆっくりと閉まった。

「……………」

それから数秒後、ゴトゴトと音をたて始め、狭い空間は少し揺れ始めた。

狭い空間は赤から薄闇へと変わりそれから目の前に緑色をした四角いボタンがぽうつと光った。

『ギブアップされる方は、押してください』とボタンの中にかかれていた。

でも、これを目にしたのは始めてじゃなく、いたるところで目にする事ができた。説明できなかったのは、色々と…脅かされ、振

りまわされていたため、説明できなかつただけで。

怖くなってどうしようもなくなつた時に抜け出せる。怖さを楽しむ以上、なくてはならないものなのかもしれない。

もちろん、そのボタンを押すことはなかつた。

ガタガタと揺れる空間は、ぴたりと止まる。

右側の壁が引き戸のように開いて、今の揺れは移動するためのものとわかつのと同時に。

俺は、メインルームにたどり着いた。

広い空間は意外と明るかつた。

開発に携わつたエムカさんが熱く語つてくれたっけ…。

ドーム状の空間には7つの番号とドアがあつた。

壁に4つ、エレベーターと思われる柱に3つ。

説明によると、このうち1つだけが出口になっていて、ランダムに決定されると言つ。

「…れ？」

辺りが暗くなつたことに気づいた。

僅かな差だけれども、確実に光りが薄れている。

どうやら、今、明るいのはドアがどこにあるのか教えるだけで、

真の怖さを発揮するのは、これから先のことになるらしい。

とはいえ、敵に連れてこられた身なので出口を探すのではなく、

俺はシユクシヤの主人を捜した。

「……………」

いない

闇が濃くなつてゆく中、いくら目をこらしても俺以外の存在を見つげせない。

「…待つ以外に選択の余地はないよな」

見づらくなつて行く空間を見渡し、とりあえず近くの壁に背をつけた。

「……………」

それからしゃがんだ。

近くにあるエレベーターがどンドン闇に飲まれて行く様を、ただじっと見つめていると、空白になった頭は、話しかけるように記憶をよみがえらせた。

起こしてしまった罪の重さと、その末路を。

末路

このままアネシスたちが元に戻らなかったらどうなるんだろうと、頭は望んでいないのに推測し、その結果を映像化させた。

廃墟を

すべてが止まり、すべてが止まってしまった王国

アトラクションは停止し、乗り物に、制御室に動かなくなってしまうロボット達が横変わっている。

飲食店で折り重なって倒れているロボットたち。

売店で商品を散らばして、その上に動かない人型機械が

それから、すべての路上にその身を置く残骸が

「……………」

俺は残酷な、でもありえる冷酷な映像を消し

前方から来るわずかな風に気づいた。

空間は一寸の先も見えない闇と化し、目では何一つ捕らえることができないけれども。

目の前にある人の気配は、はっきりと感じ取れる…。

「あなたがシユクシャの主人ですね」

見えるはずもないのに顔を上げて、闇を見つめた。

「……………」

相手は、何も言わなかった。

「……………」

俺は背にしていた壁を手で突き飛ばし、その反動を利用して右斜め前に避けた。

危機を感じ取った体がいつの間にか動いていた。

それが正しい行動だとわかったのは、鋭い一風が左側から感じ取ることができた。

感じ取り、行動が遅かった俺の腕に触れる。

「うわあ」

痛みが走り、わずかな声をあげるや否や、それを聞きつけた相手の第二撃と思われる、新たな風が現れた。

人の起こした微かな風は、移動したばかりの俺の前に現れたのと頭上からの2つ。

「わああっ」

危険を声にする以外になく、左右に避けるにも体が動かない。

俺の体は後方に下がり、尻餅をついた。

それで逃れるられないのはわかっていて。

わかっていたから、体はあおむけに倒れていった。

この行動が無意味なのは倒れながらもわかっていて、だけれども体が言う事をきかない。

振り下ろした敵の鋭い武器は、そのまま胸上まで進んだ。

進んで…止まった。

逃れることのできない俺は胸の激痛を待つしかなかった。

「……………」

しかし、10秒、30秒、1分…胸上から嫌な気配がするものの、それ以上近づくことはなく。

長い、永い時の中、ただ待つしかなかった。

相手の視線が俺に向いている。

その目に殺意に近いものがあつた。

……………

さらなる時が過ぎ去った後。

「認めない」

短い声が闇の中から響き、刃が離れて行く気配がした。

それから足音も。

「……………」

危険が逃れた俺は、とにかく起きあがった。

ふらつく体を何とか立ちあがらせて、それから声を放った。

「待つてください、エムカ」

「……」

その声は聞き間違えることのできない声。

「……。シुकシヤ、明かりをつけて」

返答することなく、部下ロボットに命令をくだし。

その姿を現した。

「マスター。点検用の照明に切り替えました」

シुकシヤが姿を現さず、声を放った。

「エムカ……」

サングラスらしき眼鏡を外すエムカさんの表情はなく人形のように思えた。

「あなたは、ロボットなのに……なぜ？」

だって、ロボットは命令を出すことができないって……」

「……」

エムカは一度、俺を見つめてから口を開いた。

「私は人間です。」

あの子達には私もロボットと認識させれば、疑うことはありません」

人間という言葉に俺は王国に着た時を思い出した。

差し伸べられる手を握ったとき、温かくて『人間のようだ』と思った。

しかし本当に人だとは疑いもしなかった。

「だけれども、今のは？暗室の中で自由に動けたし。それに、携帯は手に埋め込まれていたじゃないですか」

「目は暗視用の眼鏡。携帯は……」

エムカは手の皮膚を剥がした……いや、肌と同じ色をしたゴムのよ
うな布に一台の携帯電話が組み込まれているのを俺の前に差し出した。

高性能っぽく見せれば、人間だってロボットにみえると、言い表してもいた。

「……。エムカ。あなたがボスの代わりとして命令を出していたんで

すね」

「はい。

ボスの死は突然でした。

王冠のシステム解除、改善をすることもできず。もちろん、王冠の場所も知らないまま。

もし。私が『ボスの命令』としてロボットたちに指示を出していなければ、我がウエストルム・キングダムは道連れになっていたことでしょう。

順谷さん、これは罪でしょうか」

「…いえ。やむ得ない事だと思います。

でも、なぜ、ロボットに成りすましててんですか。

初めて会った時、事情を説明してくれても良かったんじゃないですか」

「この王国にはボスとお客様以外の人間は認められません。（順谷は特別なお客様となっている…）」

これもすべてのロボットに組み込まれてきたプログラムがそうなっているからです」

「王の命令だといえれば変えられることはできないんですか」

「できません。王の命令で指示できる範囲は限られています。大きなプログラムの改善ともなれば、王自らでなければ、ロボットは実行してくれないのです」

説明が終わり静寂に包まれた。

目の前にいるエム力は、表情のない人形のように、右手には武器、小型のナイフが握られている。

「なぜ、ナイフを俺に向けたんですか？なぜ？アネシスたちをあんな風にしたのですか？いやあんな風にしたのは俺ですね。でも、エム力さんは、わかっていたはずじゃないですか？

…こんな風に言っと、責任逃れしているようですが、俺は、自分の愚かさを認めた上で聞きたいんです。

もし、何か教えてくれれば、直接じゃなくても、借りた携帯電話

からでも教えてくれれば、アネシス達は、あんな風にならなくて済んだはずです」

「あの子たちは元に戻ります」
表情はなくエムカさんは淡々と言った。

「あの子達はロボットです。プログラムが成りたたなくなれば動けなくなる繊細な心をもっています。そのプログラムを『成り立つ』ようにすれば、いつでも元に戻ります。」

順谷さんが『今のは嘘だ』と、一言唱えるだけでいいのです。彼女たちは繊細ながらも単純な心なのです」

『単純』という言葉に心がちくりと痛んだ。

「それに彼女らは、すべてを忘れる事ができます。私が人間で、この王国にきたことも、過去の記憶にあったとしても、削除した今は何一つ覚えていません」

「……でも、傷つけたことには変わりないじゃないですか。俺も、エムカさんも、元に戻るとしても、繊細な心を踏みにじったことに変わりありません」

「……………」

エムカは目を大きく開き、それに気づいてくれた。

「……そうですね。そうでした」

人形から人に戻ったその表情は、困惑を見せ、床に視線を落としました。

この人は機械に囲まれた生活をしていた。

感情を持つロボットがいても、やはり機械は機械。

もし、俺がここに来なかったら、この人はロボットのよう人間になっただろう。

「……………」

エムカが視線を落としている間、長い沈黙が続いていた。

「順谷さん」

視線を上げたエムカは再び人形のような、いや、ロボットのよう
に思えた。

感情はなく忠実に動く機械のように、エムカさんはナイフを俺に向けた。

「順谷さん。あなたのことは、ボスから直接聞きました。

ですが、未だにあなたの事を理解し、受け入れることはできません」

「…当然の事だと思います。人間はロボットと違い、簡単に理解できませんよ」

予想できる言葉だったけれども、俺は言葉を選んでゆっくりと吐き出した。

「あなたがボスのクローンであっても、あなたをボスだとは認めません」

「ええ。当然です。俺は、俺です。あの人でありませんから」

「あなたがボスではない以上、私は王座を狙います。

王冠を見つけ出し、私は、この国の王になります」

ナイフを向けて敵意を見せたエムカさんの目は、人間のものになっ
っていた。

ロボットが持たない『野心』のある目に。

後継者候補

夢心地のような一日だった。

あの人の無残な姿を目の当たりにして。

怒って、アネシス達を機能停止させて。

シुकシヤに連れられるがまま、絶望空間に入り…

そこにエムカさんがいた。

エムカさんが年上の人間であるとわかったので、これから先は彼女に『さん』をつける事にした。

「……………」

その後は、さらに夢心地だった。

「皆さん…聞いてください。」

あの人は、ボスは生きています。

ただ…ただ、疲れて眠っているだけでした。

俺の早とちりで、本当にすみませんでした。

ごめんなさい」

エムカさんたちとビルに戻った俺は、魔法の言葉を唱えた。

「ボスは生きています」

しいんとした部屋いっぱい響かせた声がコマンダーロボットたちの耳に入り込んで行った。

言葉が耳に、体内にあるプログラムに浸透し、焦点の合わなかつ

た眼が元に戻って行く。

「順谷さん…ボスは、本当に生きていますね」

「はい。生きています」

ソシエゴ以外のロボットたちも口々に確認し、それぞれに答えるとロボット達は人間のよう微笑んだ。

「……………」

それから皆、誰一人例外なく、スイージーでさえ専用の車椅子に乗り、敵対するシुकシャもつれて『王の口と手』の所へ言った。シुकシャに向けるコマンダーロボットたちの視線は鋭かったけれども、口論すら起きず『シुकシャにも入るように、ボスが命令したわ』というエムカさんの発言により、例外なく中に入った。

「王の口と手。エムカ-1の持つ権限を使い、エムカ-1の凍結処分の命令を出します」

アネシスたちが驚きの声をあげる中、俺とシुकシャは代わらない冷静を保っていた。

『エムカ-1。あなたにはソシエゴ-1からの故障の報告は届いていませんが』

「もつと根本的なものです。私がロボットではなく、人間だからです」

コマンダーロボットたちのどよめきが、わざとらしく聞こえた。

でも、彼女たちは本当に知らない。過去にそれを知っていたとしても。

『了承。』

我がウエストルム・キングダムでは、王とお客様以外の存在を認めません。

ただちに王へ報告し、あなたが持つサービスロボット担当の職務を剥奪し、また、偽造による処罰を決めます』

「……………」

まるで白々しい演技のように思えた。

『ボスの応答がありません。』

ボスの応答が得られるまでの間、エムカ-1の存在を凍結。エムカ-1の職務をエムカ-01およびエムカ-02にあたらせます。

ボスの応答がでるまでの間、あなたの処罰は保留し、順谷様同様、お客様としての対応をさせていただきます』

王の口と手は新しい王が誕生するまでの間、ずっと報告を続けるのだらう…。

機械は機械。

プログラムされたことを忠実に実行し、それについては疑うことのない。

「……………」
王の口と手の声が消えて、空間が静寂に包まれると、エムカさんは振りかえって俺の名を呼び、前に来るように指示した。

「王の口と手。私達は王冠を狙います。次の王になるべく」

『王からの後継者募集が出ています。』

よってあなた方2名を後継者候補とみなします。ただし、王の処罰の決定内容により、候補権も剥奪することがありますので、ご了承ください」

「はい」

「では、正式なる候補者登録を行いますので、名前をフルネームでお願いします」

「大累順谷です」

「了承しました。」

大累順谷。あなたを候補者Aと、登録しました」

エムカさんも同じように、一歩前に進み、王の口と手を見上げた。

「矢原江矛香です」

「了承しました。」

矢原江矛香。あなたを候補者Bと、登録しました」

王の口と手の声が消え、空間は威厳に満ち溢れた静寂となった。

「……………」
それが3時間前のこと。

宿泊所に戻った俺は、ベッドに寝転がり、今日の出来事をDVD再生のように何度も繰り返し返し、時おり聞こえる声に耳を傾けた。

「…。エムカが人間だったなんて…」

ベッドのしたに体育座りをするアネシスがぼうつとしていた。

「…でも、いいのかアネシス。コマンダーロボットは、候補者の支

持とかしちやいけないんだろう」

「支持なんかしていないよ。アネシス、順谷と一緒にいたいから、ここにいただけ」

「……………」

相変わらず謎のロボットだけれども、アネシスが前と同じ光景でいることにほっとできた。

人間の従業員

あの日の記憶は、忘れたことがない。

「君が矢原江矛香さんかね」

リクルートスーツを着こんだ私は、履歴書と共にあの人の前にいた。

「はい。夏休み、貴園を来園した時。他園では見られない充実した設備、子供心を忘れない夢の空間。その魅力にとりこまれ、どうしても貴園の門を叩かせていただきました」

「江矛香さんの熱意は、嬉しいほどわかるが…。」

残念ながら、我がウエストル・キングダムでは人の募集はしていないんだ」

苦笑し、ボスは履歴書を机の上に置いたけれども、ひるむことはなかった。

断れる事は、最初から分かっていたのだから。

「分かっています。それでも働きたいのです」

「きついことを言うようだが、君の溢れんばかりの熱意があるならば、どこの遊園地でも雇ってもらえるよ」

「私は人が作る施設ではなく、ロボットが創り出す機械特有の力、機械だからこそ、使える能力を最大限に生かしてみたいのです。それに機械の短所を見つけ、補えるのは人間でしかできません」

「それを見つけるのは、私の役目だ」

ボスの声は、訴える江矛香の熱気を冷ますほどの威力があった。

口を閉ざした笑夏に、ボスはさらに不を語った。

「本当に残念だけでも、ここでは人を雇うことはない。

江矛香さんのように熱意を持って履歴書を持ってきた子は少なくない。でも、皆、断ってきた。

ましてや江矛香さんの場合、今まで来た子みたいにロボット管理を任せられる能力も持っていないとなると尚更のこと」

「技術は、これから学びとります。学校で適応資格のとれない学科を選択しただけで不正解というのは変です。」

今、技術を持っていてる人だって、生まれたばかりは何一つ資格を持っていません」

「れそれは屁理屈と言うものだ。さあさ」

「私は、あきらめません。なんなら、私をロボットにしてください。そうですよ。ここにはロボットだけなんですから、私もロボットにすれば……」

「はーっはっは」

ツポにはまったのか、ボスは突然、笑い出した。

「おかしな事をいう子だ。」

だが、ロボットになったとはいえ。君には、ここでやっていく能力はない。使えないロボットは処分行きだぞ」

「だから、これから学び取るのです。」

人間はゼロからスタートしていくのですから。必要となる技術ならば、これから学びとっていきます」

「ロボットにしると言っておきながら、もう人間か」

「……………」

「まあ、いい。好きなようにしなさい」

「え……。それって」

「ただし。ロボットにしないが、君もロボットとして見る。」

さつきも言ったように、使えなくなつたロボットは処分だ」

「はいっ。ありがとうございます」

鋭い視線をしながらも苦笑し、認めてくれたボスの顔は、寸分の狂いもなく、何十年先になっても鮮明に覚えていることだろう。

採用された私は、もちろん『がむしゃら』に頑張るだけだった。

とはいえ、能力のない私に与えられた仕事は本当に雑用以外なんでもなかった。

瞬時にデータ-を記憶し、完璧に作業をこなすロボットたちを見

て、何度、劣悪な自分に情けなくなつたことか。でも、ただ、ただ『頑張る』以外なかった。

牛歩のごとく、わずかな一歩だけれども、少しずつましになっていった。

それから気になつた事をどんどんボスに報告、または訴えていった。

『サービス業務担当』という職務を与えられるのは、ごく最近のこと。

人間の職場ならば、こんなに早く昇格するのはありえなかつたと思う。

もちろんの上がつてこられたのは、自分の努力が認められてくれただけではなく…もう一つ理由があつた。

『老い』という不安がボスの精神を蝕んでいたのだから。

「私は、孤独という言葉に慣れ親しんでいた。

人間同士、顔を付き合わせて家庭面や遊びの事を話すのは嫌いだった。

だからこそ、孤独なる王国を造つたのだよ」

ボスは良く、私を呼び出し話相手をさせられた。

「だが、虚しいものだな。

年をとると、その虚しさを感じ取ってしまう。

エムカ（ロボットして見ているので）は、孤独を感じたことはないかね。ロボットしかいない王国に移り住んで」

「スージー達がいいます。雑談会話能力のあるから、ロボットと話しているとは思えません。

それに寂しくなつたらボスのところに来ればいいんですし。ボスは人間なんですから」

「…。そうだな。私も寂しくなつたからこそ君を呼んでいるのだけな」

ボスの死は突然だつたけれども、自分の未来をなんらかの形で察知していたのかも知れない。

「クローン……」

「そうだ。エム力が来る前、後継ぎを考え、金を積み上げて完成させた子がいる。」

身元不明の孤児として施設に入っているが、養子のハンコを押した。もし……

もし、君が早く来ていれば……」

「順谷さんは19才さいですよ。」

無理ですよ。19年前なんて私、小学生ですよ」

苦笑してみせるしかなかった。

別にボスの座なんて考えても見なかった。

私は、ただ、ここの施設で働きたかった。

自分の力を発揮してみただけだっただけ。

「……………」

でも

ボスが亡くなった後。

なんと少しでも王国の存続危機を救うために『王の代理』という手を使って順谷さんに正体を明かすその日まで、続けてきた。

それを突然、順谷さんに受け渡す気は持てない。

それと

「それと……」

「？マスター。何か言いましたか？」

「ううん。なんでもない」

順谷さんに向ける目のせい。

ボスが生きていたとき、何も考えないようにしていた。いくら2人しかいなかったとはいえ……。

ましてや、ボスがいなくなったから順谷さんに。

「……………」

私は。

順谷さんを完全に拒み、突き進む道しかないと思う。

「……」

シユクシヤ。あなたは、先に戻ってて」

素直に答えるロボットに背を向けて、エムカは宿泊施設のロビーに向かった。

大きな体がゆっくりと動いて、椅子から見上げる視線は、相変わらず優しさが込められていた。

「バツトレイン……」

「さて、エムカ。久しぶりというほきかな。

それとも、はじめまして。矢原江矛香さんと、言うべきかな」

バツトレインは私を待っていたらしく、指し示す席には、アイステイーが置かれていた。

「どっちでも。バツトレインたちの好きなほうでいいわ」

「ならば『久しぶり』だな」

「久しぶりって、まだ一晩しかあけていないのよ」

「…そういやあ、そうだな」

コマンダーロボットたちは、私が履歴書を持ってここに来た記憶がない。

ボスの計らいだろうけれども。

「それにしても、エムカが人間だったとはなあ」

「ボスの発言があつたんだから。疑うことすらできないから仕方ないわよ」

「そうだな」

ボスが太陽は西から登ると言えば、ロボットは疑うことなく。それを信じてしまう。

空を見上げ現実を目にしたって、天体そのものが間違っていると考えるほど。ボスの発言を疑うことは、ロボットたちにとって不可能なのだから。

「で、エムカ。王冠捜しは、どうだい？何か目星はついたかい」

「全然」

と首を振って苦笑した。

。まったく見当がつかなかった。

ボスに遠回り、あるいは直接聞いたことなんて多々あったけども、何一つ聞き出せなかった。ボスがいなくなつてから、私室を探索したものの王冠の欠片となる情報すら見つけ出せない。

「そうか。」

助力が必要なら、いつでも声をかけてくれ。ただし、順谷君と平等に見ての力にしかねない。これだけは堪忍してくれ」

「わかっているわ。それが決まりなんだから。でも、嬉しい」

「何が？」

「皆、温かいんだもの」

…なのに、私は傷つけてしまった。

いくら元に戻るとはいえ、真実をさらけ出してしまったのだから。

「バツトレイン…皆に伝えて『ごめんね』って」

「？」

なんの事かわからずバツトレインはきょとんとしていたけれども、わからないまま、了承してくれた。

王冠

後継者争奪戦、第1日目を迎えた俺は…危険のどん底にたたきつけられていた。

「じゅくんや」

すっかりかけたはずの鍵を簡単に開けて入ってきたアネシスは、俺の寝ているベッドへ飛びこんできた。

17才設定の娘が上に現れて、さぞ幸せだろうと羨ましがらば、大間違い。

確かに、感触はあるかもしれない。しかし、人工皮膚の中にあるのは無数のケープルや半導体。そして金属。

「うわあああ。アネシス、乗るなっ。骨が折れる」

下手したら本当に折れてもおかしくはない状況なのだか…アネシスは不満顔をしていた。

「せーっかく。早起してきたのに」

「2度と起きられなくなったらどうするんだよ」

「…。それもそうだね。」

もし、止められなかったらアネシス、順谷の胸部分に正座して順谷がいつになったら起きるか見てみようと思ってたから」

アネシスの重さが一部分に集中して…完全に折れていただろうないや、一瞬で…。

程よく冷房が聞いているはずなのに、汗が流れ出たのはいつまでもない。

「ソシエゴの忠告に感謝するよ…」

「え、そっしいじゃないよ。忠告してくれたのはボスだよ」

ふき取ったばかりの汗が再び現れた。

「ボス…が、だと？」

「そうだよ。ボスが『アネシス、順谷の重りになるなよ』って行っ

「だから、漬物石ごっこやめたんだもん」

「順谷君、いる？」

早いノックをして変じをするよりも速く、エムカさんが部屋中に入ってきた。

アネシスがドアをきつちり閉めてなかったせいで入って来れたエムカさんの顔は鋭いものがあつた。

「おー、エムカ。おはよう。」

2人とも、ボスがね。朝食とアネシスたちの開園準備が終わつた頃に王の口と手のところに来てだつて」

「…。エムカさん、これは一体」

今までボスの代わりに命令してきたエムカさんに問いただそうとしたところ、問うの本人は、大きく見開いた目を2度3度まばたきした。

「…ということは順谷君の仕業ではないのね」

エムカさんの言葉は2つの意味を表していた。

一つは『王の命令』として発言したのがエムカさんではないこと。

もう一つは、エムカさんもボスの発言を身近な人間、俺の仕業ではないかと疑っていた事。

だから、険しい顔でここに来たのだろう。

「？な〜に言ってるの2人とも。ボスは、ボス1人だけだよ」

無邪気に笑うアネシスの正論に、俺達は互いに見合わせた。

アネシスは開園準備のため早々に退室し、残された人間はそのまま朝食を取ることとなつた。

疑問と新たな不安で食べる『おいしい朝食』も味のない鉄の固まりのように胃にたまる重りとなつた。

「ボスの命令もコマンダーロボットになりすましていたからこそ、使えたものよ」

「じゃあ、まさかコマンダーロボットに、まだ人がいるって事なんですか」

「それはありえないわ」

犯歴のあるエムカさんは苦笑した。

「ロボット達は、ボスの発言力があつたからこそ、私を疑うことはできなかったけれども。人間の目はプログラムに束縛されることな
く疑うことができるのだから」

エムカさんは自分の目を見て、共に生活してきた上で、疑いをも
てるロボットはいないと語ってくれた。

「私は順谷さんの仕業だと思つてました。順谷さんはボスと同じ細
胞なので、可能かと」

「いえ、俺は何も……」

「分かつていなす。順谷さんは、真面目ですし」

「いえ、小心者で行動がとれないだけです」

「でも、俺でもない、エムカさんでもないとなると、一体……」

朝食を終え、暑い外に出た。

新たに加わつたシユクシャとエムカさんの後姿を見ながら、さっ
きから続いている不安を口にした。

「第3者がいるんでしょうか？」

「さあ。わかりません」

不安を煽り立てたくないエムカさんは、そう言葉を放つた。

多分、エムカさんの頭中で、俺の知らないウエストルム・キング
ダムを記憶をたどっているのかもしれない。

「……………」

刻一刻と強くなっていく日のように、一歩進むごとに不安は大き
くなっていく。

建物について、暗い通路を通つて……広い空間に出た。

相変わらずガラスのような透明な柱型のロボット製造機兼『王の
口と手』がいて。その周りの壁一帯に同じ製造機が並べられてい
た。

「順谷にエムカ」

それらによって生まれ出たコマンダー・ロボットたちがいて、アネシスが駆け寄ってきた。

「後継者の確認：了承」

王の口と手が言葉を唱え終わった途端：

「お、おじさん」

あの日とが姿を現した。

驚き、昔の呼び名を口走ってしまったけれども…なんの事はなかった。

あの人…ボスは透明な製造機の中に、突然出現したのだから。作られし幻、映像であることに間違いなかった。

おそらく、候補が決められた次の日に指導できるように作られたんだろう。

その証拠にボスは、俺に話しかけてくれた。

「久しぶりだな、順谷。お前は、昔と代わっていないようだな」

俺に視線を向けることはなく、初めて再会したかのような言葉だった。

でもロボットたちは、疑問すらもたないのだろうな。

この、視線を変えない、ただ再生されるだけの映像であっても、ロボットたちは本物のボスと疑っていないのだから。

アネシスに向けた言葉も、そうなるんだろうな。

「お前達が後継者候補になって一晩がたった。気が落ち着いたところで『王冠』の捜し方を教えよう」

『お前達』と言った。あの人はエムカさんがこの場所にいる事を推測していたようだ。

エムカさんも平常心を保っているつもりでも、眉がっり上がった。いた。

「王冠の入っている箱を開けられるのは、一体のコマンダー・ロボットだけだ」

人の衝撃を吐き出した後、ボスは一度、口を閉ざした。

俺達の視線は順に4人の姿を見つめていて、見られる側のロボット達は表情を変えることなく、唯一の主人を見続けている。

ボスの口が再び開き、その言葉の詳しい内容を始めた。

「4人のコマンダー・ロボットの誰かが『鍵』となるが、聞いても無駄だ。どのコマンダー・ロボットも王冠を入れた箱がどこにあるのかわからない。つまり、プログラムされていない」

ボスの言葉は自力で見つけ出せと言っていた。

「王冠の入った箱は、すぐ見つかるころにはなく、すぐ取り出せるところにもない。鍵となるコマンダー・ロボットに『要請』しなければならぬ」

要請だ。その特殊能力を持ったロボットではなければ、取れないという事だ。

ただし、ロボット1体につき『要請』できるのは1回きりだけだ。後継者が何人いようが、ロボットは1回だけしか要請権はない」

「……………」
「1回ってというのは」

「1回しか使えないというのは、私がそうプログラムをしたからだ」
エムカさんの漏らした言葉に答えるかのようにボスは話を続けた。
「正解となるコマンダー・ロボットを見つけ出し、正しい要請をしなければ王冠の入った箱は開けられない。ということだ」

「……………」
「難しいと思うかな。だが、時間制限はない。ゆっくりと考えることだな。」

2人とも。王冠を見つけ出しなさい。
なお。

2人が4人のコマンダー・ロボットの要請権を使いきっても王冠が手に入らなかった場合。

王冠は私の物になる」

「それって……」

「……………」

「賢い二人ならば、それがどういふ事かわかるだろう。そうだ、お前達が考えている通りのことだ」

動かない王の下でロボットたちが働く。

しかし、エムカさんが抜けた今、新しい指示を出して王国をつなげる者がいない。

衰退していく…いや、もっと恐れる自体が起こるのかもしれない。

「私は2人の力を信じておる。

いいな、必ず王冠を見つけ出せ。

私の発言は、これで終了だ」

ボスは俺達に視線を向けることなく、微笑み。背を向けてた。

それから姿を消した。

推測

4体のコマンダー・ロボットのうちの一体が『王冠をいれた箱』を開けられるという。

「でも、誰が？」

俺は目にもコマンダー・ロボット名と、各担当業務それから推測を書いてみた。

スージー プログラム担当 王冠といったけれども、形ある王冠とは限らない。

王冠はもしかしてプログラムの事？

バッテリー 建物担当
では？

建物の柱の中とかに入っているの

新たなる注文をしたことはないか？
建物のうちボスから注文（または

のでは？
でも、その記憶を削除されている

ソシエゴ 衛生担当
ロボットのの中にあるとか？

ロボット修復もかねている以上、

名前がついたものはないか調べて
飲食系の場合、メニューに王冠の

（スージー同様、物とはか
ぎらない）

アネシス

警備担当

巡回について行ってみる。

金庫のようなものがあるかも

…もしかしたら王冠を入れた箱、

しれない。

「アネシスは…」

ペンを紙から離し窓外の空を見上げた。

「アネシスは、何かひっかかるところがあるんだよなあ」

人間っぽい、いや、人間くさい性格だからかもしれない。

「アネシスはロボットの中で感受性が強いって、エム力さんが言ってたっけ」

もし、アネシスが箱を開けられるコマンダー・ロボットだとしたらから。

彼女の持つ精神面の方なのかもしれない。

「……………」

とりあえず、そのことを書き加えてから、再び空を見上げ、それから遠く離れた地面を見下ろした。

俺は高く離れた小さな個室、観覧車にいるから。

観覧車にいる理由は2つ。

一つは1人で（特にアネシス）静かに考えをまとめたいから。

もう一つは、せっかく遊園施設にいるのに、ホテルとビルの行き来しかなかったから。

いや、最初に乗った絶叫マシンや絶望空間は（恐くて）満喫したとはいえない…。

「…ふう」

考えを髪に吐き出して、ため息をついた。

これから、この考えを行動にしなければならぬ。

まず誰を？どうする？

「……………」

その問いに直面したとき、俺の考えは知り込み尻込みをはじめた。スージーのプログラム解読も、バッテリー音の建物探索も、具体的な場所が特定できていないし……

それならばソシエゴの『どれかのロボットの中にあるかもしれない』案も。どのロボットに？いや、そもそもどの部分を捜せばいいんだ？

「……………」
頭は『決断』を拒否して、目は紙と地面を眺めるばかり。

『失敗するのが恐いからだろう』

心の中で現実を知る自分が、それを暴露した。

『コマンダー・ロボットを間違えずに選んで、正しい要請をしなくてはならない。』

行動に足を踏み入れた瞬間、正解か不正解か決まってしまう。

正しいコマンダー・ロボットを選び出せる確立は4分の1。全員は選べない。

その1歩で終わってしまうのだからな』

……。心の中が言っているだけあって本心でしかなかった。

もちろん恐い。『全てが終わってしまう』という言葉にとまどいたじろいでしまう。

でも、衰退は刻一刻と近づいている。

エムカさんからの、新しい指示ができなくなった以上『新しい何かを考える』人間はいないのだから。

「……やらなければならない」

……でも、その一歩踏み出す勇気がないのだ。

そのまま無駄なときが流れた。

さらにしばらくしてガタンと中が揺れた。下に着いたようだ。

俺が立ちあがった時、扉が開き黒い影が入りこんできた。

「……………」

アネシスの奴。やっぱり嗅ぎつけていたのか…と思っていたら違
った。

「エムカさん」

「これから先の打ち合わせをしようと思ひまして。よろしいですか
？」

断る理由はなかった。

エムカさんが入りこんできた時、一瞬、絶望屋敷の件を思い出し
てどきりとした。

でもエムカさんの落ち着いた声と微笑みを目にするると動揺はどこ
かに消えてしまった。

エムカさんは、いつもの黒いパンツスーツに青いシヨルダバツ
クを肩からかけている。見なれた姿、でも、OLっぽく見えるのは
彼女が人間とわかったからからだろう。

向かい合わせに座るとバツクから半透明のフォルダを取り出し
て、それを見せる前に言葉を放った。

「まずは順谷さん。王国の危機になる以上、争っている場合ではな
いと思います。それは同意してくれますか？」

「はい。俺も考えていたところでした」

俺の返答にエムカさんは微笑で『良かった』と表してくれた。

それからフォルダごと俺に手渡した。

手にずしりと重みが伝わってきた。数十枚はあると思う。

「その中には『スイージイ攻略方法』が書いてあります」

「攻略方法…ですか」

「スイージイが『王冠の入っている箱』を開けられるロボットだと
した場合、箱はパスワードつきのフォルダ王冠はプログラムとなる
でしょう」

エムカさんも同じ事を考えていたらしい。

「ボスが亡くなった後。王冠はプログラムではないかと思った時が
ありました。

プログラム管理をするスイージイーに聞き、それらしきものはな

いか当たってみましたが、重要となる部分はパスワードでブロックされて行き詰まっています。いくら『ボスの命令で』と言ってもスリージイーはパスワードを解除してくれませんでした」

「パスワードを知っていないとだめだったんですか？」

「はい。それかボス直接の命令でない限り開けられないと言っていました」

エムカさんの使っていた権限は制限があるようだ。

「スリージイーにパスワード付きのデータを開けさせる事を要請すれば先に進めると思います。」

その書類にはスリージイーに聞いたときの記録と、パスワード付きのデータ一覧。それと個人的に気になった個所を書きとめたものです」

「はあ。」

でも……」

どうして、これを？と聞こうとした俺に気づいたエムカさんは、おもむろに尋ねた。

「ところで順谷さん。傷の方は痛みますか？」

エムカさんは視線をずらし、その事を思い出させた。

あの時は生き延びるために必死だったから気がつかなかったけれど、避ける時ナイフの先が左腕に触れていたらしい。

「たいした傷じゃありません。包帯しているのはソシエゴが念入りに……というより大げさにしたからです」

「そうですか。でも、それをしたことに後悔はしていません。」

私は、あなたを認めません。もちろん、後継者として」

エムカさんに表情はなく、機械のように思えた。

「じゃあ……どうしてこれを？これは……」

「その書類は、順谷さんを陥れるための罠や、まったくの嘘ではありません」

質問の意味を読み取り答えてくれた。

「信じられなければ、使わなくても構いません。でも、使用しなけ

れば返してください。私には王冠をいれるための大切なものですか
ら」

「……」

エム力さんが手を差し出す仕草はでてこなかったから、そのまま
手にした。

それから同じ言葉を放った。

「どうして、これを？」

「絶望空間で、あなたを仕留めそこねたからです」

すつと立ちあがったエム力さんは人形のように表情がなく俺を見
下ろした。

機械から人形へ

機械と人形、どちらも同じ非人間だけれども人形は、冷たく思え
た。

「ましてや『王冠を入れる箱』を開ける鍵がコマンダー・ロボット
にあり、その要請も二分されてしまった今、順谷さんは大切な存在
です」

「…それで。これで王冠を手にしてしまったら…」

「その時はその時です。」

その時は、順谷さんを王座から引き摺り下ろせば良いのですから
言葉を放ったエム力さんの表情はわからなかった。

自分の席に振り向き、座って窓外を眺め始めたものの、シナモン
色の髪にすべを覆わせてしまったのだから。

それからしばらくして、俺の名を呼んだ時、まっすぐ顔を向けた
エム力さんは人間のものに戻っていた。

開いて出てきた言葉はさっきの続きだったけれども。

「それでも、順谷さんは王座を狙いますか？」

「はい…」

「恐くありませんか？」

「いいえ。恐くないと言ったら嘘になります。」

でも俺には、ここしかありませんから。

でも、もちろん、ボスを…あの人を純粹に『おじさん』と呼んでいた頃から、この施設には興味を持っていましたし…。

俺がクローンと知ってからは、なおさらのこと…」

1 回頭で考えてから口にすれば良かったと後悔するほど、ぎこちない返答になってしまった。

「クローンであっても、順谷さんは別の存在ですよ。ここに縛られることはありませんと思いますが」

「…確かに、そうなんですけれども…。今の俺には…ここ以外のことを考えることはできません。考えられないんです」

「…そうですか」

それからエムカさんはすうつと立ちあがり、外から開けてきた扉に向かった。

いつの間にか2週目が終了したらしい。

しかしエムカさんは外に出ることはなかった。

その理由は、ただ一つ。外から中に入ってきた者がいたから。

「順谷にエムカ、みーっけ」

…今度こそ、間違いなくアネシスだった。

アネシスはちゃっかりエムカさんの座っていた席にどんとお尻を乗せた。

…それって3週目？

「では順谷さん」

アネシスと入れ違いにエムカさんは下りて行ったけれども、くるりと振り返った。

「アネシス、1周したら私の所に来てね」

「うん。いいよー」

「アネシス。」

あなたを要請するロボットにしたから」

目を見開く俺達に背を向けてエムカさんは歩き出し、忠犬のように主人を待っていたシユクシャが後について行った。

コーヒータイム

やはりエムカさんもアネシスを狙っていた。

アネシス

人懐っこくて人間くさいロボット。

気になっていたものの、エムカさんに取られ、おまけに。

「順谷さんが指示されたプログラムの実行と、パスワード付きのデータ-をピックアップし、解除しました」

エムカさんからもらった書類通りに行っている。

俺は、いくらボスのクローンであったとしても、知識の欠片一つない学生に過ぎない。

子供だから、まだ学生だからという言葉に甘んじたくなかった。

でも、何をどうすればいいのかわからない。

わからないから、今ある1本道を進む。

それで満足できるわけがない。

「…ふう」

考えれば考えるほど悪循環になっていく俺を止めたのはソシエゴだった。

「順谷さん、世の中、簡単にはいきませんよ」

トレイにあるコーヒーを渡し、少女のようににっこりと笑った。

俺が眉間にしわを寄せているのは王冠が見つからないからと思つての発言らしい。

「千里の道も一歩からって言うじゃありませんか。

どんな大事業でも最初は小さな一歩にすぎない。また、それをこなすものも最初は人の手がなくては生きてもらえない赤ん坊だつて。耳がタコになるぐらいボスがおっしゃいます」

… …

小さな1歩か。

最初の1歩を踏み出すこと。弱々しい前進をあきらめずに続けることが肝心だと。

「……………」

あなたが言っていた言葉、勝手にそう解釈していいですか？

「…。ありがとうソシエゴ。おかげで元気が出てきたよ」

「い、いえ。どんでもごさいません。僕は、ただデータ・ないにあつた言葉を言っただけです。

それよりも順谷さん、肩はこつてませんか？お腹の具合はどうでしょう？何か頼みますか？」

ソシエゴの対応に、今度はこつちがとまどう番だった。

アネシスに近いと思われる、まわりつくような行動理由を教えしてくれたのは部屋に入ってきたバッテリーインだった。

「ソシエゴは『世話する人』が来たから、はりきっているんだよ」

指摘されたソシエゴは、まばたきをして考えてから『そうですね』と素直にうなづいた。

「ここに人が来ることなんてまずありえませんでしたし。最近のボスはエムカさんばかり指名でしたから。

でも、エムカさんが人で後継者候補になったから、また呼んでくれるかな」

「…。うーん、最近のボスは何でも1人でやっているみたいがらなあ」

「…そうですか」

純粹にボスのことを考えるソシエゴに『そうだろうね』と型どおりの嘘をつくことができなかった。

ボスは2度と世話を頼むことはないのだから。

がっかりするようでもソシエゴの心にエラーが起きないように、遠まわしに言った。

「ボスが声をかけず、暇なら手伝ってくれないかな、ソシエゴ。もちろん王冠捜し以外のことで」

「はい。もちろんです、順谷さん」

ソシエゴの透き通った声と共に出てきた笑顔は、見ている者にも笑顔にしてしまう力があつた。

「順谷さん。パスワード解除したデータ-内に『Ookan』もしくはもしくは『crown』といった単語は含まれていません」

一段落したところでスージーが結果報告を出してくれた。

「字違いのキーワード『Ookan』でもやってみましたがヒットするデータ-はありませんでした」

「そうですか…」

要請権を使って当たって見たものの、簡単にくだけてしまった。

「箱…スージー『箱』とか『王の箱』とかいった言葉はどうでしょうか？」

もちろん、それであきらめる気にはなれない。

俺はとっさに思いついたことを頼み、書類を改めて目に通した。

もらった書類は細かく書きこんでいて、それでわかりやすく指示が出せるようになっていた。

まるエムカさんが自ら指示できるように…。

指示書を読みなおし、さらに思いついたことをスージーに頼んでみたものの、最終キーワード『王冠』もしくは箱につながることはなかった。

「焦らず、一息いれてみてはどうでしょう？」

2杯目のコーヒーとお茶菓子を運んできたソシエゴは、落ち着いた微笑みを向けた。

「肩の力をぬいて一休みすると、新しいアイデアが生まれるってボスが言ってますし」

さつきと代わらない微笑を向けるソシエゴは良くも悪くもロボットだった。

後者は機械的な感じがして。

前者は、変わらない笑顔こそが俺に落ち着きを与えてくれた。

コーヒーを口に含み背もたれ椅子に見をゆだねて天井を見上げる

と、スージー側に顔を向けるソシエゴとバツトレインの顎が見えた。

「……………」

同じ顔の一部で材質とか同じだけれども大小、遠近が違っていて……同じなのに違う……。

スージー

ふと思いついた俺は元の姿勢に戻した。

「違う国の言葉っていうのはどうかな？フランス後とかドイツ後の『王冠』っていうのは」

「でも、順谷さんアルファベットじゃない言葉もありますよ」

「ロシア語やギリシャ語とか当てはまるな。Nを逆にした文字とかもありますし」

俺の意見にソシエゴとバツトレインは正しい情報を教えてくれて、スージーは変換してくれた。

「では、その言葉自体を英語になおしてみましよう。

『王冠』を『Okkan』とするように。完全に買えることはできませんが、やってみましよう」
「なるほど……」

3体、いや3人の速い頭の回転に舌を巻くことしかできなかった。「とりあえず、20カ国の言葉をあたってみます。順谷さん、パスワード付のデータ - だけにしますか？それともすべてに範囲を広げますか？」

「…えーつと、スージーさん。エムカさんは、この方法をやつてましたか？」

不公平になるかと断れるかもと負ったものの、スージーさんは素直に答えてくれた。

「いえ。英語と日本語だけです」

「ならば…大変だと思いますが、スージーさん、全てのデータ - を見ていただけないでしょうか」

立ちあがってスージーさんの所へ向かってから、お願いする

ことにした。

スージーさんは寝椅子に身を預けている状態なので見下ろす視線かは失礼かもしれないけれども、椅子にふんぞり返ったまま頼む気にはなれなかった。

いくらロボットとはいえ、その労力はすさまじい量なのだから。

「喜んで。順谷さん、私達ロボットはやりがいのある仕事を与えられるほど嬉しいものはありません」

働く事が『喜び』だなんて、人間にとってなかなか考えられないことだけでも。

誰かに役立つことをする。それによって自分がここに存在してもいいと実感できる。という考えは同じなのかもしれない。

「キーワードに引っかけり次第、お伝えしますが、すべてのデータを処理できるまで2時間かかります」

「ならば順谷さん、その時間を休息時間にしてはどうでしょうか？ 私がウエストルム・キングダム内をご案内いたします」

『〜でしょうか？』と控えめに尋ねているものの、ソシエゴは案内役を務めたいらしい。

「大丈夫ですよ。アネシスと違って絶叫ものばかり選ぶことはありませんから」

「そう。なら頼むよ」

ソシエゴをがっかりさせたくなかったのもあるけども、施設内をゆっくり見て回りたいからお願ひすることにした。

「しつつかし、男3人で園内巡りというのも、むなしいものがありますな。ま、順谷さん、こればかりはどうしようもないのであきらめてください」

どうやらバッテリーもこの一行に加わるらしい。嫌じゃないから別にいいんだけど。

真夏の園内探索は、即座に中止となってしまうた。

園内用の携帯電話が鳴り、スージーさんの結果報告が届いた。

体内に携帯電話機能を持っているロボットはテレパシーと同じ力を使って、携帯に声を飛ばす。考え見るとものすごい事だと思う…。
「順谷さん。キーワードを『箱』のラテン語で検索してみたところ『占いの塔』にヒットしました。」

開園以降にその言葉の名前を使った改築設計ファイルがありました」

「はい、占いの塔に改築ですか…」

「改築？スイーजीー、それ本当か？」

俺の返答を聞いて知ったバッテリーは言葉を放った。いや、声を出しているものの、彼に組み込まれている携帯機能で直接スイージイにも送られているようだ。

「俺のデータにそんな記録はないぞ」

「ちよつとまってて。……（検索中）」

バッテリーが知らないのも無理ないわ。占いの塔の改築データはボス自らの命令で削除されているわ」

「え、データ削除…」

ロボットだから簡単に記憶を消すことができるから、やろうと思えばできるけれども…。

「おそらく、ボスは改築した事を隠しておきたかったのでしょね」
俺達の会話を聞いていたソシエゴは自分の推測を述べ、さらなる疑問を口と体内携帯電話から放った。

「でも『バッテリーさんの記録を削除した事の記録』がよく残ってましたね」

ちよつとややこしい話だけでも、そう言えばそうだよな。でも、スイージイさんの返答はさらりとしていた。

「ボスがこの行動記録をバッテリーだけ削除命令を出したからでしょう」

ボス、人間だからこそ持つっつかりミスなのか、そう仕向けたのか、今となってはわからないけれども。

「箱…。もし、それが『王冠を入れる箱』だったら、バッテリー

の記録削除はありえますよね」

ソシエゴは話を元に戻し、事の重大さに気づかせてくれた。

占いの館

真夏の太陽に炙りだされながら現場に到着した。

「…何か、アイスクリームをひっくり返したような建物だね」

コーン（持つところ）をひっくり返した…円錐の壁色は抹茶色で上の先に取りつけた球体はブルーベリーを思わせる色が塗られている。

色のせいなのか、この暑さのせいなのかはわからないけれども、アイスクリームが食べたくなってしまう。

塔と言ったものの1.5人分の高さしかなかった。

幅の方は俺達3人が手をつないで伸ばせるくらいあるけれども。

そこにある小さな隙間が入り口らしく中に入ってみると…薄暗い階段になっていた。

「これって地下？」

「ええ。地下室になっています。順谷さん足元に注意してくださいね。手すりを使った方がより安全ですよ」

薄暗いと言ったものの、そこは遊園施設。足元に青色の明かりが段をはつきりと照らしていた。

階段は2人ぐらい通れるもので螺旋状のもの。

外見を見て以外と狭くなっているのには理由があった。

「エレベーター…」

しばらく下りてから現れた、ガラス張りのエレベーターが中央に設置されていた。

「階段の上り下りは大変ですからね。エレベーターは設置してありますよ。」

順谷さんにも、こちらをお奨めしようと思いました。先に階段を利用されたので」

規則正しいロボットは、人間の行動に（よっぽどの事がない限り）

反対しないらしい…。

ちなみにエレベーターの入り口は階段の反対側にあり、この階段は非常用とのこと。

「…あつ」

とほほ、とため息をつこうしとた口は声をあげた。

ガラス張りの下りエレベーターが2人を運びすうつと通りすぎて行ったのだから。

「あれはエムカとアネシスだな。

ま、心配することはないよ、順谷さん。要請権にかかわる情報は問われない限りはなすことはないし。話したとしても、階下を管理するロボットが行動を拒否するから」

バツトレインは不安要素をフォローしてくれた。

けれど、俺の不安要素は別なところに名あった。

「アネシス…：元気なさそうな感じだったけれど、大丈夫かな」

通りすぎて行った時、向き合うようにたっていたアネシスの表情は心なしか沈んでいたようにも思えたから。

「そうですね？ 姉さんのことだから、騒ぎすぎてエムカに怒られたんでしょう、きつと」

「それは、ありえるなあ」

ありえる話…：だけれども、そうなのかな。

階段で地下にたどり着いたとき、退出しようとするエムカさん達と再び会った。

さつきと同じガラス越しだけれども、今度は目があった。

エムカさんはニコツと笑い、アネシスもニコツと。

「……………」

アネシスにパワフルさは回復していないらしい。

「順谷様。お待ちしておりました」

歩行に苦勞しない薄暗い空間でそれらしいロボットが出迎えてくれた。

黒いローブをはおったおばあさんロボット。

さつきバツテレインが言っていた占いロボットだろう。

占い師ロボットは、いかにも魔女といった皺をたくさん埋め込んで腰の曲がった優しい、陽気そうな老女ロボットだった。

「プログラム、コマンダー・ロボット、スージー-1からの報告を受けた承っています。

ただいまから、この『占いの塔』は、点検モードに切り替わります」

占いロボットがそう発言した途端、怪しげな空間が消えた。

天井からは普通の蛍光灯がともし占いの塔はただの無意味な空間になってしまった。

「あれ？点検モードに入ったってどういう事は、エムカさんたちは普通に占いに来たって事ですか？」

「そういう事になりますね。もちろん、プライバシーに関わる事なので、それ以上のことは、答えられません」

占いロボットの発言からして、そうらしい。

何を占っていたんだろう。それもアネシス付きで。

話が一段落したところで、携帯が鳴った。

あまりにも都合良く、しかも一段落したワントンポ後なので、恐らく、占いロボットがスージーに合図したんだろうな。

「順谷さん、スージーです。建物のデータ-を調べていたら、ボスの署名付きファイルが見つかりました。

読み上げてよろしいでしょうか？」

「はい、お願いします」

「1・占いの塔に隠した例の箱へは、室内を点検モードに切り替える。」

2・部屋の奥に1箇所だけ色の違うタイルが現れる」

スージーさんの言葉とおり、良く見てみると深緑色の床以外に緋色のタイルが目にと持った。

薄暗い営業モードで見つけるのは不可能だろうな。

「3. そのタイルを足で思いつき踏むと……天井が崩れる」
「げっ」

言われるがまま、思いつき踏んでしまった…。

俺はおそろおそろ天井を見上げた。

「…というのは冗談で。本当は床に穴ができるので、くれぐれも注意するように。…以上です、順谷さん」

「わああ〜」

俺が踏んだタイルを中心に直径2メートルの空洞が突如現れ、俺は言われるまでも落下。

「危ない」

…する直前にバッテリーの伸びた腕により助かったけれども。

バッテリーにお礼を言ってから、出来上がった穴を覗いてみると…けっこう深いらしい。でも、暗闇が邪魔をして推測できない。

「しかも狭…そうだな」

バッテリーは背中を押した。

「へ？うわああっ」

「百聞一見にしかず、だ。ソシエゴ」

…。ロボットじゃなくて良かった。

「バッテリー。足が損傷したらどうするんですかっ」

無事に着地できたらしくソシエゴの抗議が聞こえた。

「自分で治せるからいいだろうよ。」

で、ソシエゴ。下の様子はどうだ？」

ソシエゴも本気で怒ってないらしく、バッテリーの問いに答え
た。

「右側に1メートルぐらいの奥行きがありますね。その奥に50センチほどの直方体があります」

暗闇の中でソシエゴは明かりをつけずに答えることができた。そ

れができるのは、もちろん体内に暗視カメラ機能がついているから。

「重さは1キロもありませんね。爆発物らしき音や気配、信号とつたものは感じられません。順谷さん、上に持って行ってもよろしい

ですか？」

「ああ、お願い」

律儀な問いに返答すると、ソシエゴは、今まで気づかなかっただけでも設置されていた鉄梯子で上がってきた。

「箱……」

ソシエゴが老いたそれは鉄製の箱、というよりも宝箱であった。細工といったものはなくシンプルなデザインで、鍵の存在はないようだ。

「順谷さん、これは、やはり」

「とにかく、開けてみよう」

冷たくて固い感触よりも、刻一刻と明らかになる真実に神経が集中する。

「……………」

蓋を開けて、中には…書類らしきものがあつた。

「……。何か」

厚紙の2つ折りにされた紙が複数積み重なっていた。

俺の許可を得た二人もそれを手にして、開いてみる。

「わっ、待った。見ないでくれ、それはっ」

開けてからようやく気づいた。というより、何で気づかなかつたか…恐らく裏側になっていたから『それ』と気づけなかったからだと思う。

「…数字が書いてますね」

「わー。見ないでくれ。それは俺の」

…成績表。

「あっははははっ」

「笑い事じゃないですよ、エムカさん…」

時が流れて、その出来事を言い終えると大爆笑してくれた。

「でも、何でそんな所に？」

「さあ？でも…まあ、ボスは養父だし。『成績表だけは提出するよ

うに』と、言われてましたから」

ちゃんと送って、それを目に通したボスはある所に閉まっていた。

「はははっ。でも、おかしい……」

「エムカさんだって笑えませんかよ」

ツボにはまっていたエムカさんは、俺が差し出した書類を一見すると慌ててひったくった。

「な、何で私の履歴書がっ。……順谷さん、見たでしょ」

見なければ、それがエムカさんの履歴書で渡すことはできなかったけれども、とりあえず否定した。

「つたくも、ボスは……」

「……………」

………

「そういえばエムカさんも占いの塔にいましたよね」

……順谷君は、やっぱりボスの面影がある。

二重まぶたも長いまつ毛も変わらない。

「アネシスの感情にどう影響が出てくるのか見ようと思って」

「影響……ですか？」

ボスのクローン。

もちろん、私は別人としか思っていない。

思っていないけれども……視線が向いてしまう。

「アネシスは一番人間に近いロボットだから。人間っぽいこと、特に心理的な項をしたら、どんな反応が得られるのか、ね。」

もし、アネシスの感情コントロールする部分に『王冠を入れる箱』があれば、と、考えてね。データを取っていたのよ」

ウエストルム・キングダム王

年の差が離れているあの人に想いのある目を向けてしまっていたのに、今度は順谷君？

この閉ざされた王国にたった2人しかいなかった……

「もちろん、アネシスの巡回ルートをさぐって箱らしきものはないか、見たけれども……」

「さっぱりですか」

「ええ」

うなづいて、私は順谷訓の手がフォークをつかみ、肉を口に入れる動作を見つめていた。

そういえば、ここ飲食店だっけ。

順谷君が渡したいものがあるって言われて、夕食時だからご飯食べながらという事になったんだっけ。

遠い昔のように思えてしまう。

「……………」

ステーキセットを頼むのも、ニンジンを一切口にしないのも、ボスと変わらない。

変わらない……。

「あと1回ずつの選択になるわね」

「はい……そうですね」

「今度は順谷君から選んで」

「え……俺からですか」

エム力はうなづき、順谷の決心がつくまで身動きせず待った。

「……では、バッテリーを選びます。」

今日あったみたいに、どこかの建物を改築して隠しているんじゃないかと

「今回みたいにデータを削除されている可能性があるというのには？」

「そこは、スイーजीに頼んで、頼むって言っても、何をどうすればいいのかわかりませんけれど。あとは、バッテリーを連れまわして。しらみつぶしに探してみます。バッテリーが正確に記憶してある建物内部と違つところが、もしかしたらあるかもしれません」

「そうですね。」

では、私はソシエゴ・1ね。

お互いに頑張りましょう」

正直言つて、手を差し伸ばして良かったのか迷った。

暗闇で殺意を向けた以上。

でも、順谷君は握り返してくれた。

順谷君の温かい手。それから放れてしまった私の右手は支払書をつかみ、私は立ち上がった。

それから子供に言い聞かす母親のようにわかっていることを繰り返した。

「順谷君。要請権は、1体につき1度しか使えませんが、効力は王冠を見つけたすまでの間あります」

「はい」

素直な返答に微笑み返したエムカは順谷に背を向けた。

店員のあいさつを聞き流して外に出たエムカは暗闇が揺らぎ、近づくとロボットに気づいた。

「このままホテルに帰ります」

『はい』と答え、忠犬のように主人の後につくシुकクシャは、主人の静かに開く言葉を耳にした。

「勝敗は間近に迫りました」

「では。いよいよ王冠の場所がわかったのですね」

「……」

エムカの返答は表情によるものであった。前方にいるエムカの表情で確認することなく、シुकクシャは先の未来に喜びを感じとったのであった。

アネシス - 1

「……………」

明日に向けての不安と決意が胸の辺りでうずいていた。

その考えがふつとんでしまったのは、窓外に視線を向けたせいだろう。

「アネシス？何しているんだろ」

赤い警備服を着ているから一見すれば十分だった。

アネシスは店先にある通路をぼうつとした表情で通り過ぎていった。もちろん店に視線を向け、そこに俺がいることも知らずに。

涼しい空間と、半分以上残っているアイスクリームを諦めるのにたいした時間はかからなかった。

「アネシス」。おい」

ちよつと大きめの声をあげれば聞こえる距離しかないのに、アネシスが振り返ることも足を止めることもなかった。

「？」

アネシスの背はどんどん小さくなって闇が少しずつ彼女を覆っていく。それを見失わないように俺の足が進む。

閉園までの時はまだ長かった。

アネシスの背はアトラクションの放つ異名目な光色に変わり、または闇に染まった。

「もしかして巡回？」

セキュリティ目ロボットである以上、当然の仕事なのだから……。

ただの仕事ならば声をかければそれでいいはずなのだが。

「…やっぱり」

角を曲がった時、売店の明かりに照らし出されたアネシスの顔は昼間のものと変わらなかった。

アネシスに元気がない。

疑問と不安がまじりあつた俺は、移動する足に力が入っていった。アネシスが振り返れば直接聞いてみるもよし。振り返って俺に気づいた時、何らかの表情の変化が変えられるのではないかと思つて……。

じんわりと汗ばむ夏の夜。でも、暑いのは体の表面部分で残りは何も感じ取れない。

アネシスの背中が本当に消えたのはロボット製造工場であつた。王の手と口のある場所でもあるところ。

「仕事だつたのかな。……どっちにしろ、入れないけれども」
「どうしようか、待つべきか、戻るべきか。」

「……………」
待つことにした。

重要な仕事だとしても『どうした？元氣ないな』ぐらい言葉をかけてもいいはずだし。

「……………」
浮かび上がってきた汗が、体からすべり落ちそんな間の中で一つの変化が起きた。

「そこの方、何をなさっているのですか？」
背後から声が聞こえ振り返ってみると、アネシスと同じ服を着たロボットがいた。

いや、正確には紺色の警備服を着た女性型ロボット。
長い髪は一つの三つ綱にしているところはソシエゴが当初警備用になつていたので思い出させる。

と、のんきに感想を述べているところではなかった。
セキュリティロボットから見た俺は『工場前に立ち尽くす、怪しい男』なのだから。

「えと、アネシスが出てくるのを待っていたんです」
「アネシス？セキュリティ・コマンドーロボットアネシス-1で

すね」

それからロボットは俺の顔を一度見つめてから、頭上から足先まで目を通した。

「…これは失礼しました。後継者候補Aの大累順谷様でしたか」
巡回ロボットといえども、俺の存在は伝わっているらしい。

さすがであり、ほっと胸をなでおろすことが出来た。

「大累順谷様。今アネシス-1は業務中ではありません。御用があるならば、建物の中へどうぞ」

セキュリティロボットは、どこかに通信してアネシスの状況を引き出し、なおかつ俺にアドバイスをしてくれた。

「ああ、どうも」

と、言われ、ロボットに見つめ続けられては、動くしかないだろう。

アネシスには何て言い訳しよう…ありのまま話すしかなかなか…と
考えながら暗く長い通路を歩き…とめるしかなかった。

後を追い続けてきたアネシスの背中には座り込んだ高さにあった。

「違うの。アネシスが聞きたいことは、それじゃない」

「…り……」

アネシスは誰かと話していた。

低く、男の声…ボス？

「どうして…ボスは」

ボスの声に歯止めが利かなくなった俺は足を踏み出しメインルームに出ていた。

「……………」

ボスは…確かにいた。

ガラス張りの製造機に。

「映像…」

俺は改めてアネシスを見つめた。

「ねえ、ボス。意地悪しないで教えてよ」

近づき、小声とはいえ音まで放ったというのに、アネシスは背後

の存在に気づいていなかった。

「ボス」

『アネシス、順谷の重りになるなよ』

「ボス、教えてよ。アネシス、ボスの部屋で何も言ってくれなかったから。ここじゃないと話してくれないのかなと思って、来たのに……。」

どうしてボスは同じことしかしゃべってくれないの？」

……

ボスの声を拒否し理解しようとしないうアネシス達。

万能なる力を持つロボットのいたたまれない姿に心が痛くなった。

「久しぶりだな、順谷。お前は、昔と代わっていないようだな」

俺に視線を向けることはなく、初めて再会したかのような言葉だった。

でもロボットたちは、疑問すらもたないのだろうか。

この、視線を変えない、ただ再生されるだけの映像であっても。

ロボットたちは本物のボスと疑っていないのだから。

アネシスに向けた言葉も、そうなるんだろうな。

「お前達が後継者候補になって一晩がたった。気が落ち着いたところで『王冠』の探し方を教えよう」

「王冠の入っている箱を開けられるのは、一体のコマンダー・ロボットだけだ」

ボスは、プログラムされた映像と音声は1文字も変わらず繰り返して俺達に視線を向けることなく姿を消した。

「……………」

声をかけようか迷いながら、1歩前に近づいた時、アネシスの方でも気がついた。

「……………」

「あ、アネシス。ごめん、そのう……」

「……………」

「アネシスは何も言わず、大きな目を俺に向けているだけであった。ねえ。ボス、教えて」

「心臓が凍りつくような気がした。」

「…アネシスは俺をまっすぐに見つめ、そう言ったのだから。」

「…あ、アネシス」

「ロボットの目からではボスと俺は混合してしまうのか？と思ったけれども、何か様子がおかしい…。」

「アネシスの目はガラス玉を取り付けたように表情がなく、うつろで…表情が消えかかっている。」

「お…おしえて、順谷」

「元気を放っていた唇は1度開いてから言葉を放ち、目の前にいる者の名前を呼んでくれた。」

「どうやら、ボスと間違えたようではないのは確かだけれども…。」

「しゃがんで、疑問を口にしようとしたけれども、アネシスが先に聞いてきた。」

「アネシスは王冠を入れる箱を開けられるロボットなの？」

「それは、わから…。」

「人間に近い能力を持っているから、そうなるの？」

「……………」

「俺の声が届いていないのか？」

「だから、アネシスはこんなにも辛い思いをしなければならぬの？」

「おい、アネシス…どうしたんだ？お前、何か変だぞ」

「アネシスから表情が消えかかっている。変だ。」

「名前を呼び、両肩をつかんで軽く揺すろうとした。」

「固く、冷たいそれに触れた瞬間、彼女はびくと震えた。」

「教えて…。大好きな順谷を見ているだけで、こんなにも、悲しいおもいをしなければならぬの…。」

『大好きな順谷を見ているだけ…』

その言葉をアネシスは見つめながら言っていた。

でも…彼女に表情はなかった。

ロボットそのものに変わり、それから…

「アネシス！」

彼女から力がぬけ、その場に倒れこんだ。

腕を伸ばし抱きかかえようとしたけれども、見た目から想像もできないう重さに腕ごと床に触れる。

力を入れなおして抱きかかえてみるものの、今のアネシスから動いているものは一切なくなっていた。

「おい、アネシス。王の口と手」

今頃になって、間近にいる機械に気づいた。

「王の口と手。アネシスが変なんだ。まったく、動かない」

「…」

王の口と手は解答に数秒の時を必要とした。

「私からの応答にも反応しません。」

残念ながら、順谷様。私。王の口と手は、製造専門でありアネシス-1を診ることはできません。ただちに、ソシエゴ-1と連絡をとります」

ソシエゴは数分とたたず、現れ、微かだけれども不安を取り除いてくれた。

「姉さんのことだから、1日中走り回って、エネルギーが切れたんでしょう。念のため、精密検査をしてからじゃないと、確信することとはできませんが」

「…もしかして、俺が現れたからか？俺を見たたん、アネシスが変になった感じなんだ」

「順谷さんが心配する事なんてありませんよ」

ソシエゴは人を安堵させる笑顔を向けて、アネシスを軽々と持ち上げた。

「順谷さんを不安にさせた事については、ボスに報告しておかない

となりませんね。姉さんにお灸をすえてもらわないと」
何も言えないまま、俺はソシエゴの背中を見送った。

ソシエゴの言う、ただのエネルギー切れには見えなかった。
沈んだ顔で園内をうろついて。

ボスに会いたがって…

俺の存在に気がついた途端…

「エムカさんの所へ行こう」

会って話を聞こう。アネシスはなぜ沈んでいたのか。

エムカ

宿泊しているホテルにたどり着き、部屋の番号を見て回る…必要はなかった。

「マスターは、就寝されています」

彼女の忠実なるロボットシユクシヤが戸口の前で見張っているから。

「就寝したって、まだ九時なの？」

「マスターが就寝と宣言なさった以上。私は疑いを持ちません」
機械らしい言葉が返ってきたのと同時に、扉が僅かに開いた。

「シユクシヤ。順谷君だったら入れてちょうだい」

「かしこまりました、マスター。では、順谷様、お入りください」
主人の言葉に疑うことのないロボットは、反論、不満の表情すら見せず、扉を開けてくれた。

スイートまでとはいかないけれども、広い部屋だった。

さすがに人に尽くすウエストルム・キングダムの宿泊施設らしく、緑色を主調とし、調和された木製の家具が配置されていた。

部屋を知りつくしたエムカさんらしい選択部屋だと思う。

就寝宣言をしたとはいえ、黒スーツ姿のエムカさんは、ソファアをすすめ、紅茶を入れて向かいに座った。

「めずらしいお茶ですよ。ちよつと変わった味がするから、もしかしたら順谷君の口に合わないかも」

紅茶に詳しくない俺の目と鼻ではティーパックに入れたのと変わらないけれども…なるほど普通の紅茶にしては奇妙な味がする…。

返答は避けられぬ。

「エムカさん。教えてくれませんか？アネシスの事を」

「アネシスの事？」

「エムカさんと別れた後、顔色の悪いアネシスを見つけ後をつけました」

それを口にした途端、エムカさんの表情が心なしか険しくなった。「アネシスには『順谷君に会っては行けない』と要請したからです」。どうしてなんですか？どうしてアネシスは俺と会ってはいけないんですか？それと王冠となんの関係があるんですか？」

「あります。王冠を取り出すために必要なのです」

「なんのために？どうして」

「落ち着いて、順谷君」

「……………」

「私はアネシスだけが持つ感受性プログラムないし、その基板がどこかに王冠と呼ばれる何かがあるのではないかと考えました。感情をコントロールするその反応をみるためには、順谷君、あなたを利用するしかなかったのです」

「…それは、アネシスが俺に好意のようなものを持っているからですか」

「好意そのものですよ、順谷君。今まで見る限り、アネシスがここまで親しみを持った人は順谷君、あなたが初めてです。ボスでさえ、あんな反応はありませんでしたよ」

「…そうなんですか」

好意を持っているといわれ、今まで膨れ上がった『怒り』が薄れていった。

薄れて行き、とまどうようになってしまった俺は、とりあえず紅茶を含んで気分を変えた。

「……………」

そうなるはずだった。なのに…

カップを持つとうとした腕に力が入らなかった。

な、何だ？力が、体が…変だ。

「効いてきたようですね」

見開いた目は微笑するエムカさんに向いた。

エムカさんは手を離れようとしたティーカップを取り上げ机の上に置いた。

体がグラリと揺れた。体勢を立て直そうにも体が命令を聞いてく
れず、エムカさんの人間の女性の手でも簡単に押された俺はソファ
ーに倒れた。

この時になつて2人用のソファーに座らされた理由に気づいたが、
あお向けに倒れた状態で悔やんでも仕方がなかった。

「な、何…を」

「あれはティーパックに入れた紅茶に奇妙な味のする粉末をいれま
した」

「……………」

薬

「順谷君。全てあなたのせいよ。」

悩み考えている私の前で、楽しそうにしていたのだから」

見下ろすエムカさんに闇を感じた。

「だから、アネシスに順谷君に会わないように、自らの機能を停止
してまでも会わないように要請させたのよ」

言葉の衝撃に声を出すこともできなかった。

「でも、アネシスには間違いなく王冠があるわ。アネシス-1自体
が『王冠を入れる箱』なのよ。それを開けられるロボットはただ一
体。」

ソシエゴ-1のみ」

『あつ』と、声をあげたかったけれども、口が動かせないどころ
か、意識すら…

「順谷君、あなたは最後まで、王冠と関係のないロボットを選んだ
わね。」

馬鹿な子。もし、ソシエゴを選んだならば、教えてあげたのに…
でも、無理か。順谷君もアネシスに好意を持っているんでしょ？私
の話の聞き入れてくれなかったわね」

「……………」

順谷に返答をしめす表情はなかった。

そのまぶたは閉ざされ、エムカを見つめることもないのだから。

「順谷君の耳には入らないけれども、教えてあげる。

ソシエゴの要請は、アネシス - 1 を解体することよ。

忠実なるロボットは命令や要請を忠実に実行する機械だから…残念だけれども、2度とアネシスには会えないわね。

順谷君、残酷な命令を下さる私は恐ろしいかしら？でもねえ、あなたとアネシスが見せた無意識なことすべて、私には残酷でしかなかったわ」

エムカプログラム

「……………」
停止したロボットのようになった男をエムカは表情一つ変えずに見つめた。

「この男は……」

それから近づいてしゃがみ、順谷の頬に触れる。

「温かい」

これは人間……でも本物とはいえない。

「……………」

私は順谷君に好意を持っていた。でも、それは本当に1人の男として好きなのか？あの人のクローンだからなのか……。

「……そうなのかしら」

いや、そもそも。

私は本当にボスが好きだったのかもわからない。

機械だらけの孤独な城に住むただ1人の男だったから。そう思うようになったのかもしれない。

「……………」

それからエムカは手を離し、長い間、再び見続けた。

順谷の事……自分の思いが本当だったのか見分けるために。

長い事見つめ、エムカはぼつりとつぶやいた。

「……わからない」

この男を見つづけて鼓動が速くなることはないのに、自分以外の娘、アネシスが一緒にいるのは許せない。

「わからない……」

弱々しく同じ言葉を吐き出したエムカはふらりと立ちあがった。

「ちよつと出かけます。警備を続けておいてちょうだい」

扉を開け、命令を出すとそのまま、ふらふらとした足取りでホテ

ルを後にした。

私の脚はボスの私室へと運んでくれた。

後ろのエレベーターが閉まると、いつものように生存した時の映像が現れ、暗唱できるほど聞いた順谷君へのメッセージが流れ、そして姿を消す。

「……………」

足は進み、偽りでなく本物のボスがいる奥へ進む。

「ボス…」

私はロボットじゃないから、映像やこれが言葉を返してくれないのは百も承知だけでも…問わずにはいらなかった。

「ボス、あなたは何を望んでいるのですか？あなたのいなくなったこの王国は、どうしてほしいんですか？王冠を見つけたものには何を望んでいるのですか？」

「ウエストルムを。思い描いた通りに。あなただけの王国を築き上げてほしい」

すべての時が止まったかのように思えた。

聞き間違えることのできないボスの声なのだから。

呆然と頭が真っ白になったものの、その声がした後方へ向き。

見開いた目が元に戻っていった。

「スリージイ」

『眠り姫』の異名を持ち、めつたに動くことのないロボットだけれども、今は驚く気にもなれない。

「ノックもせず、入ってきてすみません。でも、ボス。あなたが出した条件をすべてクリアしてしまい、私に組み込まれたプログラムが発動してしまいました」

「プログラム？」

「ええ。」

1. エムカ1人で、この部屋を訪れる事
2. エムカ1人ないし、複数のものの中にエムカを含めた後継者

候補となった場合

3・後継者宣言をして、30時間以上たち、なおかつ王冠が見つからない事

4・エムカが精神的にダメージを持っていると判断した場合

その4つすべてがそろった場合、私は強制的にこの部屋へ入室しボスが録音したメッセージを流すようにプログラムされました」

「確かに……。揃っているわね」

「ボス。やはり、いけなかった事ですか？これは明らかに比例であることはわかっています。

……。

ボス、やはり、怒っていらっしゃるのですね」

「スージー。ボスは疲れて眠っているわ。怒ってなんかいないわよ」

返答しないのは怒りによる虫と判断してしまうスージーに違う解釈をさせてあげた。

彼女も万能たる管理ロボットであっても、機械なのだから。

「良かった。眠っていらっしゃるのならば、エムカ。起こさないように、下に移りませんか？

ボスが録音されたメッセージはまだ残っています。いくら、プログラムとはいえ、これもボスの命令であります。すべて実行しなければなりません」

「そうね」

「エムカよ。

毎日見るお前の表情がかげっていくのを見て、自分の体が急激に蝕んでいることを理解しないければならないようだ。

だから、スージー-1に言葉を残すことにした。

だが、このメッセージを聞く状態に、私のせいで陥っているようだな。すまない。

エムカよ。この王国の進化および末端の従業員すべてが王に従う。その王になりし者は、すべてが許される。華麗なる反映も、一瞬による方がいでさえも。すべて。

この者たちには『野心』というものがない。だから王に歯向かう者もない。すべては王の力による。王にも『ウエストルム』の言葉が適用されている。ウエストルム、あなただけの王国だ。責任重大なものかな』

スージーの口から流れ出るボスの声は優しく温かいものだった。目を閉じれば、ボスのがいるのではないかと思ってしまうほど。

『後継者はお前でも、私のクローン、順谷でも構わない……いや、王冠を手に入れたものならば、と思っている。これも、勝ちすぎるか？でも私も勝手にこの国を作り、新王になるためのルールを勝手に作ってしまった。勝ちなる王だ。』

エムカよ、お前が履歴書を持って現れなければ、順谷以外に考えられなかった。孤独なる王に日という存在はないと思っていたからだ。これは勝ちすぎるな。1人の生命を勝手に創っておきながらエムカよ。順谷の頭に王冠が乗らなかった時、あの子が1人立ちするまで見守ってくれ。勝ちなる王の唯一の頼みだ』

「……………」
返答を待っているかのように、しばらくの時間が流れてから、ボスの声が再び、流れ出した。

『エムカよ。候補となった今、お前はエムカ-1から人間に戻った。だが、お前が望むのならばロボットに戻ることもできる。すべてエムカ、君の判断による。…これも勝ちすぎるかな』

「勝ちすぎます」
ボスのメッセージがそれで終了し。もう2度とボスの映像やメッセージがないこともわかった。

「……………」
最期のメッセージなのに…あの人はとうとう何も言ってくれなかった。

ボス：あなたにとって私はロボットでしたか？それとも、人間でしたか？

勝手過ぎる想いだったとしても、私に言ってくれないのですね。

目覚めた後

自分の目が開こうとしたとき、生きているのからこそ開いたのか、そうじゃないのかすら、わからなかった。

「……ここは」
どうやら生きているらしい……辺りは倒れたときと同じソファアの上にあった。

それから胸から腹部にかけて重い。何かが乗っている事に気づき、それから慌てた。

「エムカさんっ」

俺の上に横たわっていたエムカさんはぐったりとしていた。

それどころか、冷たかった。

「エムカさん？どうしたんです？しっかりしてください」
起き上がってエムカさんを抱き起こしてゆずってみるものの、彼女の体は人形のように左右に揺れるだけだった。

「しっかり……シユクシャ」

エムカさんをソファアに寝かし、俺は扉へ向かった。

嚴重に警備しているシユクシャを呼んで、それから……

「……………」

扉を開け、シユクシャを呼ぶことはなかった。

扉が開かれたのと同時に、よりかかっていたシユクシャのボディが部屋に倒れこんできたのだから。

「……………」

金属の固まりが床に衝突し、足元に振動が届いた。

天井を向くシユクシャに表情も、目の焦点もなかった。

「これは一体……これは。どうなっているんだ？あれから……あれからどれぐらいたったんだ？」

シユクシャの足元に蔓が巻き付いていた。

「一体……」

扉の外は、それ以上に無残なものだった。

人がリラックスし、過ごしやすく泊まれるように施された建物のじゅうたんは、ほこりと土色へ変色し、ところどころに穴があいて至るところに草が生い茂り、蔓が床を壁を這って覆いつくそうとしていた。

天井というものはなく、過酷な太陽が惨状を照らしていた。

「これは……」

振り返った俺は、それ以上の惨状を目の当たりにするしかなかった。

王に忠誠を誓うすべてのロボットたちの無残な姿を

それが積まれた山を。

「うわあああつ」

叫び声が、自分の耳に響き……

目が覚めた。

「……………」

夢……

ここが現実で、さっきのは悪夢だったと判断するまでしばらくの時を必要とした。

辺りをくまなく見回して、訪れたときと何一つ変わらないことを確認しても、目は時計を探した。

新緑色の時計は休むことなく秒針を働かしている。

ここを訪ねる正確な時間はわからないけれども、数時間だけ過ぎたようだ。

「……………」

それでも、安堵のため息がでるまで、もう少しの時間がほしかった。

だけれども、俺に覆いかぶさる影がそれを許してくれなかった。

「そ……ソシエゴ」

背後に立っていたのはまぎれもなくソシエゴだった。

「順谷さん。エムカは、どこにいらつしゃいますか？」

人形のように。今のソシエゴに表情というものはなかった。それから両方の腕も。

「ソシエゴ…その腕は、どうしたんだ」

「もぎ取りました」

「誰が？」

「僕自身です。」

『要請権』の指名をしてくださったエムカさんは、僕にアネシス-1の解体し、そのどこかに組み込まれている王冠を見つけ出せとおっしゃいました。

でも、ご覧の通り、今の僕にはアネシス-1を解体する必要な腕がありません。作業ができないので、新しい指示をもらうため、この部屋を訪ねたのですが…エムカはどこにいますか？」

…人間の命令にそむくことのできないロボットは自らを犠牲にして、抵抗した。

大切な姉ロボットを守るため、いくら非情を持つロボットであっても思う心は存在していた。

「順谷さん。エムカは、どこにいますか？」

…それでも。ロボットは人間に従うのだ。

それは、あまりにも無情すぎて、今見た悪夢よりも悲しすぎた。

「エムカさんは…さあ？俺もわからない。ソシエゴ…君の腕がないということは…アネシスは？アネシスは元気なんだね」

「…。いいえ。姉さんは依然として機能停止状態です。姉さんを元に戻したいものの、エムカさんが命令した要請が優先となりますので…」

何てことだ…それではエムカさんを探さないか…いや、一度下した要請は王冠が見つかるまで続行されるんじゃないか…

「…何てことだ」

それじゃあ、王冠が見つかるまで、アネシスもソシエゴの腕も、

そのままじゃないか。

王冠を見つげ出さなければ、でも、どこに？

「くそっ」

湧き上がりどうすることもできない自分に、ただソファーに当たるしかなかった。

「どうすることもできないのかよっ。俺は」

情けない。何もできないでいる自分が…

「いや、何ができるはず…そうじゃない。何かしなければならんだ」

立ちあがり、扉へ走った。

開かれた扉に見張り番、シユクシャの姿はなく、ソシエゴが訪れたときにはもういなかったとのこと。（扉は口を使って開けたらしい）

俺はとにかく走った。

「順谷さん。どこに行かれるのですか？」

腕がなくバランスのとれないものの、それでも後を追うソシエゴに問われ、何も考えずに飛び出したことに気づいた。

「……………」

立ち止まり、懸命に考える頭とは裏腹に、目は遊園施設を眺めていた。

華麗に取りつけられた色とりどりの明かりはすべて消えていて、閉園を迎えていた。

その光景は、破滅を迎えたときのようで、頭は混乱した。

「メインで使っているビルか…エムカさんのところ」

それでも必死に考えた頭は2つの答えを出した。

冷静に考えれば当たり前前の回答であるのに。

「…ビルに行こう。そこにバッテリーがある」

唯一『要請権』の残っている彼の存在こそが頼みの綱だった。

王の責任

闇が覆うけれども外灯とソシエゴの誘導によりたどり着いた。

「順谷さん。アネシスが大変なことになっている」

自動扉が開いたとき頼みの綱はアネシスを抱きかかえ、これから外へ出ようとしていた。

それから

「順谷さん。エムカが…」

スリージイが開かれたエレベーターと共に現れた。

その後ろにいたシユクシャがエムカさんを抱きかかえて。

「……………」

万能なるロボットたちは指示を求めていた。

力のない1人の人間に向かって。

これが王と言うものだ。

これが王冠を乗せた者の現状だと。

呆然とする俺の頭に浮かんできた。

誰か？あの人しかない。

俺の本体でもある人。

ボス

ボス…あなたは問いかけていますね。

お前は、これに耐えられるのかと。

「……………」

あります。

俺は確かに、あなたのクローンです。まだ、学生です。王になる力すらありません。

でも、俺はこの道を選びます。

あなたのクローンだからではなく。

俺個人がとして、大累順谷として。

「……………」
いつのまにか閉ざされていた目が開いたとき、静止しているロボットたちの視線を感じた。

ソシエゴ。バッテリー。スージー。シユクシヤ。

エムカさんやアネシス達も。意識はないものの、どこかで俺を見ている気がする。

「……………」

冷静になった俺は、冷静ならば誰でも取れる対処をはじめた。

「まずは、エムカさんからだ。ソシエゴ。君が見た限りの状態はどうだ？」

「腕がない状態なので脈を取ったりできませんが……」

と言いつつ、ソシエゴはシユクシヤに床へおろすよう頼んでから、自分の頬をエムカさんの鼻に近づけた。

「呼吸は正常です」

「スージー、シユクシヤ。エムカさんが倒れたときの状況はどうだった？薬を含んだりしなかったか？」

「私はスージー-1から連絡を聞いて駆け付けましたので状況はわからないが、マスターに持病があると聞いたことはない」

「エムカはメッセージを聞き終わってまもなく倒れました」

「ソシエゴ。私は医療関係に詳しくない。こういう時はどんな状態なんだい？どうすればいい？」

ロボットは指示を求めなければ動けないけれども、適切な処置方法は知っている。

いくら、頑張るとはいえまだレベル1だから、レベルを上げるにも、まずは低いレベルからはじめなければならぬ。

それも必死になって。

ソシエゴは自分の部下ロボットを呼びだし、細かく調べさせた結

果、救急車を呼ぶ必要はないと答えたので、とりあえず、医療室へ運び、様子を見ることにした。

それから機能停止したアネシスは、そのままにしても異常はなく、日常管理も人間であることを宣言したエムカさんの時と同じく、アネシスの2桁ロボットたちに任せることにした。

それからソシエゴ。

ソシエゴの腕は治すことができず。でも、そのままほおっておいたら異常をきたすことがあるかもしれないと本人からの話を聞き、彼も機能停止状態になってもらうことにした。

「心配する必要はありませんよ。順谷さん。日常管理は2桁ロボットがやってくれますし。呼べば私は起きていますので」

「すまない」

情けない顔の俺にソシエゴは笑みを浮かべ少しだけ元気付けてくれた。

大量の先行き不安さえなければ、もっと元気になったのに。

こうして王国は一気に寂しくなった。

コマンダー・ロボットはバッテリーとスィージイだけとなり『要請権』もあと1つだけ。

「順谷さん。今の順谷さんに言える対処方法は、ただ一つです」

コマンダー・ロボットの集い場である部屋で不安にさいなまれていたとき、バッテリーが言った。

「順谷さん。あなたは休むべきです。でないと体を壊してしまいますよ」

…そういうえば、ここでスィージイにプログラム指示をだして占いの塔に行ったのは今日だっけ。

「…バッテリーの言う通りかもしれない。でも、ホテルに戻る気はしない。何か恐いんだ。今の状態のまま、あそこに戻るのが。」

バッテリー、ここで仮眠をとっても、コンピューターとかに支障はないかい？」

「ありませんよ。順谷さん、このバッテリーがお供します。1人よりも2人の方が安心できますし」

「スージーもお供します。2人よりも3人の方が心休まりますし」

「…ありがとう、2人とも。でも、充電しなければならぬんだろ」

「充電パックというロボット食料がありから大丈夫です」

「…。いや、お願いだから休んでくれ。お願いだから、俺に気がつかないでくれ。頼む…」

「…わかりました。でも、何か会ったら必ず声をかけてください。すぐに駆けつけます」

「…ありがとう」

2人が退室してから、表情を崩した。

今の顔は誰が見ても不安を感じるものだった。

ロボットたちの気遣いがプレッシャーとなつてのしかかってくる気がした。

さつきは『王として頑張る』と言い張ったはずなのに、もう、弱音が出てきてしまった。

情けない…。

ソシエゴまでもが機能停止しなければならぬようになったから、そのせいなんだろうけれども。

「…ふう」

誰もいなくなった空間で一息つくくと、無償にコーヒーが飲みたくなってきた。砂糖たっぷりインスタントコーヒーが。いや、ココアでも紅茶でもかまわない。

とにかく何か飲みたくなってきた。

「…飲み物、どこにあるんだろう？」

ロボットだから飲まないけれども…昼間、ソシエゴが運んでくれたっけ。

「でも、どこに？」

飲み物がほしただけに呼び出すわけにはいかないだろうな。… 1
人にしてくれだなんて余計なことを言ってしまったし…

「……………」
とりあえず思い出すしかない…え〜と、昼間。ソシエゴはどの方向からコーヒーを運んできたんだ？

「…扉」
この部屋にたどり着くには、地上から直通のエレベーターとそこ
の扉だけ…

「……………」
切羽詰った状態だというのに…何をしているんだろうか。

コーヒーを諦めて考えろという気持ちと、それでも一息つきたい
という気持ちが分離し争いを始めた。

しかし、このまま無駄な状態を続けていては、それこそ時間の無
駄でしかないので、抗争停止宣言策として『二ヶ所。めぼしをつけ
てダメだったら諦める』ことにした。

双方とも納得したので、俺は部屋を出て通路を歩き出した。

通路は集い場を囲むようになって、白色の壁と天井にロボットた
ちの空間を想わせるメタル色の床となっていた。

通路を進むと1メートル先に1つ、それから3メートル先にもう
1つの曲がり角が見つかった。

「手前…いや、奥の方…かもしれない」

そう確信したのは手前の方はさらなる通路があるのに対し、奥の
ほうは曲がってすぐに扉があった。

給湯室とかつて、こんな感じじゃなかったかな？

メインルームに運んで行くためのお茶は近場になければならない
よな、と判断して。

メタル色をした扉の前に立った。

自動扉だったから勝手に開き。

「……………」
間違いだったことが判明した。

「……………」

開かれた先にある部屋は暗室だった。

いや、扉が開いたことにより暗色が薄れ、灯った淡い光が少しづつ強くなっていった。

強くなつていき、十畳ぐらいの空間と棺おけのようなガラスケースが置かれていた。

ガラスケースに向かって太細様々なケーブルが天井から垂れ下がっていた。

ガラスケースに誰かが入っていたらしく、それはゆっくりとおきあがった。

「順谷さん？どうしたんですか？こんなところまで」

… バッテレインの部屋だった。

不安げな顔をして、わざわざ近づいてきてくれた俺に『何でもない』とはいえず。

「…知恵を、貸してくれないか」

と言うのが精一杯だった。

「もちろんですとも、順谷さん。さあ、こんなむさ苦しい部屋ではなく集い場に戻りましょう。ああ、コーヒー飲みますか？」

コーヒーにありつけたが。

実に情けない。

一人でコーヒーも入れられない事を知り、自分に対する嫌気が更に増した。

「……………」

「不安ですか？順谷さん」

顔を見たバッテレインが別の解釈をしてくれたけれども、俺は素直に首を振った。

「自分に嫌気がしているんだ。

ウエストルム・キングダムが危険に陥っているというのに…自分では何一つできない。何をやっても満足のいく成果は得られない。

それどころか、俺のせいでどんどん悪化していく」

「それは考えすぎですよ。順谷さんがいなければ我が王国は何度、滅亡したことが」

「買いかぶりだよ。それに、それは俺以外の人でも、人であれば、簡単に処理できることだし」

それ以上の言葉は生まれず。沈黙だけが過ぎて行った。

無音に近い空間で、唯一の解決策『王冠』の場所を考えたもの…いつのまにか眠っていた。

「…」

バッテリーに寄りかかった状態で目が覚めた。

もし、バッテリーの声に気づかなかったから、まだ、朝まで眠っていたかもしれない。

「エムカ？ここにはいないぞ…。意識を失って医療室にいる」

俺が眠っていることを知ってか、バッテリーの声は小さなものだったが、誰かと話しているようだ。

寄りかかっていた体を離し、辺りを見まして見るものの他の口ポツトらしき姿はなかった。

「なに、心配はいらない。それよりも、アネシス、お前さんの方はどうなんだ？」

「アネシス？」

予想もしなかった名前に声をあげると、バッテリーは体内にある携帯電話機能で離していることを説明してくれた。

「アネシス…」

声をかけてみるものの、アネシスの返答はなかった。

「すいません、順谷さん。これは体内の電話機能を使っているので、アネシスと直通できないんです」

「じゃあ…どうすれば」

と疑問を口にしたところで、園内用の携帯電話が鳴った。

「…。もしもし」

「…。順谷」

小さな声だけでも、それは聞きなれたものだった。

「アネシス。無事なんだね。一体、どうしたんだ？」

「…。順谷。本当に、本当にエム力はいない？」

まるで辺りを見まわしながら言っているような気がした。

「本当にいないよ」

「…良かった。」

アネシスね。エム力の要請でね、順谷と会っちゃいけないって言われたの。でも、これは会ったことにならないよね。会わないで話しているだけだから」

やっぱり、ソシエゴと同じパーツでできたロボットだなと思ってしまった。

行動Aを実行したくないため、何らかの理由、理屈をつけてBの行動で回避する。自ら腕をもぎとったソシエゴと変わらない。

「アネシス。大丈夫なのかい？」

「大丈夫だけれども、大丈夫じゃないの」

「どっちなんだい…」

「アネシスのボディは機能停止しちゃったけれども、中は精神プログラムは正常なの。だから、こっそり順谷に電話で話すことができるの」

「そういう事が」

「ごめんね、順谷。アネシス、何もお手伝いできなくなっちゃった。順谷のために、もっと一生懸命がんばりたかったのに…何もできない」

「それは、アネシスのせいじゃないよ。

そう。すべて力のない俺のせいだ」

俺は立ちあがり、バッテリーに背を向けて奥に向かった。

たくさんのモニターや機械のあるところへ。

プログラム

「バッテリーレイン？」

携帯を切り、何気なく見上げた時にはもう、彼の目は大きく開かれていた。

「バッテリーレイン、どうしたんだ」

充電切れか、それとも別の、新たな異常かと頭によぎった。

「……」

表情をなくしてしまったロボットは、その目から2筋の涙を流していた。

「バッテリーレイン？」

彼は、泣いていた。

ロボットなのに。

「候補者宣言し、バッテリーレイン-1に特殊感情プログラムが始動しました」

その声はバッテリーレインのものだった。でも、感情はなく、機械そのものの声で。

「これによりバッテリーレイン-1の精神プログラムを動かした時点で、このプログラムが始動いたします。」

あとは「要請権」を持つ者に開放宣言させられれば、箱は、開かれます」

一度口を閉ざすと、表情のなくなった場って連いは、頭上から脚まで視線を移動した。

「候補者A大累順谷様。あなた様にはバッテリーレイン-1の要請権があります。」

「ご宣言を」

もし、バッテリーレインの特殊なプログラムを発動させたものが要請権のない者だったらどなるのだからと、ふと頭によぎった。

でも、俺は運が良かったらしい。

「…。バッテリー。箱を開けてくれ。王冠の入った箱を」

『箱が開かれる』といわれたので、俺はそう素直に言った。

でも、箱はどこに？

『了解プログラム始動。バッテリー-1にデータ-『Crown』をアップデートいたします』

感情のこもっていない声で宣言し作業を始めた。

アップデートって、確か、ソフトの不具合を直したり、新しいバージョンを取り入れたりする事で、バッテリーの場合が多分『Crown』というデータをバッテリーの中に入れることなんだろうか。

バッテリー達コマンダー・ロボットは『Crown』の場所を知らないっていつてたから、アップデートによって『Crown』の場所を知るバッテリーになるのだろうな。

『アップデート終了』

「…バッテリー？」

俺はおそろおそろコマンダー・ロボットの名を呼んでみた。

彼は…にっこりと笑みを浮かべ、元のバッテリーに戻ったことを教えてくれた。

「順谷さん。どうやら私が『王冠を入れた箱』を開けられるコマンダー・ロボットでした。」

知らなかったとはいえ、いままでの非礼、お許し下さい」

「知らなかったんだから、仕方ないよ。」

それよりも、バッテリー」

「ええ。『王冠を入れる箱』ですね。それならば、ここにいます。そう言ったバッテリーは人差し指を自分に向けた。

「…？」

「私は『王冠を入れる箱』を開けられるコマンダー・ロボットであり『王冠』そのものなのです」

予期していない後半に瞬きしてから尋ねると、バッテリーはにこっと笑みを浮かべてから立ち上がった。

「百聞は一見にしかず、です。順谷さん」

バッテリーはローブをめくり、中に来ているランニングシャツの中かから十本の指を乗せて、そのまま、めり込ませていった。

いや、バッテリーのボディーに溝が生まれ、その中に指を入れたのだ。

そのま、上着をめくるように、金属製ボディーを左右に開いていく。

「面白い仕組みになっているでしょう、順谷さん」

「…空洞」

ボディーの中は暗色だけで、本来ロボットならばあるはずである、無数のケーブルや基板といったものは何一つ見当たらない。

「バッテリー、君は一体…」

「もちろん、ロボットですよ。半導体といった精密部分は頭に、その他は皮のほうに詰め込まれているだけですよ」

皮、開いた部分ことだろう。

『順谷さん、これが捜し求めていた『王冠』です』

発言のあと、ウィーンというわずかな機械音と共にそれが胸の辺りまで降りてきた。

『王冠』は、青色の淡い光を放つ輪だった。

「これが王冠…」

「さあ、順谷さん。私の中に入れてください」

「え、中に？」

「私が『王冠』そのものであると行ったのは、このことなのです。

この中にある輪は一体化しています。外れることのない、私の一部なのです」

「だからバッテリーが王冠そのものだっていうのかい」

「はい」

戸惑うものの理解したことを確認するとバッテリーは両脚、両腕のも動と同じように開けて人が入れる空洞を現した。

「順谷さんに合わせて手足、胴の調節をされます」

バッテリーの変わらない笑顔に決心し、近づいた。

近づいて、背を向けて後退しし、行き止まりにたどり着いた。

新しい王のめたの配慮なのか、柔らかいクッションが敷き詰められていた。

「扉が閉まります。じはらくの間、目を閉じたほうが良いでしょう」
バッテリーの言われるがままに従うと、目の前で閉まっていく
圧迫感と共に『このまま閉じ込められるのではないか』という恐怖
概念が現れたもののすぐに消えてくれた。

わずかな音をたてて下りてくる輪が額のあたりで止まると、調整
したらく、ゆるみがなくなった。

「手足の調整を行います。僅かに揺れますが、落ち着いていれば大丈夫です」

バッテリーの説明と下り、機械音が響いたけれども場って連が
言う『僅かな揺れ』は感じ取れなかった。

「調整終了。これから『王冠モード』に切り替わります。」

順谷さん『王冠モード』に入ると私との会話は一切できません」

「え、じゃあ、これからどうすれば、いいんだい？」

「王の口と手の所へ行ってください。」

移動は、順谷さんが普段歩くように手足を動かしてくれれば自由
に動きます。ただ、慣れるまで走らないほうがいいでしょう」

「…わかった」

「では、順谷さん。」

『王冠モード』に切り替わります」

宣言の後、近くに感じられたバッテリー連の気配が消えたような気が
した。

それから目を開けた。

暗色の世界を創造していたのに目が映し出す世界は、バッテリー
ン、いや『王冠』に入る前のと変わらなかった。

額にある輪のせいなのだろうか、それとも顔の先にある特殊な画

面があるからなのだろうかわからなかった。

手で触って確かめようにも、ロボットの腕ごと動いてしまうので、後で聞くしかないようだ。

「ロボットのの中に入って動かすとは……夢にも思わなかった」
今、置かれている立場を忘れ、感想が口からこぼれ落ちた。

「……………」
それから現実に戻った。

戴冠式

外側から見ると、どういふ風に見えるのだろう。

バッテリーが普通に動いているようにしか見えないのだろうか
な。

その中にいる俺も、いつものように歩いていた。

何1つ違和感を感じない。

照明のあるビルを出て闇の多い外に出て。

王冠を手にした俺は夢心地で進む。

閉園時間を過ぎた園内を進む途中、アネシスの警備ロボットたちの姿を目にした。

警備ロボットは、俺の方向を見るものの、中の状況に気づくことはなく、通り過ぎて行く。

長いような短い移動が終わり、王の口と手がいるロボット製造工場の前に立ち止まった。

最初。ここを訪れたときはアネシスやエムカさんの声があったから開いた。

2番目は、アネシスの閉め忘れ。

そして3番目は自ら開いていた。

「王冠を手に入れし者よ。そのまま、まっすぐ進んでください」

言われるままに進み、王の口と手のいるメインルームへ。

「とうとう王冠を手にしましたね、新王よ」

ガラス貼りの製造機の中に、王の口と手の映像が現れた。

「さあ、新王、順谷様。最後の仕上げです。我が中へ」

王の口と手の映像が消えて、ガラス製の筒が上へあがつていった。

「順谷様。軽く跳び上がればたどりつけますが、お手伝いいたしま

ようか？」

「いや、自分でやってみます」

王の口と手のあるところまで2メートルほど。

勇気を出して跳び上がってみる…と

ふわりと周りの景色が上昇し、思ってた以上に跳んでいた。

とはいえバッテリーの重たい金属製の大きな体。ある程度上がると、すぐに下降し、王の口と手の元へたどり着くことができた。

「新王。これから景色が一変しますが、あなた様は王冠の中にいますので、決して害はありません」

「それって、電気とか流れるって事ですか」

「そう言うことになります」

王の口と手の返答と共にガラスの筒が降りてきた。

「これから新王のデータ-を全てのロボット、機能停止中は後日となりますが、上書きいたします。」

それにより、あなた様はウエストルム・キングダム公式な王となります」

「…それって。これは戴冠式になるのかい？」

「はい」

「…。王の口と手、データ-が上書きされる前に答えてください。

俺が王になったら、エムカさんはどうなるのですか？」

「前王の発言ではエムカはエムカ-1の復権があります。」

すべては新王によるもの、ウエストルム・キングダムの言葉はお客様だけではなく、すべての人間に該当いたします」

ウエストルム、あなたがたの王国。

その言葉はすべてに従うロボットたちを年締めているのとはかり
思いこんでいた。

でも、この言葉には、すべての責任を背負うものにも指し示して
いた。

「…すべてはウエストルムのために、なのです」

ロボットは人のためにつくし、王は、ロボットのためにつくすこ

と。

「新王、データ・上書きを始めます。よろしいですか？」

「はい」

王冠の中にいるものの、一気に流れ込んできた水色の液体も、生き物のようにするりするりと下りてくる無数のケーブルも、間近にあるとしか思えられなかった。

それが王冠のボディにつながって行く感触が伝わって行く中、目に入りこむ映像は別なものだった。

自分の体が浮かび上がっているような気がした。

王冠というボディの中に入り、なおかつ王の口と手の中に入っているというのに、この目から入りこむ映像はすべてを無視した状態になっていた。

『特別モードに切り替えることを宣言します。』

> Program beginning <…

プログラムという名の機械語が耳に届く中、目に入る光景はどんどん上昇を続けて行く。

建物という天上をするりと通り抜けて

ロボット製造工場の奥嬢にまでたどりついていた。

「わあ…」

奥嬢から見渡す光景に歓声をあげ、目を開いたまま、閉じることはなかった。

閉園したはずの園内、すべてのアトラクションに明かりが点されていた。

そして、すべてと思わせるロボットが園内に現れていた。

『新王、順谷様。機能停止した以外、全てのロボットが現れました』
姿は見えないけれども、王の口と手の声がすぐ近くから聞こえた。

「すべてのロボットが…。園内に宿泊しているお客さんは、びっくりしてないかな…」

「ご心配に及びません、新王。純也様の頭上に王冠が下りた時点で、お客様には特別なイベントとして申し上げました。」

人体に影響はありませんが、混乱を防ぐ以上、室内からご鑑賞されるようお願いしました」

「なら、大丈夫だね」

「新王、大累順谷様。すべての準備が整いました。

データ-を上書きいたします」

王の口と手が開始の宣言をすると…

光が。淡い光が自分の体から生まれ出した。

胸の当たりで光るそれはどんどん大きくなり手足や髪の手先まで発光した。

体の隅々まで行き届いたそれはまぶしいほどに力を増し、そして頭上から一線が放出された。

俺の体から飛び出した光りは高く上がり、花火…そう花火のように、空高く上がり、そして無数に飛び散った。

無数に、ここにいる全てのロボットたちの分まで分かれ、消えることなく、そのまま落下していった。

落下し、吸収され、ようやく消えた。

ピピツという電子音が鳴り『上書き終了』とロボットが確認を唱えた。

一体一体、すべてのロボットが口々に発するそれは雑音というより騒音に近かった。

それから、辺りは静寂に包まれた。

ウエストルム・キングダムロボットたちは動くことを止めて、そして一方向を見上げていた。

工事前の屋上を。

新しき王を見つめるために。

こうしてロボットたちの新しい王が誕生した。

王国と人間世界

新王となったものの、その晩はホテルに戻った。

「……………」
起きて間もなくして、あの人が尋ねてきた。

「エムカさん」

エムカさんは相変わらず黒のパンツスーツでわずかに笑みを見せ
てくれた。

「お体の方は大丈夫ですか？」

部屋中に招き入れた時、彼女の後につくシユクシヤの姿かない事
に気づいた。

「ええ。疲れていたみたいだから。」

それよりもおめでとう、順谷君。あなたの完全なる勝利だわ」

その微笑みに俺の頬も微かにほころんだ。

それからしばらく間、無音の時間が流れた。

なんとも気まずいような、でも、いつまでもいたいような。

「…本来ならば、私は王国を去らなければならぬ。いえ、本当なら
ばここを出て人間の世界に戻りたかった」

「……………」

「でも、現実にはそうはいかない。」

まずはボスの埋葬。いえ、その前に警察に届けなければならぬ
わ

「…それは、どうしてですか？」

「いくらロボットたちのため、施設の運営するためとはいえ、これ
は死体遺棄になるから。こればかりは仮の前王、私の責任となりま
す」

「…でも、それは」

「これが現実とういうものなんです。順谷君」

「……………」

「順谷君、仮とはいえ、それが王というものよ。己の行動に責任を持つことが」

エムカさんは立ちあがり、退室しようとした。

「エムカさん。」

この1件が片付いた時、あなたは近くにいてくれますか？」

「……………」

エムカさんは足を止めて、じつと見つめた。

「刃を向けて、薬をもった女を？」

「……。でも」

「甘えないでちょうだい。」

王冠を手に入れることができた今、私の力は必要としないわ」

何も言えず、扉が閉まる音が響いた。

ウエストルム・キングダムが落ち着くと、彼女は姿を消した。

それまでの間、彼女はシユクシャと共に現れ作業をこなしてくれた。

優しく接してくれるものの、どこかロボットのようには思えた。

それは、ここを去るため、俺や皆に『情』を見せないようにしていたからなのだろう。

ただ1つ。

王国を去るとき、エムカさんは黒い服を着ていなかった。

黒のパンツスーツは、ボス、あの人の喪に服すためだからと、語ってくれた。

彼女は人へ。人間の世界へ帰って行った。

そうして、ウエストルム・キングダムに住む者は、ただ一人とな

った。

「だけど、一人じゃないから。」

「順谷さん、おはようございます」

開園前、集いの間に入る自動扉が開くと。

見えないところにいるスージーが最初のあいさつをしてくれる。

スージー - 1

ウエストルム・キングダムのプログラム担当。

「おはようございます」

大きな体型で建物を担当し、なおかつ王冠でもあったあるバツレイン - 1

「おはようございます。順谷様」

二人同時にあいさつを唱えてくれたのは、コマンダーが不在のため、臨時にサービス業務を担当するエムカ - 01とエムカ - 02

「おはようございます、順谷さん。まだ、大丈夫ですよね」

閉まったばかりの扉が開き姿を現したのは、衛生担当のソシエゴ

- 1

腕を取りつけて、いつものソシエゴに戻ってくれた。

それから、もちろん。

「おーはーよー、順谷。アネシス、今日は遅刻していないからね」
機能回復したものの寝坊癖が完治していないアネシス - 1

アネシスは好意を持っているとエムカさんや本人が言っていたけれど、アネシス、ロボットが持つ好意はどれほどのものなのかわからない。

まあ、これから長い付き合いになっていくのだから、これから考えようと思う。

「みんな、おはよう」

彼女たちはロボットかもしれない。

けれども、大切な仲間。いや、それ以上の存在。

「スージー。開園準備を始めてくれ」
彼女らと共に新しい朝が始まる。

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5710u/>

ウエストルム・キングダム

2011年7月29日03時24分発行